

【完結】 ONE PUNCH MAN
最弱のヒーローと時間
泥棒

春風駘蕩

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すべてのものに、始まりがある。

ヒーロー・サイタマの住む街で、突如人や建物が消滅するという事件が立て続けに起
きる。だが何故か、それを認識できるのはわずかなものたちだけであった。
事件解決に乗り出したサイタマたちは、『時の守護者』を名乗る少女たちにぶつかる。
いくつもの時代を超えて、最強のヒーローと最弱のヒーローが出会う。
超スケールアクションコメディ、外伝。

目次

目	次
一撃目 異変の始まり	十四撃目 理不尽の権化
二撃目 謎の少女	十五撃目 最強VS最凶
三撃目 消える記憶	十六撃目 最後の希望
四撃目 動き出した奴ら	十七撃目 高貴の白
五撃目 時を走る列車	十八撃目 諦めない奴ら
六撃目 イメージの魔人	十九撃目 未来を託す
七撃目 超・時間旅行	二十撃目 起死回生
八撃目 鬼と亀と熊と龍	二十一撃目 忘れられない記憶
九撃目 鬼の兄弟	二十二撃目 ヒーローの意地
十撃目 奪われた時の列車	二十三撃目 彼こそが真の英雄
十一撃目 牙王の凱旋	二十四撃目 次の駅は過去か未来か
十二撃目 蘇る凶敵	
133 120 108 95 82 68 56 45 33 22 6 1	274 258 247 232 220 211 199 186 173 159 147
288	

一撃目 異変の始まり

爆音が轟き、大きく揺れたビルが倒壊していく。まるで紙細工のように脆く崩れ落ちていくコンクリートの塊は、隣の建物を巻き込んで巨大な瓦礫の山を形成していく。

人々は逃げ惑い、悲鳴が耳障りに重なつて響き渡る。他者を踏み台にし、押しのけ、醜い本性を剥き出しにして蜘蛛の子を散らすように逃げていく様は、地獄のごときありさまであつた。

そんな中、積み重なつた瓦礫が揺れ、砂埃を巻き上げ、その下から巨大な何かが立ち上がろうとしていた。

土煙の中から現れたのは、ある昆虫の異形。節くれだつた長い足にツヤツヤと光る大きな羽、天を衝くよう伸びた角に硬い鎧のような外殻を持つたそれは、カブトムシによく似ていた。

だがその角は無数の棘が重なるように生えていて、脚も異様に長く太く多い。何より数十階相当のビルを軽々と超える大きさを誇る体が、その異様さを表していた。

協会によつてつけられた名称は「テラカブト」。

数年前に同時期に確認された「メガカブト」「ギガカブト」のボスとも言える存在であ

り、元は普通の昆虫であつた個体が環境汚染によつて異様に巨大化し、人を襲う怪人の一種と化した一体である。元が虫であるゆえ知能は低いが、強靭な体と硬い防御力により並のヒーローでは全く相手にならず、協会によつて「レベル・鬼」と認定された災害レベルの怪人であつた。

『防衛ライン、突破されました!!?』

『民間人の避難、完了していません!!?』

協会に属するオペレーターたちが懸命にヒーローたちをアシストするが、レベル・鬼の怪人に対抗できるヒーローは現状手が回らず、はつきり言つてお手上げ状態にあつた。

動けるのはせいぜいB級からC級の弱小ヒーローたちばかりであり、できることといえば民間人の避難誘導ぐらいである。

止める者のいないテラカブトは我が物顔で街を闊歩し、建造物を次々に破壊して被害を拡散していく。止まらない破壊音と衝撃に、人々は悲鳴をあげてめちゃくちゃに逃げていく。

傍若無人な破壊神を前にして、T市は壊滅へと向かおうとしていた。

この時までは。

逃げ惑う人々の中に、全く逆の方向を歩いているものがいた。怪人から逃げるのではなく、むしろ怪人に向かつて歩いて歩いてきている。まるで人の流れに逆らうようにして、目立つ格好をした一人の男が歩いていた。

その格好は、異様だつた。黄色いタイツのようなスースツに、赤い手袋とブーツを履き、白いマントを肩から垂らした、絵に描いたようなヒーローの格好。

そして、何より目立つのはその頭。眩い光を放ちながら怪人に向かつて悠々と歩いて行くその男の頭部は——ハゲていた。

男はまるで、テラカブトに立ち向かおうとしているようだ。だがそれは明らかに不利、無謀な挑戦に見えた。

自分に向かつてくる存在に気づいたのか、テラカブトの目がギョロリと男の方に向けられ、複眼の全てがその姿を映し出した。ずんずんと六本の足をコンクリートに沈み込ませ、ビルをも踏み潰せる巨体で男に迫つていく。

グオオオオオオオオオ!!?

本来昆虫にはないはずの声帯を震わせ、テラカブトは自慢のツノを振り上げる。その巨大にして堅固な角は、岩盤ごと男を叩き潰そうと勢いよく降ろされた。

人々から悲鳴が上がる。絶望が感染していく。ここで全て終わるのだと、全ての人間

たちが恐怖の渦の中に沈もうとした、が。

ドパン!!?

そんな轟音とともに、風船でも割れたかのようにテラカブトの頭部が一瞬にして弾け飛んだ。強固な鎧である甲殻が飴のように、内組織が細かな破片となつてぶちまかれ、町中に降り注いでいく。

頭部を丸ごと失ったテラカブトは一瞬動きを止め、ゆっくりと地面に体を傾けていく。巨体が地面に墜落して地響きを起こし、洪水のように体液を撒き散らして沈黙した。無敵を誇る昆虫怪人は、謎の一撃を受けて絶命したのだ。

その真下に、拳を突き上げた一人の男——先ほどテラカブトに向かつていったヒーローの姿があった。

ヒーローは呆然と、振り上げた拳を引きついた表情で凝視する。緑色の体液が付着した自分のグローブをじつと見つめると、くしゃくしゃに顔を歪めていった。

「……また、ワンパンで終わっちまつた」

彼は膝をつき、両手もついてガツクリとうなだれる。見た感じからしてやばそうな相手だつたから、ちよつとは期待したというのに、得た結果はいつも通りワンパンでの決着、これはあまりに——虚しすぎた。

「クソッタレえええ——!!?」

彼の名はサイタマ。ヒーローとして活動している者の一人。

自身の髪が禿げるほどまで修練し、その結果どんな怪人を相手にしても一撃で仕留めることができる実力を備え——代償としてやりがいを失つてしまつた、最強のヒーローである。

そんな彼を、じつと観察している者がいた。

「……やつと、見つけた」

ボロボロのロープをまとつた少女は、地に手をついて頃垂れている男を見下ろし、そんな謎めいた言葉をこぼしていた。

すると次の瞬間、ロープを激しくはためかせる風が吹き抜け、少女の前を黒い影が通り過ぎる。軽快な音を鳴らし、甲高い金属音を響かせる影が通り過ぎた時。

少女の姿は、跡形もなく消えていた。

一撃目 謎の少女

Z市。

そこは怪人ですらも寄り付かない、完全な無人^{ゴーストタウン}都市。

好き好んで住み着くものはよほど怖いもの知らずか、神をも殺せる力を宿した人知を超えた存在のみ。

そんな街の一角、誰も住まないアパートの一室に、その男はいた。昨日現れたレベル鬼のテラカブトを一撃で粉碎し、多くの人々を救つて見せた孤高のヒーロー・ハゲマントことサイタマが。

わずか三年のトレーニングの果て、ハゲと引き換えに最強と呼べるにふさわしい力を手入れた彼は――自室のフローリングの上で寝転がり、無気力に天井を見上げていた。

「…………やることねえなー」

ワンパンチで多くの人々の命を救つたサイタマは、ぶつちやけ言つて暇を持て余していた。

それもそのはず、巨大隕石すらも破壊してみせる実力があると言つても、それを知つ

ているのは彼をよく知る一部の者のみ。世間一般では彼は、他のヒーローのおこぼれを得て成り上がったインチキの嘘つきと認識され、蛇蝎のごとく嫌われている。

そんな扱いであるから、もし怪人や災害があつたとしても誰も彼を呼ぼうとはしない。頼ろうとはしない。

彼が今まで対応してきた怪人や怪物は、偶然彼がその場にいたかニュースを見たかでしか遭遇し得なかつたものばかりだ。たまにパトロールしているが、それでも遭遇は稀であつた。

ゆえに、それがない時間をサイタマは無駄に過ごす他になかつた。

「失礼します、先生」

グデーッとだらけているサイタマのいる部屋に、ある訪問者が現れた。背の高く筋肉質な、金の短髪の若い男だ。

だがその目は白目にあたる部分が黒く、瞳は機械的な光を放つていて、首から下も鋼鉄に覆われていて、わずかながら金属音と機械音が聞こえる。

彼の名はジエノス。家族の命を奪つた仇を討つためサイボーグとなり、現在はサイタマにほぼ強引に師事を受けているS級ヒーローの一人である。

「先生。また先生と俺宛に手紙が届いていますよ」

そう言つてジエノスが持ち込んだのは、ガサガサと音を立てるダンボール箱。

それを見たサイタマは顔をしかめ、億劫そうに起き上がりつて恨みがましそうに睨みつけた。

「俺のつづーかほとんどお前のじやねーか。いいよ見せなくとも」「すみません。前回のようにまた一通でも入っているかと思いまして」

「お前さりげに失礼だぞ」

S級ヒーローとして公式に認められ、めまぐるしい功績を挙げているジエノスとは真逆に、サイタマは間違った認識をされているB級ヒーロー。以前届いた手紙には、ジエノスへのファンレター以外に心ない誹謗中傷の書かれた手紙が混じっていたものだ。

本人は「暇な奴がいるな」と全くへこたれた様子はなかつたが、ジエノスは当時差出人を特定して報復しようとしたほどひどいものだつた。

ゆえに自分から期待はしないつもりのサイタマだつたが、何と無く気になつてダンボールの中を荒らすのだつた。

だがすぐに氣落ちしたように肩を落とした。

「……案の定お前のファンレターばっかりなんだけど」

「以前とは違い、先生宛の批難の手紙はないようですね。ま、少しは学習したということでしょう」

若干期待していたのか、サイタマのテンションの落差が著しい。次第にその無表情が

苛立たしげに歪んでいった。

「ないならないでちよつと腹立つけどな。……ここに住んでんの俺なんだけど」

なぜ家主（自称）の自分ではなく押しかけ弟子のジエノスに配送物が多いのか。そちら辺のことについて、小一時間送り主に問いただした気分になつたが、すぐに面倒臭くなつてやめた。労力の無駄で腹が減るだけである。

ふと、腹が減るという単語でサイタマは、冷蔵庫の中身がもう底を尽きかけていることに気がついた。

「あ。そういうや食材ねえんだつた。ちよつと買つてくるわ」

「先生。俺も行きますよ」

強さの秘訣を知りたいと、ほぼ勝手に住み着いているサイタマに家賃まで払つてているジエノスが甲斐甲斐しく共を申し出る。

げに尊いのは、彼のその忠誠心である。

さて、食材の買い足しのために無人の乙市から隣町へと移動したサイタマとジエノスだが、二人が目立つことはその時あまりなかつた。

というのも、ヒーローという者たちは皆基本的に、自身を目立たせる派手な格好をしたがるものが多く、人々はそちらを強く記憶しているものであるからだ。特にサイタマ

はそのあまりにも特徴の薄い顔、ジエノスは衣服で機械部分を隠しているため、人々が気づく確率はそう高くなかった。

「……ん？」

のんびりと歩いていたサイタマが、ふと何か違和感に気づく。なんとなしに振り向いて見て、目に入ったものに違和感が確信に変わった。

様子の変わったサイタマにジエノスも気づき、足を止めて振り向いた。

「どうしました、先生？」

「いやさ。俺の勘違いかもしれないんだけど……あそこでかいビルなかつた？」

サイタマの指差す方向に、ジエノスもちらりと目を向ける。示された方向は確かに無数の企業のビルが乱立していた区域で、大きなものから小さなものまで幅広く建設されているはず。しかしそんな中で、ある企業のビルがひときわ大きく、その繁栄ぶりを顕著に表していたとうつすら記憶していた。

だが、そのビルの姿は今は見えず、ビル街の中にぱつかりと空間を作っていた。代わりに建っているのは、他の企業とそう変わらない高さの無数の建物だけ。

その様はまるで、その部分だけ景色から切り取つたかのような違和感を感じさせた。「そう言えばそうですね。確かあそこには大手企業の入つたビルが建つていたはず……」

戦闘特化とはいえるサイボーグであるジエノスもはつきりと記憶していて、現状との差に訝しげに眉を寄せた。

何かしらの事故で解体でもされたのか、とひたいて人差し指を当てて情報を他所から検索してみるも、これといった案件は思い浮かばなかつた。それどころか、そんなビルが建つていたという記録も企業についての情報さえも探し出せなかつた。

いよいよジエノスは、自身の記憶と外部のデータの差に困惑の表情を浮かべた。

「……どういうことだ。検索結果に該当する建造物がない……？」

「やっぱ俺の勘違いだつたか？」

「いえ、俺にも覚えがあるのでそういうわけではないかと……しかしやはりヒットしない？ バグか……？」

ここまで違和感が大きいと、機械の身とはいえ少々不安になつてくる。もしかしたら自分の体の中で何か重大なトラブルが起きているのかもしれない。

ジエノスは一度サイタマに向き直り、一声かけてから行くことにした。

「すみません先生。少し気になるのでクセーノ博士のもとでメンテを受けてきます。ついでに、あのビルについて詳しく調べておきます」

「おう、わかつた。遅くなるんなら先帰つてるわ」

「はい。ではこれで」

ぶらぶらと手を振られ、ジエノスはさつと頭を下げる走り出す。コンマ以下数秒でジエノスは自動車並みの速度に移行し、みるみるうちにサイタマのもとから見えなくなつた。

（自覚している限りでは違和感はない……少し厄介な状態かもしけんな）

ジエノスはしばらく助走をつけてから跳躍し、建物の屋根を伝つて目的地へと急ぐ。別に急ぐものではない。健康診断ぐらいの気概で青空の下を駆け抜けていった。

だが、こういつたバグを放置するとまた別のバグを誘発する可能性もある。放置するよりは、早めに対処してもらつた方が万一一の事態にも備えられるというものだ。

（油断で窮地に陥る。俺のかつての汚点をまた晒すわけにはいかない。……何より、先生にまた無様な姿を晒したくはないしな）

かつて油断と慢心で機能不能にまで追い込まれた経験を持つジエノスは、二度と醜態をさらすまいという確固たる意志を持って空を跳ねていった。

一方、残されたサイタマはジエノスの去つた方をぼーっと見上げ、軽くため息をついた。

「サイボーグも大変だな。……つづーかビルのことは別にそんな気にしてないんだけど」

思つたより重要視させてしまつたことに悪いことしたなーと思ひながら、自分も買いたく行るために踵を返す。今日の夕飯何にすつかなー、とぶらぶら歩きながら考える。

そんな時、向こう側からふらふらと歩いてきた子供の姿が目に入った。
若干薄汚れたパーカーにヨレヨレのズボンという、思わず眉をしかめる格好をした子供が、フードで顔を隠しながらおぼつかない足取りでサイタマのいる方へと歩いてくる。

ちよつと心配になる格好してんなー、とサイタマが一瞬思つたとき、ぐらりと体を傾けた子供にもろにぶつかってしまった。

「うおつと」

「！」

不意のことで、サイタマもつい反応が遅れてしまった。

サイタマはビクともしなかつたが、子供の方はぐらりとバランスを崩して転びかける。すぐにサイタマが手を貸してやり転ばずに済んだが、つい掴んでしまつた子供の腕の細さにわざかに目を見張つた。

「おい、だいじょう……」

「ダ、ダめんなさい！」

子供はサイタマの顔を見ることなく、終始怯えた様子で必死に顔を隠して走り去つて

しまつた。やはり足元がおぼつかず、よたよたと不恰好な走り方をして離れていく子供に、サイタマはしかめつ面でため息をついた。

「……なんだありや」

子供は謝りはしたもの、サイタマに顔を全く見せずにさつさと走り去ってしまった。

最近の子供は無遠慮というか、生意気な奴が多いなど世の中に呆れていた時だつた。
「きやああああああああああああ!!?」

耳を塞ぎたくなる、けれどサイタマには聞き慣れた甲高い声が、あたりに響き渡つた。振り向いてみればいきなり大きな爆発が起こり、吹き飛ばされたトラックがサイタマめがけて落ちてくるのが見えた。サイタマは難なくそれを片手で受け止め、ぽいっと邪魔にならないように傍に放る。

爆発から逃げ惑う人々の隙間から様子を伺つてみれば、その中心には奇妙な姿の団体があつた。

全身を鋼鉄で覆い、鋭利な棘や鉤爪で武装した黒いモグラのような怪人が複数と、青い体にコウモリに似たマントを羽織つた怪人が、道を我が物顔で闊歩していた。どちらも全身から光沢を放つており、尋常ではない危険性をうかがわせる質感を伴つていた。

「化け物だ——!!?」

「逃げろ!!? こっちに来るぞ!!?」

怪人たちとは凶悪な顔で人々を睥睨し、まっすぐにサイタマの方に向かつて歩いてくる。爆煙を背に堂々と進むその姿は、普通のものたちにはまさに悪夢のように思えたことであろう。

「あれ？ 僕か？」

自分の方にわざわざ歩いてくることに気づいたサイタマが、ちょっと期待するように声のトーンを上げた。ヒーローとしての知名度が低いせいか怪人自ら挑んでくることなどなかつたので、ちょっとワクワクしてしまつた。

「よつしやあああ来いやあああ！」

「がああああああああ!!?」

そういうことなら喜んで相手をしようと、サイタマは自身のうちに蘇りかけた感情に気づかないままポーズをとる。

怪人たちもそれに応じるように、サイタマに向かつて全力で走り出していた。

強くなりすぎて、いつのまにか無くしてしまつていた大切な感情。それが今、ふつふつと湧き上がり始めている。怒り、焦り、恐怖、自分よりも圧倒的に強い敵を前にした時にいつも渦を巻いていた感情が、勝負を挑まれたことで今蘇ろうとしている。サイタマは今、喜びを覚えていた。

そうだ、自分は、これを求めていたのだ。引き締まる緊張感、人々を躁躍する敵へ燃え上がる怒りの炎、道の相手に抱く恐怖の闇!!?

今まさに彼の中で、戦いの高揚感が蘇ろうとしていた――!!?

「うおおおおおおおお!!?」

「がああああああああ!!?」

だが、凶悪な顔で迫っていた怪人たち、全身の力を漲らせるサイタマの横を華麗にスルーしていった。

激突など一切することなく、一人虚しく構えを取るサイタマを完全に無視し、彼の後ろに向かつて走っていく。一瞥もくれることなく、むしろ邪魔そうに若干顔をしかめながら。

なぜか、虚しく風が吹いた気がした。

「…………あれ?」

しばらくして、サイタマは誰も自分の方に向かつてこなかつたことにようやく気づく。

誰もいなくなつたその場で一人佇み、寂しく風が吹き抜ける道の真ん中で立ち尽くして いた。

「…………ああ、そうかそうか。怪人が俺を無視しやがりますか」

ふつふつと、先ほどとは全く別の感情が湧き上がった。ビキビキと血管がサイタマの額に浮き上がり、表情筋がヒクついて笑顔のように歪んでいく。

今まさに彼の中で、苛立ちが最高潮に達しようとしていた。

——上等だ!!?

路地裏の暗闇を、先ほどサイタマにぶつかつた子供が走り抜けていた。足取りは今にも倒れそうで、見ているだけで悲痛な感情が芽生えそうなほど弱々しい。

しかしその子供は決して足を止めることはなく、背後から迫る脅威から逃れようと必死に足を動かし続けていた。

「ハツ……ハツ……ハツ……!!?」

しかしその足も、ついに完全に止まってしまう。疲労が全身に絡みつく錘となり、立ち上がる気力を奪い去ってしまう。

それでも目には恐怖が募り、ガクガクと震える足で必死に前に進もうと、抗おうとしていた。

だが、そんな子供を突如、大きな影が覆つた。

「みいつけたア……！」

「!? い、嫌つ……!!?」

頭上から顔を覗き込んできたコウモリの怪人を前にし、子供は悲鳴をあげて尻餅をついた。

みつともなく震えて涙をにじませる子供に、コウモリの怪人は心底愉快そうに笑い声をあげた。

「クヒヤヒヤヒヤ!!? 哀れなもんだなあ、最初に一度俺を倒してみせたお前が、今度は真っ先に俺にやられちまうんだからなあ……まあ、どうでもいいけどなあ」

他のモグラの怪人も追従するように笑い声をあげるが、がたがたと震える子供には反応すら返すことができなかつた。バカにされ、見下されているというのに、それに反論する勇気も余力もこの子供は持ち合わせてはいなかつた。

「おいおいどうしたよ、あの時のお前はもつと威勢があつただろ!!? まあ……こっちの方が艶りがいがあるけどなあ!!?」

コウモリ怪人は愉悦に満ちた下卑た笑みを浮かべ、コウモリの翼に変化した自身の指を見せつける。鋭利な輝きを放つその指はきっと、子供の肌なら容易く切り裂くことができるだろう。そしてそれを楽しむほどの残虐性を、この怪人は滲ませていた。

「生きて連れてこいとは言われたけどよお……足の一本や二本ぐらいはいいよなあ!!?

「ヒイツ……!!?」

頭を抱えてうずくまる子供に向けて、コウモリの怪人とモグラの怪人たちが一斉に襲い掛かった。鋭利な羽が、モグラたちの両腕の斧や鉤爪やドリルが、幼き命を外そうとし逆に満ちた形相で飛びかかっていった。

力のない子供に、それに抗う余裕などない。ただただ恐怖心に支配され、硬く身を包めてうずくまる他になかった。

「がああああ!!?」

そしてその狂人が、柔らかい皮膚を切り裂こうとした、その時だつた。

「よつ」

「ぐわつはああああああああああああああああああああ!!?」

気の抜ける掛け声とともに尋常ではない衝撃に襲われ、コウモリとモグラの怪人たちは一瞬で天高く吹っ飛ばされた。

鋼鉄の鎧や武器は一瞬で粉々に破壊され、四肢がありえない方向に折れ曲がつて酷い有様になる。どす黒い色の血反吐を大量に撒き散らした怪人たちは、上空まで跳ね上げられるとそのままドツカーンと真っ赤な炎を上げて爆散してしまつた。

「……なんだつたんだあいつら?」

相変わらずあつけなく終わってしまった戦闘に虚しい気分になりながら、サイタマは先ほどの怪人たちに微妙な違和感を感じていた。

怪人にもレパートリーがあり様々な姿のものがいるが、今回の怪人は別種の歪さを持つているよう思えた。人間から変じた怪人があんな風に人型を保つたまま異形になることがあるが、それとも微妙に異なる気がする。

首を傾げて、何がしたかつたのかよくわからなかつた連中を思い出す。コウモリの怪人はどうにも別に用があつたようだが、何をしようというのか。

一人で顎に手を当てて考えていると、背後でドサッと何かが倒れる音がした。振り向いてみれば、先ほど襲われていた子供が倒れこんでいた。命の危機を脱して安堵したのだろう。

「……おい、どうした？ しつかりしろ」

グイグイと肩を押していると、子供が被つっていた汚いフードが外れて子供の顔があらわになつた。

少女だつた。汚れてはいるが幼いながらも整つた顔立ちで、テレビのアイドルにも匹敵しそうなぐらいだ。

サイタマが呼びかけ続いていると、少女は真っ白な髪の下の瞼をわずかに開いていく。長いまつ毛に縁取られた瞼の下から覗いたグレイの瞳が、ぼんやりとサイタマの顔

を写していた。

「……やつと……会え、た……」

そんな言葉を残した少女は、小さな笑みを浮かべたまま気を失つたのだつた。

三撃目 消える記憶

「緊急の要件つてのは、一体何なんだい？ 童帝くん」

無数のモニターと計器に囲まれた、作りかけの機械の部品が転がっている一室。近未来的なデザインの、機密性の高いそこはS級ヒーロー・童帝の研究室。

そこへ現れたのは、A級1位のヒーローにして有名なアイドルであるアマイマスクだつた。

「もうじき大事なライブを控えているんだ……それを邪魔するだけの意義がある話なんだろうね」

「もちろんですよ。むしろあなただから呼んだんです」

呼び出した本人である童帝は何やらモニターに向かつて操作を繰り返していたかと思うと、アマイマスクの前にいくつかの画像を展開させた。

「……これは」

「見ての通り、これは二年前に建設されたショッピングモールの記事です。しかしこの場所は、二年以上前までは大規模なコンサートホールでした」

「知ってるよ。以前施設を利用したことがある」

「では次に、このビル。大手企業の店舗が多数入った建物です。ここは三年前までは、大きな劇場がありました」

「それも知っている……で、それがどうかしたのかい？」

次々に覚えのある画像を展開され、アマイマスクは苛立つた様子で尋ねる。彼は無駄な時間を過ごすのは嫌いだが、意図の見えない質問で翻弄されるのも嫌いだつた。

そんな彼に、童帝は真剣な表情で見つめて問い合わせた。

「……気づいているんでしょう。ご自身の記憶の食い違いに」

「…………」

アマイマスクは口を閉ざし、童帝の目を見つめ返す。

それを肯定と受け取った童帝は、構わず説明を続けた。

「興味がなかつたために気づくのが遅れましたが、このコンサートホール、僕の記憶ではつい数日前まで存在していました。この劇場も同じく……あなたもそう思つている、違いますか？」

「……質問の意図が読めないな」

否定も肯定もしない。すでに確信を持つて尋ねてきているのだろうと思い、アマイマスクは視線を外す。

「確かに君の言う通り、コンサートホールも劇場もつい最近まで使つた覚えがある。僕

の記憶と事実に食い違いが起きているのは確かだ。だがそれはただの偶然というだけだろう。騒ぐほどのことじや……」

「お前ら二一人だけならな」

さしたる問題ではないと判断しかけたアマイマスクの背後から、新たな声がかけられる。

「……なぜ君達が？」

「童帝からメッセージを受けてな。気になつたんで来てみたのよ」

そう答えたのは、研究室の入り口近くで佇んでいるS級ヒーローの一人、アトミック侍。そして同じくS級ヒーローであるクロビカリの二人だつた。

葉を咥えて佇むアトミック侍の隣で、クロビカリが不思議そうに首を傾げていた。

「それより本当なのかい？　ずっと俺の勘違いだと思つてたけど

「…まさか、君達も妙な記憶違いが生じていると？」

「おうよ。つい二日前に行つた料亭がレストランに変わつていた。ど忘れするはずがねえ」

「先週行つたスポーツ用品店がいつの間にかなくなつてたんだ。他の人に聞いたら五年も前になくなつたって言られてさ」

「現に四人全員に同じ症状が起きているんです。偶然では片付けられませんよ」

「……五人だ」

不意に割り込んだ声に、童帝たちは一斉にその方向に振り向いた。

アトミック侍と黒光りを押しのけるようにして現れたのは、同じS級ヒーロー・閃光のフラツシユであつた。

「フラツシユさん！」

「俺にも、記憶のズレが生じている。まさかとは思うが、何者かの手による妨害かと考えている」

「そうかもしませんね。……でも僕らに気づかれることなく、そんなことが可能なのかと思つて」

頭脳が常人離れしている童帝はともかく、戦闘能力に特化したS・A級ヒーローの意識をかいぐり、記憶に何らかの干渉を行うことなど可能だろうか。童帝にはそれが一番疑問であつた。

「協会にはこのことは？」

「一応事実確認のために問い合わせましたが、僕らと同じ人はいませんでした。……協

会の職員、全員がです」

「ヒーローだけに、この症状が見受けられるということか？」

明らかな異常に、流石にアマイマスクも表情を改める。

日常生活に多少難が生じる程度の症状と思つていたが、この状況が人為的なものであつた場合、それが可能であると言つことが問題であると考えられた。

(どこの誰かは知らないが、この僕に対して随分と舐めた真似をしてくれる……)「認識を改めよう。我々には確かに、謎の記憶障害が生じている。人為的なものか自然的なものかはわからないが、何かしらの原因があることは確かだ」

アマイマスクの結論に全員が頷く。我が強すぎてウマが合わないことが多いS級ヒーローだが、ある程度の指針ぐらいには従う懐の広さはあつた。

「だが目的がわからねえ……人為的な症状ならこんなことをして何の意味がある?」

「いずれにせよ、それを成せる存在か現象があるということだ。早々に対処せねばなるまい」

「そうですね。なるべく早く他のヒーローたちと連携を取る必要が……」

話がまとまってきたところで、今後の行動について詳しく決めようとした童帝だったが。

思わぬタイミングでアマイマスクが歩き出し、研究室の入り口を潜つてしまつた。

「あ、アマイマスクさん!?!?」

「話は終わつただろう? 事情はわかつたから、僕は仕事に向かわせてもらうよ」
「言うだけ言うとさつさと出て行つてしまつたアマイマスクに続くように、一仕事終え

た感丸出しでアトミック侍たちもぞろぞろと歩き出して行ってしまった。

「礼を言うぜ。お前が言わなかつたらただの勘違いで終わるところだつた」

「氣をつけるよ。じやあね」

「あつ、ちよつと……！」

それ以上何も話す必要はないとでも言うように、あとはみんなバラバラに分かれて
いってしまふ。

ただ一人残された童帝は、心底あきれた様子で肩を落とすのだった。

「……ほんつとに勝手な人たちだなー」

全員の協力を期待していた天才少年は、最高の頭脳を持つてしてもうまくいかない関
係に頭を悩ませるのだった。

「……先生、一体何が起つたんですか？」

自分の体のメンテナンスから戻ってきたジエノスは、サイタマの部屋に戻つてくるな
り開口一番にそう尋ねた。

それも当然、普段サイタマが利用しているはずの布団の上には、見知らぬ少女が寝か
されているのだから。しかも、何か悪い夢でも見ているのかうなされているようであ
る。

「よおジエノス。もうメンテナンス終わつたのか？」

「はい、異常は何も見つからなかつたようなので……それよりも先生。この子はどうしたんですか？」

「怪人に襲われてたのを見つけてな、病院に連れてこうかと思つたんだけど……」

そう言つて、サイタマは布団の端をめくつてジエノスに見せる。

彼の衣服の端は、眠つたままの少女がしつかりと握りしめていて離す様子がなかつた。

「全つ然離してくれねえんだけど、どうしたらいいと思う？」

「……うなされてるようですし、もうしばらくそのままにしてあげたほうがいいのは。それよりも、まずは医者に見せるべきでは……」

「いやそれもそうなんだけさ」

痛いところを突かれた、と頭をかくサイタマ。どこかその表情は気まずげで、気になつたジエノスが尋ねようとした時、ピンポンとめつたにならないインターホンが鳴り響いた。サイタマの返事も聞かぬ間にガチャリとドアが開き、一人の大柄な男が姿を現した。

「おーい、サイタマ氏。こないだ言つてたゲーム持つてきたんだけど……」

平均身長を頭一つ二つ分は越し、髪は金のオールバック、相対するもの全てにに緊張

を与えるいかつい顔、その左側には激戦を思わせる三本の傷跡がある男。その名はキング。

ヒーローランキングS級7位に位置する存在である。

……と、知られているが、実際は別のヒーローの戦果を彼のものと勘違いされ、あれよあれよという内に祭り上げられてしまつた、ただの無職のゲーマーである。

「あ、キング。いいところに来た」

「え？」

サイタマはそのことを知つてゐるが言いふらすつもりなどなく、むしろ今は彼を、この状況を解決する助つ人のように招き入れようとしていた。

「……へえ、じやあその子が怪人に狙われてたんだ。でもなんで病院とか警察に連れてかなかつたの？」

「一応探したんだけど、近くに見つかんなかったからめんどくさくなつた。あと服つなだまま離してくれなかつた」

「適當すぎやしないかサイタマ氏」

男三人で胡坐をかき、布団の中で荒い息をつく少女を囲む。どう見ても怪しい絵面だつたが、言つたら最後空気がより悲惨なものになりそうだつたため、だれも何も言わなかつた。

「それに何もそんなに遠くに探しに行かなくたって、Z市の隣ならいくらでも……」

そう言つてキングは、自分のスマホを操作して最寄りの病院を検索しようとする。ゴーストタウン化しているZ市は無理だろうが、隣町ならいくらでも少女を受け入れてくれる病院ぐらいあるだろう。

そう思つていたのだが。

「……あれ、ヒットしないな」

キングの思惑は外れ、一番近い病院でも車で一、二時間という距離にしか見つからなかつた。さすがに福利厚生的な意味でダメではないだろうか?と思つたが、何度検索しなおしても結果は同じだつた。

「あつれー?」

「それで先生。この子はこれからどうするおつもりで?」

いくら待つても結果は同じだろうと、ジエノスはサイタマに今後をうかがう。

「ずっとこのまま、ここにおいておくつもりではないでしょ?」

「とりあえず、目え覚ますの待つてから考える。なんで怪人に追われたのかとか聞いときたいし」

腕を組み、眉間にしわを寄せながらサイタマはそう答える。

あの妙な怪人はすでに倒したが、今後も似たようなのが現れるようならまた狙われる

かもしだれない。何処かに預けるよりは、近くで守っていたほうが安全だ、そう考えていた。

とはいって、弱っている少女をこのままにしておくという選択肢は、選びたくはなかつた。

「爺さんとかに医者の知り合いとかいないかなって思つたんだけど……なんか今忙しいみたいでな」

「そうでしたか。俺も医療に関してはさっぱりですので……」

「悪いけど俺もそんな知り合いはないなあ」

「とりあえず片っ端から知り合いに声かけようと思つたんだけど、俺そんなに知つてゐやついないつて気づいた」

大の大人三人がそろつて、一向に事態を好転させられずにいる。なんとも情けない光景であつた。

「どつかにいい医者の伝手持つてるやついないもんかねえ……」

相変わらずの無表情でサイタマが天井を仰いだ時だつた。

再びドアベルが鳴らされ、またも返事を聞かぬままに訪問者が現れたのだ。今度は、複数人。

「お邪魔するわ」

颯爽とフローリングをすべるようにして姿を現したのは、妙齢の黒髪の美女。切りそろえた髪は艶めいて輝きを放ち、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいると、いうモデルのような完璧なプロポーションの持ち主。

B級1位、地獄のフブキは妖艶で冷たい美貌を巡らせると、部下の黒スツツたちとともにすかすかと押し入ってきた。初登場時と同様、相変わらずの女王っぷりである。

「さあ、今日こそ言つてもらうわよ。我がフブキ組の傘下に入るつてね」

上位のヒーローたち、とくに実姉であるS級2位の戦慄のタツマキに対抗するため、急速に順位を上げている新人ヒーロー・サイタマを配下に置くべく、最近よくこの部屋を訪れるようになっていた彼女。

容姿と同様、かなり高飛車な性格であるため勧誘方法も強引で、温厚というか無関心気味なサイタマもあきれ面倒くさがる相手なのだが。

「……あ、いた」

この場においては、まさに天の助けともいえる人材であった。

四撃目 動き出した奴ら

「命に別状はないです。このまま安静にしていればじきに目を覚ますかと」

眠りについていた少女のバイタルを確認した女性の黒スーツが、そうフブキに報告する。ヒーローになる前は看護師を目指していたという彼女は、フブキに呼ばれてすぐさま経験を発揮していた。

「そう。ありがとう、下がつていいわ」

「はい、フブキ様」

ほほえみとともにフブキは部下を送り、部下の女性はそれに誇らしげに笑みを浮かべる。

問題が簡単に解決したことに、サイタマも感嘆の声を上げていた。

「助かったフブキ。初めて仲間が多いお前のところが羨ましいと思った」

「ようやく私に組するメリットが見えたようね。歓迎するわ、ようこそ我がフブキ組へ

……

「よし、腹減ってきたし飯でも作るか」

「手伝います」

さらりと勧誘をスルー、というか聞こえなかつたふりをし、台所に向かうサイタマ。放置されたフブキはまたいつかのようにながつくりと頃垂れていた。

「後であいつにも食べさせてやらねーとな。おかげって、どうやつて作るんだっけ?」

「先生、まずは米を用意しないと……」

「サイタマ氏、持つてきたゲームやつてもいいかな?」

「……私の分もあるでしようね?」

ジト目でサイタマを睨むフブキを横目に、キングは暇をつぶそうとテレビの電源を付ける。入力切替ボタンを押そうとした時、ふと映っていたニュースに目が行つた。

『――現場から、生放送でお送りしています! 突如現れた巨大な怪人は現在、F市中心に向かつて進行しています!』

「……あん?」

聞きなれた町の名前に、台所で野菜を洗つていたサイタマが反応した。

平穏な街が一変、数十メートルはあるうサイみたいなウシみたいな怪物が大暴れし、突進しては巨大なビルを次々に破壊して回つていた。すでに何名かヒーローが出動していたが、レベルが違うのか片っ端から打ち上げられていた。

「近いな。F市つて、さつき俺とジエノスが行つたばつかだぞ」「食事の前に向かいますか、先生」

エプロンまで装着していたジエノスが右腕の焼却機関を起動しながら尋ね、フブキもガタツと腰を上げかけた。キングはちょっとだけ動悸を激しくした。

『F市在住の方は……ザザツ……速やかに 難を——いそい……』

『サイタマ氏、このテレビなんだか調子悪いよ？ 買い換えたほうがいいんじゃない？』

「マジか。そんな金ないのに……」

情報が欲しかったのに、先にテレビのほうが音を上げそうになり、サイタマは若干焦つたように冷や汗をかいた。一応ヒーロー協会から賞金は出るが、それは怪人を倒したときか事件を解決した場合であり、最近あんまり依頼が来ないサイタマはほぼ金欠状態であつた。

話題が脱線している間に、ニュースのほうでは一段と被害がひどくなっている。レポーターまで命の危機にさらされていた。

『皆さんは速やかに……あぶなつ……ザザツ——て下さい、このBody! 匠の技による最高級の品物なんですよ！』
『素晴らしいですね！』

「……は？」

思わず、その場にいた全員から気の抜けた声が漏れた。

先ほどまで鬼気迫った様子でリポートをしていた女性の姿が消え、いきなり通販会社

の社長がドアップで現れたのだ。

「何の脈絡もなく通販始まつたぞ」

「ちょっと、どうなつてるのよ？ 誰かチャンネル変えた？」

「いや、触つてないはずだけど」

困惑気味にキングが答える。何もしていないので勝手にテレビのチャンネルが変わ
るなど、ホラーヒミていて近づきたくもなかつた。

サイタマは気にはなつたものの、さして深く考へることもなく自分のなすべきことに
専念することにした。

「ま、いいや。とりあえずさつさと行つて——」

腰を上げたサイタマとエプロンを外すジエノスが外出の準備を始めようとする。

その時、ジエノスのセンサーが激しく警報を鳴らした。

「！」

ジエノスの機械の目が外に向けられる。熱・音・光のセンサーがジエノスに、急速な
勢いで近づいてくる何かがあることを知らせていた。

「高速接近反応、来ます……この数は!?」

一瞬で性格な数が把握できないほど大量の反応に、流石のジエノスも驚愕に目を見張
る。

その直後、サイタマの部屋の壁をぶち破りながら一体の怪人が姿を現した。

青いコウモリに似たその怪人は、剥き出しにした牙で笑みを浮かべると、奥で苦しげな寝息を立てている少女を見つけて笑い声をあげた。

「ゲハハハハハ!! ようやく見つけたぜえ、愛しのみ」

「俺の部屋に何してくれてんだ」

「げぶはああああああああ!!」

何度も何度も家を壊されてきたサイタマが、今までの分の苛立ちも込めた拳を軽く怪人に向けて放つ。その一撃だけで、コウモリの怪人は断末魔の絶叫とともに爆発四散してしまった。

しかし襲撃は一度では終わらなかつた。ぽつかりと空いた壁から、こんどは蟹やサイに似た怪人がぞろぞろと這い上がつてきた。

「ヒヤツハー！ そのガキよこ」

「だからてめーらオレの部屋に何してくれてなんだよ!!?」

連續キレ気味パンチ!!?

家具を踏みつけながらズカズカ上がり込んでくる怪人たちを、サイタマの怒りの拳が次々に吹き飛ばし血飛沫を上げさせる。悲鳴さえ残らず粉々にされて行く姿は、あまりに哀れであつた。

あつけなく消しとばされる怪人たちを見てサイタマは一旦深く息を吐いて落ち着くが、ジエノスのセンサーは未だに危険を知らせていた。

「先生、どうやら外にまだ複数待ち構えているようです」

「いい度胸だ。とりあえず全員ボコボコにしてやろーじゃねーか！」

「その案には私も賛成ね」

「あの、サイタマ氏？」下手に突つ込むより、ここで籠城しながら戦つたほうがいいんじやないかな？」

サイタマたちの背後から、ドツドツドツドツと凄まじい爆音が断続的に響きわたっていた。

音の元は、いつの間にか少女の方に寄つていたキング。彼が戦闘態勢に入るどこからか聞こえてくる“キングエンジン”と呼ばれる駆動音だーーーと言われているが、実際はただビビりすぎて心臓の音が漏れてしまつていてるだけだ。

（あの子の安全を考えて、先にそばに控えていたのね。たしかに、非戦闘員は優先的に守らないとね……）

（この男……やはり侮れん）

キングへの評価・警戒度を上げるジエノスとフブキであつたが、ぶつちやけ大きな勘違いである。

このような勘違いによつて、現在のキングの地位と評価は構成されてしまつてゐるの
だつた。

「邪魔するやつらはぶつ殺せえええ!!?」

「どきやがれクソがあああ!!?」

見下ろせば、閑散としていたはずの自宅の前が無数の黒っぽい怪人の集団で埋め尽く
されていた。

動きを見せないサイタマたちにしごれを切らしたのか、怪人たちが次々に壁をよじ
登つて向かつてくる。無数の異形たちが群れて向かつてくる様は、害虫がひとかたまり
になつて向かつてくるかのような恐怖を催させた。

「つーか多すぎじゃね!!?」

あまりの多さに思わずサイタマの口から声が出るが、最近では怪人が向こうからやつ
てくることは珍しくなつたために、内心で少し期待していた。

「上等だ! かかるといやあ!!?」

半壊したベランダに出て、まとめて迎え撃つてやろうと身構えるサイタマ。その姿は
まさに、か弱き人々をその身一つで守り抜くヒーローそのものであつた。

不退転の覚悟で、数えるだけで絶望しそうなほど大勢の怪人たちを迎え撃とうとし
た、その時だつた。

「ギヤアアアアアアアアアア!!?」

「うおおお!!?」

今まさにサイタマに襲いかかろうとしていた怪人たちが、突然横からの衝撃で吹き飛ばされた。緑色の巨大な影が通り過ぎ、怪人たちをはね飛ばしていったのだ。

危うく一緒に轢かれかけたサイタマはとつさに引き、超スピードで過ぎ去つて行く何かを凝視した。

「何だ!!? 何が起こつた!!?」

その正体を見極めようと目を凝らし、サイタマは言葉を失う。

遠く空に見えるのは、直方体の鋼鉄の箱に車輪がついた、レールを伝つて進んでいく乗り物らしきもの。何もない空中に枕木らしきものが展開し、その上を鉄の道が走つて、その乗り物を導いていた。

「何だあれ……!!? 電車か!!?」

これまで見たこともない、SFに出てきそうな乗り物を見て、やや興奮気味に声をあげるサイタマ。

その背後で、玄関の方のドアが勢いよく開かれ、一人の少女が険しい表情で飛び込んできた。

「見つけた……! 早くこつちに!!?」

奇妙な服装の少女は寝かされている少女を見つけると、うなされているのにも構わずにその体を抱き上げ、玄関の方に連れ出そうとする。

慌てて、サイタマがその暴挙を止めようと駆け寄った。

「な、何だお前!!? おい、そいつどこ連れてく気だよ!!?」

「ああもう鬱陶しい!!? 邪魔するんじゃないわよこのハゲ!!?」

「んだとコラア!!?」

自分が最も気にしていることをばかにされたサイタマが、怒りの声をあげながら玄関の外に飛び出して行く少女を追う。

少女がどこへ向かっているのか、そしてどこからきたのか考える間も無く、サイタマは強烈な光が刺してくる扉の向こうへと飛び込んで行つてしまつた。

「先生!!?」

「サイタマ氏!!?」

あつけにとらっていたジェノスたちも、慌ててサイタマと少女たちの後を追いかけ る。

そして気づかなかつた。

扉の外に見える光景が、この世のものとは思えない奇妙な世界であつたことに。

「……取り逃がしたってのか？」

ある乗り物の中の座席に座る一人の男が、足元で頭を下げるコウモリの怪人の発した報告に眉を寄せる。

毛皮を継ぎ合わせた衣服を纏つた、山賊や盗賊のような格好をしたたくましい体つきの男を前に、コウモリの怪人はすっかり縮こまっていた。

「おい、俺は言つたよな？ すぐに連れて来いつて。……なのにやられておめおめ帰つてきただと？」

「す、すんません。でも妙に強えやつに守られてて邪魔されちまつて——」

言い訳を口にするコウモリの怪人の姿が、次の瞬間には消え失せていた。壁に叩きつけられたとか、踏み潰されたなどの比喩表現ではない。元からそこには何もなかつたかのように、消滅してしまつたのだ。

「弱えやつには任せられねえ。てめーら、次失敗したらわかつてんだろうな……？」

「ヒ、ヒイ……！」

一部始終を見せつけられた他の怪人たちが、ガタガタと震えながら頷く。

本来、怪人が徒党を組むなど滅多にあることではない。人間の犯罪者とは異なり、頂上的な力を持つ彼らはその力に任せて大暴れするだけのいわゆる災害の一種であり、手を組む必要などない。

しかしこの場にいる怪人は皆一つの意志の元に集い、その筆頭たる男に従つてゐるのであつた。

男はいらだたしげに酒瓶を煽ると、少し離れた席に座つてゐるスーツの男に声をかけた。

「手下が使えねえと、上が苦労するよな。：なあ、オーナー？」

「さあ？ 私に手下はいませんので、そのお気持ちはわかりませんねえ？」

声をかけられた、紳士然とした中年の男は横目を向け、周りを怪人たちに囲まれながらも平然とした様子で答えた。

そんな気丈な男性の返答に、盜賊のような男はあざ笑うように足を組んだ。

「フン、どうだかな？ あんただつて今まで散々あの小娘のことを利用してきただろ。何の力もなかつたただのガキを、電王として祭り上げたのはほかならぬあんただろ？」
ガタツと席を立ち、盜賊はオーナーと呼ばれた男性の顔を覗き込む。

その目には、強い侮蔑の感情が宿つていた。

「……お前は俺と同類なんだ。見下すんじゃねえよ」

殺氣をぶつけられても、オーナーは表情を変えることはない。聞いてゐるのかすらも怪しい様子で、席に座つたまま無言を貫いていた。

その様子にやや不満げな様子の盜賊であつたが、やがてその口元を醜く歪め、再び席

について窓の外を眺めた。

「いい機会だ。あいつの力がどれほどのもの確認するとしよう
飢えた獣のような、凶暴な光を目に宿す盗賊の男。
その瞳に映っているのは、たった一人の少女であつた。

」

五撃目 時を走る列車

「——傷の具合は、大したことはなさそうね。よかつた……逸れてからずつと不安だつたんだからね」

座席に横に寝かされた少女の汗をぬぐい、もう一人の少女がほつと安堵の表情を浮かべる。その笑みはどこか、手のかかる弟に対する姉のような慈愛があふれていた。

「……なんなんだ、こー？」

そんな少女たちのやり取りなどよりも、上下ひつくり返つた体勢のサイタマには見過ごせない問題があつた。

慌てて謎の少女たちの後を追いかけ、玄関のドアをくぐつたと思えば、見たこともない狭い空間にいたのだ。冷静になつてみると、規則的な振動が体に伝わつてくるのを感じた。

「いつの間に電車なんて乗つてたつけ？」

「いや、普通に部屋のドアをくぐつただけだつたよね‥‥？」

フブキもキングも予想もしない事態に目を見開き、列車と思わしき室内を見渡しながら身構える。当然、キングのエンジンは鳴りっぱなしであつた。

「先生、見てください……窓の外を」「ん？」

見た目とは裏腹に感情の起伏の激しいジェノスの、妙に引きつった声に啞然としたサイタマが振り向く。彼が指差す方向を見て、サイタマの目も大きく見開かれた。

ジェノスの指差す先、列車の窓の外に広がっていたのは、奇妙な色彩の空と、どこまでも広がっている砂漠の世界であつた。

「うおおおお!? なんじやこりや!?」

「うるさいっての!!?」

見たこともない光景にサイタマが驚きの声を上げていると、看病をしていた少女がいらだたしげに怒鳴りつけた。

「まつたく……部外者まで乗つてこないでほしいわね！」

サイタマや、怒号によつて我に返つたジェノスたちは、そう肩を怒らせる黒髪の少女を見つめ、眉をひそめた。

「なんだお前」

「それはこつちのセリフよ。勝手にミライを連れて行つたと思つたら、こんなところにまでついてくるなんて……あんたたち一体何者よ!」

「おいお前、勝手に先生を誘拐犯扱いするとはどういう了見だ?」

ジエノスは自分の師が見当違いの濡れ衣を着せられていることに怒りを覚え、説教をする勢いで両目を光らせる。

「先生はヒーローとしての職務を全うし、あの少女を保護していただけだ」

「どうだか……あんたたちもどうせ、ミライの力を利用しようとでも思つてるんでしょ！」

「あの……さつきから全然話が見えないんだけど」

「何よ…………！」

キングにまで怒鳴りかけた少女の表情が、一瞬で真顔に変わる。

少女の剣幕に実は悲鳴をこぼしそうになつていたキングは、言葉を失つている少女に訝しげな目を向けた。

「驚いた……なんでの KING が一緒にいるのよ」

「普通に遊びにきてただけだぞ」

サイタマがボソリと呟くも、驚愕の中にいる少女の耳には入らない。

彼女の視線は次に、鋭い視線を向けるフブキとジエノスにも向けられた。

「ていうかよく見たらあんた……鬼サイボーグよね？ それにそっちのあんたは地獄のフブキ？」

「…ようやく気づいたか」

「あら、私のことを知つてゐるなんてなかなか殊勝ね」

意外と知名度が高かつたことに、このメンツで順位の低さと弱さを気にしているフブキが機嫌をよくする。

しかし少女は、サイタマには訝しげな視線を向けるだけであつた。

「……そつちのあんたは悪いけど知らないわ。誰？」

「なんだとコラ」

「まあ、いいわ。S級ヒーローやB級1位のヒーローならまだ信用できるわ。……さつきは悪かつたわね。ちょっと頭に血が上つてたのよ」

「……色々と事情があるようだな」

チンピラのように険しい目になるサイタマを放置し、話し始めた少女にジエノスが厳しい目を向ける。ここまで流されるだけで、何も重要な話を知ることができていなかっためだ。

「とりあえず詳しい話を聞かせてもらおうか。まずは、あの怪人たちについて、そしてこの列車について、何より……その少女について」

「……私の名前はハナ。……あの子の名前は、野上ミライ。時を走る列車で過去と未来を駆け、時間の運行を守る守護者。その名を——電王」

少女ハナが口にした言葉に、ジエノスは即座に大きく目を見開いた。

「時を……!?」まさかこれは、タイムマシンだとでもいうのか!?」

「簡単にいえばそうね。そしてミライは全人類でも有数の電王になれる存在……あいつらはそれが許せないのよ」

「さつきの怪人達か」

サイタマの家を襲撃した無数の怪人たちのことを思い出し、ジエノスたちの間にざわりとどよめきが走る。サイタマはまだ機嫌が悪そうであつたが、ほぼ無視されているようなので口出しはやめたようだ。

「あいつらはイマジン。人間に取り憑き、その相手と契約することで『過去に飛ぶ力』を得られる特殊な存在……未来からやつてきた破壊者の集団よ。あいつらは過去を破壊して、自分たちの都合のいいように改竄することを全体の目的にしている。……ミライがこうなつたのをいいことに、今度こそ世界をめちゃくちゃにするつもりよ」

「過去に飛ぶことのできる怪人と、それを追うことのできる戦士：か。なるほど、奴らが血眼になつて追うわけだ」

ハナがすごい剣幕になつた理由を理解したジエノスは、深く納得して頷く。そこまで重要な人物なら、過剰に警戒していくてもおかしくはないだろう。

「未来……過去……？」

その時、ハナの話に一切口を挟んでいなかつたキングが、険しい表情のままつぶやき

をこぼした。何かを考え込んでいた様子の彼は、ややあつてから確かめるようにハナに視線を戻した。

「ねえ、もしかしてなんだけどさ。さつきのテレビの不調つてあいつらが関わつてたりしてない?」

「え? なんの話?」

「貴様……先ほど先生の部屋で見ただろう。急に放送内容が前触れもなく変わつたところを」

「……あ、ああ、そうだつたわね!」

ジエノスに言われて思い出したのか、フブキは慌てて表情を取り繕う。ジエノスは何も言わなかつたが、内心ではもうボケが始まつたのかと密かに馬鹿にしていた。

「で? キング、お前何が言いたいわけ?」

「さつきの奴らが過去を変えて未来を書き換えるつてことが気になつたんだけど……じゃあそれつて、今起きたばかりの出来事もなかつたことになつたりすることじやないの?」

キングの口にした例えに、ジエノスたちはハツとなる。

キングの言つた通りなら、確かにサイタマの家のテレビの不調も一致する。勝手に番組が変わつたのではなく、事件そのものがなかつたことになり、未来が書き換えられた

のだ。

ただ一人サイタマだけが、取り残されたように驚愕の表情を浮かべていた。

「そうか……！ 先ほど病院を探したときに感じた違和感はこれか！ 過去を改変されたことで、俺のデータベースと検索結果に齟齬が生じたか……！」

「え？ え？ 何？ 何でお前キングのあれだけの話でわかつちやつてるの？」

「確かにそれなら、最近…というかさつきも感じた記憶障害のような症状にも説明がつく……でも、ちょっと待って」

先ほどの痴呆に似た反応のちようどいい言い訳を見つけたフブキがここぞとばかりに納得の声をあげるが、途中で違和感を覚える。

「じゃあなぜ、私たちにもそれが認識できているの？ 過去を改変されたなら、私たちだつてその影響を受けていてもおかしくないはずよ？」

先ほどは確かに忘れかけていたが、改変直後のフブキも確かに変えられる前の過去を覚えている。

ハナはそれについても説明を始めようとした。

「それは…」

「そのミライつて子と僕たちが、実は同じか似た存在だからじやないの？」

だがその解は、思わぬところから返ってきた。

確認するように声をかけてきたキングに領きながら、ハナはどこか頼もしさを感じるような笑みを浮かべてキングを見つめた。

「……その通りよ。あなた達は間違いなく『特異点』と呼ばれる存在。過去を改変されても、記憶に影響が及ばない特異体質。……そしてそれは、電王になるために必要不可欠の力」

ハナは今、キングに対する信頼が強まるのを感じていた。

間近で相対したこともない、しかし確かな強さと実績を持つ彼と実際に顔を合わせた

ことで、歴史的にも有名な彼の力が本物であると確信し始めた。

「よくあれだけの説明でわかつたわね……さすがS級7位のキングね」

（いや、シユ○ゲでそんな感じの設定あつたし）

そんなキングの本音を聞けば、きっと彼女の精神はダークサイドに落ちることであろう。

そんなことなど露知らず、キングは「リーオ・イングシユタ・ナーとかそんな感じかな……」などと考えていた。

「だが、少し都合が良すぎないか？　なぜそんな特異体質が同じ場所に5人も集まる？」

「案外、特殊でもなんでもないんじゃないの？」

「……」これはまだ予測の段階で、確定しているわけじゃないけど、特異点の体質はある共

通点から生まれるものだと私は考へてる」

ある意味当たり前なご都合主義にジエノスが疑問を抱くと、ハナから神妙な表情で仮説がもたらされた。

「時の運行に大きく関わった者、歴史の転換期に深く関わった者、その時代の人々に大きく知られている者……そういう時間の流れの中で大きな役割を果たした人が、特異点としての体質に目覚めるんだって」

「なんだそりや」

あまりにも曖昧な、仮説とも言い難いハナの話にサイタマは顔をしかめるが、ジエノスやフブキには思い至ることがあつた。

フブキの目に入つたのは、圧倒的な知名度と実力を兼ね備えた最強のヒーローの一角である男。ジエノスの目に入つたのは、圧倒的な力で幾度も地球存亡の機機を回避させてきた、無名の英雄。

「……S級ヒーロー」

「……先生」

そのつぶやきはあまりに小さく、サイタマやキングの耳には入らなかつたが、ハナはその通りだとうように頷く。

「じゃあフブキは？　さつき忘れかけてたじやん」

「特異点にもおそらく、体質の強さがあるんだと思う。アレルギーの症状に重さの違いがあるよう、影響を受けない範囲があるんじゃないかしら？」

キングやジエノスほどではないにせよ、フブキもまたそれなりに高い知名度を持つヒーローだ、条件は合っている。しかしその知名度の高さの差が、特異点としての体質の強さにも繋がっているということらしい。

「それらはきっと、既視感^{デジャヴ}のような形でその人の元に残るのよ」「ほーん……なんとなくはわかつた」

相変わらず何を考えているのかわからない無表情のサイタマに、ハナはため息をつく。

サイタマは気にせず、未だ悪夢にうなされているミライに目を向けた。

「でも記憶喪失になつてたら意味ないよな、その体質」

「……事態はもつと深刻よ」

「え？」

「ミライはただの特異点じやない……長い戦いの果てに、この子の体質はより異常なものへ変質してしまつたの」

急に緊張をにじませた声を発するハナに、サイタマは思わず声を漏らす。勝気そうな少女からそんな不安げな声を聞かされると、なんだか嫌な予感を覚えた。

ハナが見つめる、苦しげに荒い呼吸を繰り返すミライ。儚く途切れそうな少女の横顔に、ハナは悲痛げに唇を噛み締めた。

「今の彼女は言うなれば、世界を左右しかねない存在——『分岐点』よ」

聞くからにやばそうな、時間を守り続けてきたという少女の背負う性質。戦い続けてきた少女に課せられたという、明らかにとんでもなさそうな宿命。

流石のサイタマも、引きつった表情でハナを凝視してしまっていた。

「……なにソレ」

六撃目 イメージの魔人

「分岐点……？ 世界を左右しかねないというのは、どういうことだ!?」

ハナが口にした言葉に、信じられないといった表情でジエノスが食いつく。

絶句するサイタマと同じようにフブキも息を呑み、キングは白目を剥いていた。

「まず前提として、人間が存在するということには、人間が記憶していることが不可欠よ。イマジンによって時間が破壊されたとしても、特異点の記憶が無事であればそれを

中心に修復することができる。人も建物もね」

ハナはそう言って、これまでの電王——ミライと共にあつた戦いの記憶を呼び起す。

イマジンの勝手な解釈によつて契約を完了させられ、過去で好き勝手に暴れられても、その法則があつたからこそ時の運行は無事で済んだ。

ゆえにハナの表情は、ひどくこわばつたものになつていた。

「……逆に人々に忘れられた人間は修復するのはほぼ不可能よ。逆に完全に時間が消滅したとしても、特異点だけは消滅しない。永遠に一人、孤独の中に取り残されるのよ」

何か覚えがあるのだろうか、ハナは自分の腕を強く握りしめ、溢れそうな感情を抑え

込んでいる。

辛い事情があるのだろうと察したフブキは、深く問い合わせるこちはせずにハナに向か直った。

「……特異点と分岐点は、それとどう関わるの？」

「ミライは過去に飛んだイマジンを追つて、数多くの時代で戦い続けてきたわ。ときに、あまりにも遠い過去にも行つてね。……でも、あの子はやりすぎてしまった」

「なんでだ？ イマジンぶつ潰したんだから問題は解決したんじやないのか？」

いつもワンパンでことが終わつてしまふサイタマにとつては、苦労して怪人を倒したことへの問題などわかるはずもない。

ぽけ一つとした表情で問う彼に苛立ちを覚えたのか、ハナは険しい表情でサイタマを睨みつけた。

「前提がひっくり返つてしまつたのよ。かつて何かが起こつた時間をミライが守つたんじゃない、ミライが守つたから過去が成り立つてしまつたの！」

何かものすごく重要そうなことを言つている気がするが、人並みの頭脳しかないサイタマにはよくわからない。フブキやキングもだいたい意味を測りかねているのか、訝しげに首を傾げている。

しかし唯一ジエノスだけが、なにやら考え込んでいたかと思うとハツと目を見開い

た。

「まさか……時の運行そのものが、ミライの存在と直結しているということか!?」

「！ それ……めちやめちやヤバいんじやないの！」

（これ……もう人間の手に負える問題じゃなくね？）

ジエノスの一言で理解したらしく、フブキは冷や汗をかき、キングは遠い目になつて現実逃避し始める。

やはりサイタマだけが、あまり理解できずに置いていかれていた。

「時を守る番人が、奇しくも時の運行の鍵となつて狙われたということか……」

「その上……破壊された時間を修復できるミライの記憶が奪われるなんて」

「奪われる……だと？」

ハナが呟いた奇妙な言葉に、ジエノスは眉をひそめる。

ハナは頷くと、神妙な顔つきでジエノスたち（サイタマを除く）の顔を見渡し、その耳朶に突き立てるようにはつきりと口にした。

「そう、ミライから記憶を奪つたそいつこそ、この事件の全てを企てた黒幕。全ての時間の破壊を目論む最悪の怪人——ガオウ」

紡がれたその名を耳にし、フブキはゴクリと唾を飲み込む。

ジエノスはすでに顔も知らないその怪人に敵意を募らせ、キングは早くもキングエン

ジンを始動させている。

サイタマもまた、真剣な眼差しをハナに向けていた。

「ガオウ…」

「ガオウには、ある能力があつたの。喰つた相手の能力を自分のものにするつていうね……その能力を使って奴は、あらゆる怪人同族を片つ端から喰らつていた」

身の毛もよだつ話にフブキは肩を震わせる。比較的無害に近い怪人もいれば、悪逆非道な悪魔のような怪人もいる。しかし同属を食うようなやつはそうはないはずであつた。

ハナの語るガオウの怪人像は、そのいずれよりもはるかに凶悪で、最悪に分類される存在に思えた。

「その中で、ある特殊な能力を持つた怪人がいたの。名前はドワスレナグサ」

ジエノスはその名を自分のデータベースに照合してみるが、目立った情報は出てこなかつた。

「……聞いたことがないな」

「そりやそよう。だつてそいつのレベルは狼……全然大した脅威じやないもの。キングだつたら睨んだだけで即K.O. よ」

「あ、ああ……」

槍玉に挙げられたキングは思わず苦笑いを浮かべる。確かに顔を合わせただけで怪人に勝手に降参されたことはあるが、残念ながら彼は自分から行けと言われたら迷うぐらいいの小心者であつた。

「でもそいつの能力は確かに厄介だつた。それは相手の記憶を奪い、好きなように改竄する能力……ドワスレナグサはそれを軽犯罪にしか使つてこなかつたけど、ガオウは能力を奪うと恐ろしい計画を企てた」

ドワスレナグサの元々の性格か、幸いにも彼自身が大きな犯罪に加担することはなかつた。

しかし最悪の怪人によつて目をつけられ、哀れな餌食へとなつてしまつたのだ。ただ、能力だけを奪うための糧として。

「分岐点の記憶を奪い、改竄することで時間を破壊すること」

ジエノスはハナの説明でようやく理解する。科学より量子力学的な解釈が必要であつたため証明こそ難しいが、最近の事件と合わせて考へるに理屈は通つている。

ジエノスはサイボーグの体ながら、背筋が冷えるという感覚を味わつていた。「特異点の記憶により成り立つ時間……そのさらに前提となつてゐる分岐点の記憶を利 用し、時間を破壊する。……にわかには信じがたいが、それが本当ならとてつもない事態になるぞ」

「だから私は焦つてゐるのよ！」

ヒステリックに叫ぶハナだが、自分ではどうしようもないことを理解しているために頭を抱える他にない。

青い表情で固まつてゐるフブキやキングをよそに、サイタマはすでに理解することを放棄していたが、一つだけ理解していることがあつた。

それについて考えていた彼の前に、湯気を立てる湯のみが差し出された。

「長話」苦勞様です。お茶でもどうぞ」

「お、悪いな。……このお茶うめえ」

弁慶のような、黒い衣服に金色の面をつけた奇妙な男の出した茶を、サイタマはなんのためらいもなく口にする。

そのやり取りでようやく気づいたのか、両掌のバーナーを準備したジエノスが振り向きながら身構えた。

「!?」

「敵か!!？」 いつの間にこんな近くに!?」

ほぼ同時に、フブキの髪が超能力によつて浮き上がり、キングのキングエンジンがやかましく鳴動する。

一瞬にして臨戦態勢に入つた3人（2人）に取り囲まれた怪人は、慌てて掌を突き出

して後ずさつた。

「わーわー待つて待つてつて!!? 僕は敵じゃないよ!!? 亂暴はよくない!!?」
「くだらん言い訳を……!」

「待つて。そいつは本当に私たちの仲間、手を出さないで」

狭い室内で容赦なく焼却砲を放とうとしているジエノスを、ハナが冷静に止めた。なんとなくこうなる予感がしていたようだ。

「あーびっくりした……!」

「そいつはデネブ。私たちに協力してくれているイマジンよ」

「イマジンの……協力者だと?」

ジエノスが疑いの眼差しを向けると、デネブと言う名の怪人は傷ついたように首をすくめ、車内の隅で膝を抱えてしまった。大柄な怪人がいじけている光景はあまりに異様に見えて、フブキは思わず呆れた目を向けてしまっていた。

「確かに……元々は確かに敵だつたさ。でもそんな急にみんなでガーツて来ることないじゃない……こわかつたあ」

「おいジエノス、こんなうまいお茶出してくれる奴を泣かすなよ」

「あ、いえ、その…」

「と、とりあえずこれ使つて」

「ああ……ありがとう、優しいね」

比較的手が出やすい二人の魔の手から逃れ、左右から割と温厚な二人の気遣いを受けたデネブは人目も憚らずに涙する。見た目とは裏腹に繊細な性格なのかも知れない。師に注意されたジエノスは納得できない気分になりながら、事情を知つてはいるはずのハナに厳しい目を向けた。

「どういうことだ。イマジンは時間を破壊する敵じやなかつたのか？」

「大抵の奴らはね……でもそうじやない奴らもいた。もともとイマジンの使命に興味がなかつたやつ、使命が気に食わなかつたやつ、別の生き方を見出したやつ……そんな奴らが、私たちに力を貸してくれた」

ハナはやや視線を逸らしながらジエノスに語つてみせる。ハナ本人も、その関係に複雑な感情があつたのだろうか。

ジエノスは未だ疑わしげな表情を浮かべていたが、サイタマがデネブとかなり親密に話している様子を見てあつさり疑惑を捨てた。本人を観察する限り、危害を加えるような怪人には見えなかつたと言うのもあつた。

「デネブもその一人。このゼロライナーの持ち主であるユウトと契約して戦つてくれる仲間よ」

「…その、他の仲間は？」

「それを今探しているところなのよ」

キングが尋ねると、ハナはあからさまに険しい表情を浮かべた。

「ミライはガオウに記憶を奪われた。でもまだ完全にガオウのものになつたわけじゃない。奪われた瞬間、そいつらはガオウに取り憑いてミライの記憶を奪い返したの」

「そんなことができたのなら…！」

「でもその時は切羽詰まつていて、ミライに記憶を戻すことはできなかつた。多勢に無勢だつたし、あいつら自身もどうやつてミライの記憶を奪い返したのかわかつてなかつたから……だから私たちは一旦、別々の時間に飛んで身をひそめることにしたの」

サイタマはゼロライナーと呼ばれている車内を見渡し、ぼんやりとハナの言うイマジンの仲間たちの姿を想像する。

しかし何故だかデネブのようなカラフルで妙なコスプレをした奴らが頭に浮かんでしまい、すぐにやめてしまつた。

「でも慌ててたものだから、落ち合う場所も時間も決める余裕がなくつてね……探していく間にガオウの一派の襲撃を受けて」

「そん時にこいつとはぐれたわけか」

「そういうこと……改めて、ちゃんとお礼を言つておくわ」

ハナはそう言うと、改めてジエノスたちに向き直った。

先ほどよりも強い意思を秘めたその表情は、どこか迷いが混じつて見える。口にした
い思いを伝えるかどうかを悩んでいたようであつたが、きつく目を閉じると深々と頭を
下げた。

「……恩を重ねるようで悪いけど、お願ひ。ガオウの野望を止めるために、力を貸してく
ださい」

「おう、いいぞ」

勝手に巻き込んだ上に危険なことを手伝わせようとしていると、S級ヒーローといえ
ど断られるかもしれない。

しかしそんなハナの葛藤は、即座に肯定の意を伝えてきたハゲ頭のヒーローによつて
吹き飛んだ。聞き間違いかと思ってジエノスたちにも目を向けてみれば、否定すること
なくハナを見つめてきていた。

「…………頼んだ私がいうのもなんだけど、本当にいいの？」

「バカだな。ヒーローが人助けしないでどうすんだよ」

本気で呆れた様子のサイタマが、ジエノスの琴線に触れそうなセリフをぶつける。
悪人をやつつけるヒーローを3年も続けてきた彼にとって、助けを求められて振り払
うことなどあり得なかつた。

「そこまで重要な話を聞かされでは、断る理由は無いな」

「大きな事件なら、それだけ私の株も上がるつてものよ」

師が行くならばとジエノスも同行の意を伝え、好戦的な笑みを浮かべたフブキが目を細める。

接敵前からやる気をみなぎらせている二人のヒーローを横目に、キングは穏やかな口調でハナに話しかけた。

「……忘れているかもしないけど、ここにいるのはみんなS級に選ばれるだけの実力を備えたヒーローばかりだよ。頼ることは（俺にとつても）恥ずかしいことじや無い」

何かあつたら自分もS級を頼るつもりだから気にするな、と言う意味で告げたキング。

しかしハナはそれを、何があつても自分たちが助けると言う人類最強の男からの声援エールとして受け取っていた。見た目も実力も頼れそうな男からの応援に、ハナは完全に心を許してしまっていた。

「……ありがとう」

最初の出会いからは想像もできないほどしおらしい様子のハナに、ジエノスは内心で苦笑する。それでもサイタマに向けて堂々とハゲ呼ばわりしたことは許すつもりはないが。

「それで、今この列車が向かっているのはどこだ？」

「ミライが昔救つたことのある時代——過去の全ての時間よ」

そう言つてハナが取り出したのは、ずらあつと無数の年号や日付が書かれた、分厚いリストであつた。

七撃目 超・時間旅行

「ジェノス！ あれ見ろ！ 恐竜だ!!?」

「まさか中生代ですか!!?」

「か：カメラ！ 誰かカメラ持つてないのか!!?」

「俺のゲーム機なら録画機能あるよ」

「でかしたキング！」

ジャングルの向こう側に見える巨大な生物たちに、サイタマたちが大騒ぎする。普段は無表情のサイタマでさえ、この時は少年の輝きを瞳に宿していた。

どんなに歳を取つても、男たちの古代の浪漫への憧れは枯れたりしないようだつた。
「男つて……ほんとにもう」

「ここは違う……と」

ゼロライナーの車内でくつろぐフブキはそんな彼らに呆れた目を向け、ハナは我関せずといった様子でリストに赤線を引いた。

また別の時代では、巨大な真新しいピラミッドがそびえ立つてゐる前ではしやぎまるサイタマたちをよそに、ハナだけがイマジンたちを探し。

江戸時代では、目立たないために当時の衣服に着替えたハナに合わせて、フブキが綺麗な着物に袖を通したり。

「あら、いいじゃない」

「ところでサイタマ氏はどこ行っちゃつたの？」

ゼロライナーに乗り込んだハナたちが、そこでようやく和服を着たサイタマが追いかけてきていることに気づいたり。

「うおおおおおおおおおおめーら置いていくんじやねえよ!!?」

「先生！」

「この時代も違つたか…」

色々とトラブルに巻き込まれたりしながら、ゼロライナーは過去と未来を行き来する。

離れ離れになつた仲間を探して、大航海時代、ルネサンス、安土桃山時代、旧石器時代、様々な時代をめぐり続けた。

「…」も違う

リストの半分を目前にした部分に赤線を引いたハナは、そこで険しい表情を浮かべてリストを置く。

そして彼女は、ジトツとした目でサイタマたちを睨みつけた。

「あんたたち、旅行か何かと勘違いしてない?」
「え?」

様々な時代で収集してきた土産物を広げるサイタマたちに、ハナは滔々と説教をした
い気分に陥る。

過去の世界から物を持ち出すことや干渉することの危険性もそうだが、真面目に探す
氣があるのかと問い合わせた途端に、ハナは滔々と説教をした。

「まつたくもう……手伝ってるんだか足手まといなんだか」

「もういい加減リストも尽きてきただろう。一体どこにいるんだ、お前たちの仲間は
『そんなに急かさないでよ……ミライが救った時間つて本当に多いんだから』

かなりの時間を巡ってきたが、それでもまだイマジンたちは見つけられない。

まだリストの半分以上も巡らなければならないのかと思うと、流石に心が折れそうになってしまった。

「何か手がかりでもあればいいのに……」

気の遠くなりそうな作業を繰り返し、疲弊した様子でテーブルの上に突っ伏すハナ。

そんな時、備え付けられた座席からうめき声が聞こえ、ハナはガバッと体を起こした。

「……つ、あ…」

「ミライ!?" 日が覚めたのね! よかつた…」

毛布をかけられた座席の上で横になつていた少女、ミライが薄目を開けてハナを見つめていた。

顔色はまだ悪く、弱々しい様子ではあつたが、今までずっと眠つたままであつた少女が反応を示したことで、ハナは希望を見出していた。

「西暦……19XX年……五月……」

すると、ミライはか細い声で何か口にし始めた。

ハナは慌てて耳を寄せ、ミライがなにを伝えようとしているのか聞き取ろうとした。

「……みん、なが……待つて……」

「え？ な、何？ 何を言つてるの？」

途切れ途切れの声は、うまくハナに言葉を伝えてくれなかつた。

しばらくするとミライは再び目を閉じてしまい、苦しげな寝息を立て始めてしまつた。

ミライの様子を見ていたフブキは、険しい表情で考え込む。

「……もしかして探している奴らの手がかりなんじゃ」

「多分そうだわ。きっとその時代にモモたちが……」

「……」、W·i——F·i繫がつてゐるかな……あ、いけた」

そこで、おもむろにスマホを取り出したキングが何かを検索し始めた。

過去と未来を行き来している今、ネットにつながるのか疑問ではあつたが、偶然電波が届く時間帯にでも差し掛かっていたのだろうか。

キングは見出したスマホの記事を、ハナの前に差し出した。

「あのさ、もしかしてこれじやないの？」

「ん？『お手柄3人組、米泥棒を見事捕らえる！』……って、ああ！！？」

キングが検索したのは、大昔の新聞記事などを特集したサイト。

そこのあるページに写っていた、三人の男の写真を目にしたハナは、思わず大きな声で反応してしまった。

「ウラタロス～：僕お腹すいたよ～」

「しようがないでしょ、お礼にもらつたお米はキンちゃんが全部食べ尽くしちやつたんだから」

「あれだけじや腹の足しにもならへんわ～」

ボロボロの民家の中で、壊れかけのちやぶ台を囲む三人の男がいた。

これと言つた特徴のない、どこにでもいそうな平凡な男たちだつたが、変わつたことに全員それぞれ髪に青、黄、紫のメッシユを入れていた。

「でもまさか、僕たち三人とも同じ時代にきちやうなんてね」

「みんなで別れて逃げようつていつたのウラタロスじやんか！」

「まあ、みんなバラバラに逃げとつたらもつと早く倒れとつたかもしねへんけどな」

青いメツシユの眼鏡の男が呟き、紫のメツシユの青年がちやぶ台に突つ伏し、ギュルギュルとうるさい腹を抑える黄のメツシユの男がぼやく。その表情はみな暗かつた。

「僕らこのままどうなつちやうんだろうね～…」

「ここ可愛い女の子いないし、そのうち身も心も乾いちゃうんだろうなあ…」

「泣けるでえ…！」

先の見えない現状を嘆き、男たちは天井を仰ぐ。

そんな時だつた。

「――あんたたち一体何やつてるのよ!!?」

スパーーン！　と障子が叩きつけるように引き開けられ、肩を怒らせた少女が顔を出した。

突然の来訪者に男たちは目を丸くし、あつけに取られた様子で少女・ハナを凝視した。

「……は」

すると次の瞬間、男たちからサラサラと砂つぶが漏れ、半透明の三色の光が飛び出し

た。

「「ハナさんだ――――!!?」」

光はそれぞれ青い亀、黄色い熊、紫の龍に似た怪人へと姿を変え、ハナに向かって飛びついた。

ハナは悲鳴をあげるも、三人の勢いに負けて押し倒されてしまった。

「夢じやないよねこれ!!?」

「俺はもうあかんとおもてたで…!!?」

「わーいわーい♪ デンライナーに帰れる～！」

「うるつさいわ!!?」

怪人、イマジンたちを押しのけながら、ハナはイライラした様子で怒鳴りつける。
手間をかけさせたこともそうだが、バラバラに逃げろと言つたのに一箇所に集まつて
いることを叱りつけたかった。

「おお、賑やかになつてきたな」

「い、今人の中から出てきたような…!!?」

「あれが取り憑くということか」

民家の外から覗き込んだサイタマたちは、畳の上に放置されている男たちや、話に聞
いていた憑依能力を見せたイマジンたちを興味深そうに観察していた。

その時、再びジエノスのセンサーに引っかかる反応があつた。

【】！ 接近する熱源を多数感知……この反応はイマジンか!!?】

ジエノスの言葉にハナはハツと表情を変える。

イマジンたちを見つけたことで安堵していたが、危機が去ったわけではないのだ。

「ねえハナさん、そちらの人たちは誰？」

「説明してる暇なんかないのよ！ ウラ！ キン！ リュウ！ あんたたちもさつさと

戦闘準備！」

「えええ…人イマジン使ひ荒いなあ」

「さつさとやんなさいエロガメ!!?」

「はーい」

「よつしや！ いつちよやつたるで！」

パシン、と膝を叩いた熊のイマジンキシタマジンが立ち上がり、民家の外に意気揚々と飛び出す。その後ろを、亀のイマジンカニタマジンが氣だるげに、龍のイマジンリュウタマジンが陽気に続いた。

いきなりぼろ家の中から現れた怪人を目にした周囲の家の住人は、非常に驚愕した様子で悲鳴をあげてその場から逃げて行つた。

「見つけたぜえ!!?」

「大人しく捕まりやがれ!!?」

「ああもう！ しつこいなあ！」

そこへタイミングを計つたかのように、バリバリと隣の民家の戸を蹴破りながら怪人

たちが姿を現した。

フクロウの怪人やクジラのイマジン、その他複数の怪人たちが、口汚く罵りながら早速ハナたちに襲いかかった。

「そんなにしつこい奴は：女の方にモテないぞ？」

「うおつ!!?」

そこへ、亀の甲羅を模したような槍を持ったウラタロスが迎え撃つ。素早い槍さばきで翻弄し、怪人たちの足を掬い上げて転ばせていった。

「ドスコイ!!?」

「ぐわああ!!?」

よろけた怪人たちに、今度はキンタロスの張り手が襲いかかる。凄まじい力で弾き飛ばされた怪人たちとは、ひとまとまりにされて倒れていく。

「俺の強さは泣けるでえ!!?」

「ふ……ふざけんな！」

四股を踏んで挑発するキンタロス。

立ち上がりつて反撃しようとする怪人たちに、今度は紫の弾丸が食らいついて激しい火花を散らせた。

「ヘイヘイヘイ♪ お前ら、倒すけどいいよね？ 答えは聞かないけど!!?」

敵の数は多いが、三人のイマジンたちは高度なコンビネーションで圧倒している。思わず感心するジェノスたちだが、その背後からハナが焦った様子で呼びかけた。

「ザコは放つておいて、早くゼロライナーに戻つて！」

「え!?」？ デンライナーじゃないの!?？」

「説明はあと！ とにかく急いで!!？」

戸惑うイマジンたちを急き立て、ハナはゼロライナーが停泊している場所へ走る。すると首を傾げながらも走るウラタロスたちを追つて、怪人たちが集まり始めた。

「焼却砲……」

最後尾に立つたジェノスが、雄叫びや怒号をあげる怪人たちに強烈な火炎放射を浴びせかける。

その威力に、リュウタロスが思わず声をあげた。

「うわああぶなあつ!!？」

「早く乗れ！」

火だるまになつて苦しむ怪人たちに背を向け、ゼロライナーに急ぐジェノス。しかし、突如死角から手が伸び、走っていたハナを引き寄せた。

「逃すかよ……裏切り者どもめ!!？」

「きやあつ！？」「まずい！」

狼のイマジンに囚われたハナを目にし、ゼロライナーの中からデネブが鉄砲の指を向ける。

しかしハナが直線上にいるために撃つことができず、迷っているうちにどんどん周囲を怪人たちに囲まれて行ってしまった。

「ヤバイぞこれは……！」

ジェノスたちがハナを救出しに向かうが、その間にもイマジンは集まり始めている。絶体絶命のピンチと思われた時だった。

突然、着物を着た男が狼のイマジンに蹴りかかり、ハナを抱きかかえてジェノスたちの方に飛びのいた。

「デネブ！　お前がいて一体何やつてんだよ！？」

「ユウトオ！？」

振り向き、デネブに怒号を放つユウトと呼ばれたその男は、懐から取り出したベルトを腰に巻くと、一枚の黒いカードを取り出して目の前に掲げた。

「まとめて叩き潰してやる……変身！」

【A l t a i r f o r m】

ユウトがカードをベルトに差し込んだ瞬間、電子音声とともに周囲に緑色の破片が舞い、集まつて黒いスースを作り出す。

さらに胸と顔に金色の線路のような装甲と緑の装甲が張り付き、顔の線路を二頭の牛の顔が通る。牛の顔は変形すると、目の形となつて顔に張り付いた。

「最初に言つておく。俺はかくなくなり、強い!!?」

近未来的な鎧を身に纏つたユウトは、勇ましく怪人たちに吠えると腰に下げたパーティを組み合わせ、一振りのサーベルへと変えて猛然と挑みかかった。

「うおおおおおおお!!?」

幅広い剣が、我先にと向かつてくる怪人たちに食らいつき、火花とともに弾き飛ばす。凄まじい力で振るわれる斬撃は、硬い怪人の表皮も簡単に切り裂いていた。

勇ましく怪人たちに斬りかかる緑の戦士の姿に、ジエノスは目を大きく見開いた。

「あの男は……!?」

「彼はユウト。ゼロライナーの持ち主で、電王と同じように時の運行を守る戦士、ゼロノス！」

ハナの説明を表すように、ゼロノスとなつたユウトは圧倒的な力で怪人たちを相手取る。

ゼロライナーに近づこうとする怪人を片つ端から斬り伏せていくながら、ユウトは立

ち尽くしているジエノスたちに声を張り上げた。

「いまのうちに行け！」

「ユウト！ 後ろ狙われてるよ！」

デネブが背後から迫る敵を知らせるが、運悪く別の怪人とつばぜり合いになつてしまつたために動くことができない。

迫り来る狼の怪人の爪を前にして、ユウトは思わず仮面の下で焦りの表情を浮かべた。

「死にさせええ!!」?

「何しやがんだコノヤロー！」

「ぎやわばああああ!!」?

が、その寸前で氣の抜ける声とともに怪人が吹っ飛ばされ、他の怪人を巻き込んであつさり爆散してしまった。

呆然となるユウトをよそに、間の抜けた顔のままのサイタマは無慈悲にも次々に怪人たちを殴り飛ばしていく。

「あ、俺が過去で暴れても大丈夫だつたのかな」「ぐわああああああ!!」?

最後の一體をもぐらたたきのように殴りつけながら、サイタマは「ま、いいや」と面

倒臭そうに肩を落とした。

「……」れ、ユウトが来た意味あつたのかな?」

「一枚無駄にしちまつたじやねえか!」

颯爽と登場したのに、ものの数秒で出番が終わってしまったユウトは、苛立たしげに地面を踏みつけることしかできなかつた。

当初の目的である仲間のイマジンの回収は達成できたものの、なんとなく締まらない結果に終わつてしまつたのだった。

八撃目 鬼と亀と熊と龍

「助かったよハナちゃん！！ もうちょっとで僕ら塵になっちゃうところだつたよ」

「もともと俺ら砂やけどな！」

「あー怖かつた。ねーデネブ、ジユースちよーだい！」

「はいはいちょっと待つててね！」

ゼロライナーの座席を占拠し、三体のカラフルな怪人たちが勝手気儘に騒ぎ始める。席の端に寝かされているミライの表情も、やや迷惑そうに歪められていた。

「……亀に、熊に、龍か？ イマジンというのは本当にバリエーション豊かだな」

「なんでか知らないけど、イマジンはみんな昔話からイメージを取り出すの。うちのはメジャーだけど、マイナーなイメージを拾つたイマジンもいるわ」

「…そういうえば、コウモリとかサイに関する昔話もあつたわね」

亀と熊と龍と弁慶の怪人が集まっている光景に、サイタマたちは不思議なものを見る目で囁き合う。

敵側の怪人もかなり個性的な外見だったが、こちら側もかなり奇天烈な見た目であつた。

「じゃあ！ 無事に戻つてこれを祝してかんぱ～い♪」

「かんぱ～い！」

「うるつさいわよ!!?」

「面白くな雰囲気などどこにも感じさせず、騒ぎ続けるイマジンたちについにハナガキ
れる。」

輪になつてコップを掲げるイマジンたちに、サイタマが近づいていった。

「で？ お前らが人間に味方していいイマジンってことか？」

「ん？ おじさん誰？」

「おじさんって言うな」

「まあ、そう言うこつちやな」

輪の中に入つたサイタマの顔を、キンタロスがまじまじと覗き込む。

この中で最も力持ちな彼は、サイタマの体内に宿る強大な力に感づいているようだ。
先ほどとは異なる真剣な眼差しを向けている。

「…お前さん、只者やないな。見た目とは裏腹にものすごい力を感じるで」

「え～うつそだ～見たことないよこんな人」

「せやけど、さつきのパワーは本物やつたで？」

「じゃあなんでそんな強い力持つてるのにマイナーなのさ？」

キンタロスの言葉を信じず、小馬鹿にしたようにサイタマを見やるウラタロスとリュウタロスだが、当のサイタマは全く気になった様子はなかつた。

が、彼にとつては放置できなかつたらしい。

「おい貴様ら、あまり舐めた態度をとつていると承知せんぞ。先生はあまりご自分で成 果を誇つたりしないだけだ」

「そう言われてもねえ……」

「ほんとに知らないんだもん」

ギラリと目を光らせて威嚇するジエノスに、青と紫のイマジンはジトツとした目を向 ける。基本的に順位や知名度と実力は比例するものであるため、やはりにわかには頼る 気にはなれないようだ。

しかしそこで、ウラタロスは何かを思い出したように視線を逸らした。

「ん？ もしかしてキミ……ミライが前に言つてたヒーローじゃない？」
「え……？」

ウラタロスが隣で寝かされているミライに向けられ、確信を持ったように何度も頷か れる。

自分に注目が向いていることに気づき、ウラタロスは改めて説明を始めた。

「ミライが目標にしてるヒーローがいるって聞いたことがあるんだ。聞いてた特徴と似てるからもしかしてって思つてさ」

「そんなこと言うとつたか？」

「僕知らない」

「一回だけさ、なんで電王としてこんなに頑張つてるのって聞いたことがあるんだよ。その時に教えてくれたんだ」

腕を組んで首をかしげるキンタロスとリュウタロスや、興味深そうに体を寄せるジエノスたちは、ウラタロスの語る話の内容から一人の男を思い浮かべる。というか、視線を向けた。

「黄色いスーツに赤い手袋をつけた、白いマントのヒーローがいるって。……ハゲとまでは聞いてなかつたけど」

「ほお〜？ 初耳やな。ハゲとるヒーローやなんて」

「ハゲたヒーローなんているんだね〜」

「私も聞いたことないわよ。ハゲマントだつけ？」

「俺も知らんぞ。ハゲマントなんて」

「ハゲハゲハゲハゲうるせえよ!!? さつきからなんなんだお前ら!!?」

いじられまくつて苛立ちが頂点に達したサイタマが叫び、ウラタロスたちを鋭く睨み

つける。

これ以上は流石にまずいと判断したのか、ウラタロスはパンパンと手を叩いて空気を変えさせた。

「まあとにかく！ そんな強いならこれからも頼りにさせてよ。あとは先輩を探し出すだけなんだからさ！」

「ホンマ、モモの字はどこ行つてもうたんやろなあ？」
「まいごのまいごのモモタロス！」

「こいつら…」

「……まさか最後の一人は桃太郎か」

「すごいわ。昔話の三大太郎が揃つた」

子供が思い浮かべる最も有名な昔話の主人公、の敵の姿をイメージし、ジエノスたちはやや呆れた表情になつた。

ウラタロスたちは追われていることなど感じさせないような呑気さで、ハナは思わず頭痛を感じたように頭を抱えていた。

「それで、また別の時間に行くつてこと？」

「ええ、でももう地道に探す必要はないわ。さつきの時代で、ユウトがいいものを見つけてくれた」

「いいもの？」

キングの間に答えたハナは、ユウトから渡された巻物をテーブルの上に広げた。

ところどころシミや虫食いのあるそれは、博物館か金持ちの蔵にでも置いてありそくなほど年季の入っている書物のようであった。

ムワッと匂つてくるカビ臭さに、サイタマはつい顔をしかめていた。

「きつたねえ巻物だな」

「これは昔、ある侍が妖怪退治に赴いた時のことを記した資料よ。……見て」

確かにハナの言う通り、巻物には何体もの妖怪や化け物と、それと戦う侍の姿が描かれている。なぜか侍たちの顔が現代の有名な強者たちに似ている気がしたが、誰も気にしなかつた。

その戦いの絵巻の端を、ハナがビシツと指差す。すると、イマジンたちの目が大きく見開かれた。

「うわっ！ 先輩だ！」

「ホンマや！」

「カツコ悪う！」

「あれまー…」

何事だと一緒になつて覗き込むサイタマたちが見せられたのは。

草むらの陰で妖怪と侍の戦いを覗く、一匹の赤い鬼の絵であつた。

時は戦国、まだ妖怪と怪人の区別が曖昧であつた時代のことであつた。手に松明と鍬を持ち、暗い夜道を照らした村人たちが険しい顔で辺りを見渡していた。その目には、明確な敵意が宿つていた。

「あの鬼めはどこいつただか!!?」

「姿が見えなくなつたべ！」

「きつとどこかに隠れてるだ！ とつ捕まえてぶつ殺すぞ!!?」

武器の代わりなのか、鍬の先端を見渡す先に向けながら歩き続ける村人たち。サクサ

クと静かに草を踏み、鬼とやらを探してひとかたまりになつて歩き去っていく。

彼らの持つ明かりが遠くへ震んで行き、静かになつたところで、草むらの陰から赤い影がそろそろと顔を出した。

「ひいええ……なんでこの時代の奴らはあんな物騒なんだよ！」

赤い体に黒い模様の入つた、一本の立派な角が生えた男。見た目はまんま鬼にしか見えない彼は、ブルブルと震えながらキヨロ距離と辺りを見渡していた。

彼こそが、ハナたちの探すイマジンの最後の一體、鬼の怪人モモタロスであつた。

「早いところあいつらのどこに戻りてえなあ……つて寂しがりか俺は！」

もし聞かれでもしたら、散々からかわれ馬鹿にされそうなことを口にしてしまったが、ずっと一人で追い回されていれば寂しくもなる。

早いことやつらと合流しなければ、とモモタロスは辺りの様子を伺つた。

「右…よし！ 左…よし！ 今しかねえ！」

まずは村人に見つからないうちに離れてなくては、とまるで泥棒のように抜き足差し足で進み始める。なるべく足音を立てず、その上で人がいないか慎重にモモタロスは歩く。

その時、ヒュンツと風を切る音がしたかと思うと、モモタロスの尻に激しい痛みが襲いかかつた。

「アッ——!!？」 尻になんか刺さつた——!!？」

あまりの痛みに、棒状の何かが刺さつた尻を抑えて倒れこんでしまうモモタロス。

その悲鳴を聞きつけ、さつき通り過ぎた村人や別の場所を探していたその仲間が集まつてしまつた。彼らはモモタロスを見つけると、殺意で目をギラリと光らせた。

「鬼めがいたぞお！」

「オラの矢が当たつただ！ みんなとつ捕まえろ！」

「このバケモンめがあ!!？」

「いやあああああ!!？」

誤解がないように言つておけば、モモタロスは彼らになにもしていない。

しかし思い込みというものは恐ろしいもので、鬼は絶対に人間に危害を及ぼすものと決めつけ、やられる前にやつてやろうということになっていた。

あわや無実の罪を着せられ、叩き殺されそうになつたモモタロスであつたが。

「“必殺マジシリーズ”」

不意に聞こえてきたその声の主が、モモタロスを救つた。

マジねこだまし!!?'

モモタロスと村人がいる場所に、とんでもない音量の爆音が響き渡る。

ダイナマイト数キロの爆発音を一瞬に凝縮したかのような、凄まじい破裂音がこだまし、村人たちから一発で意識を奪い取つた。

「な…なんだあ!?」 爆弾でも爆発したのか!?!?

間一髪、村人から身を守るために伏せていたモモタロスは、それでも鼓膜に響く強烈な音に目を白黒させる。

助かつたとわかるよりも先に、なにが起つたのか理解することもできずにいた。

「災難な目にあつたねえ、先輩!」

そんな彼にかけられる、気障っぽい聞き覚えのある声。

モモタロスは慌てて体を起こし、暗闇の中から近づいてくる相手を凝視した。

「か、亀え!!?」

「えらいボロボロになつてもうて…泣けるでホンマ」

「お尻に矢刺さつてるダツサ～イ」

「熊に小僧！…つて誰がダサいだコラ!!?」

ぞろぞろと集まつてくるイマジンたちに、モモタロスは驚きながらも内心で安堵を覚える。顔に出しはしないが、ひとりぼつちじやなくなつたことで実はものすごく安心していた。

「お、ほんとに鬼だ」

「んん!!?　おいコラハナクソ女！　なに関係ないやつ連れてきてんだよ!!?」

「うつさい！　迷子のくせに偉そうにすんな！」

「いつでえ!!?」

氣の抜ける顔でモモタロスの前に現れたサイタマに、赤鬼はイライラした様子でハナに詰め寄る。が、逆ギレされて尻に刺さつていた矢をズボッと引き拔かれ、また激痛に苦しめられた。

「とりあえず撤収しようよ。あんまり一つの時代に残つてると奴らが見つけちゃうかもしないよ?」

「そうね…ゼロライナーに戻りましょう」

「ま、待て！」

尻の痛みに悶えるモモタロスを放置し、さつきとこの時代から逃げようとするウラタロスやハナたちが歩き出す。

しかしそれを、モモタロスは慌てた様子で引き止めた。

「もうアソッカラはここにいるんだよ！ そんでこの時代でも好き勝手暴れてる……しかもそいつら、俺たちが前に倒したやつなんだよ!!？」

「何ですって？！？」

モモタロスの言葉に、ハナは大きく目を見開いて硬直する。

他のイマジンたちも目を見開く中、モモタロスは何かを感じ取ったようにぱつと振り向き、緊張した様子で身構えた。

ザザザ、と暗闇の中で草むらが蠢く音がする。何かが走り回り、モモタロスたちを取り囲もうとしているようだ。

「おーにさーん、見ーつけたあ」

蠢いている何者かの方をかき分けるようにして、近づいてくる大きな気配がある。

激昂を反射する金と銀の輝きを目にし、ハナは信じられないと言つた様子で凍りついだ。

「待つてたぜえ……お前たちに復讐できるこの時をなあ！」

「弟とともに受けたこの恨み……今こそ晴らさせてもらうぞ」

現れたのは、錫杖のような槍を持つた長身の男と、巨大な金碎棒を持つた二本角の大男。煌びやかながら禍々しい鎧を纏つた、凄まじい迫力を醸し出す二人組であった。

「クチヒコ……ミミヒコ……！」

「鬼ライダーか…!!？」

硬直するハナと同じように、イマジンたちも驚きのあまり動けなくなっている。

サイタマたちは訝しげな表情で、固まっているハナたちの顔を除き込んだ。

「なんだ、新手か…？」

「ていうか知り合いか？」

以前会つたことがあるかのような会話をしている彼らに問いかけるも、ハナは未だ動揺している様子で金と銀の鬼たちを凝視している。

目の前にあの男たちがいることが、全くの予想外であると言った様子だ。

「そんな……なんでアイツらが……アイツらはこんなところにいるはずがないのに!!？」

「どういうことだ!!？」

怯えているような、青い顔で立ち尽くすハナに焦れたのか、ジエノスはやや厳しい口調で問い合わせる。

ハナはそれで多少我に返つたのか、こわばつたままの表情を鬼たちに向けたまま口を開いた。

「……アイツらは、鬼ライダーと名乗る過去の悪人！ かつてミライが倒したはずの敵なのよ！」

過去の亡靈を前にし、ハナは顔を真っ青にして体を震わせる。

亡靈の鬼たちは、怯える少女の姿をさも面白そうにニヤニヤと見下ろしていた。

九撃目 鬼の兄弟

「わざわざ案内ご苦労……おかげで手軽にノルマを達成できそうだ」

「チクショウ！ 後をつけてやがったな!!?」

愕然とした表情を浮かべるモモタロスに向けて、金色の着物を着た長身の男——クヒコが馬鹿にするような笑みを浮かべる。隣に立つ銀の鎧を着た大男——ミミヒコもさもおかしそうに、耳障りな笑い声を響かせていた。

まんまと敵の策略にはまつたことを嘆き、モモタロスはこの場にいないミライに對して口惜しそうに歯を食いしばった。

「鬼だと…？ あれはいつたい何者だ？」

「オニ一族の兄弟……クチヒコとミミヒコ！」

聞きなれない鬼ライダーという名称に対しジエノスが問うと、ハナは狼狽した様子ながらも憤慨した様子で答えた。

敵であることはわかっているが、それとは別に普通の怪人とは何かが違うということが感じられた。

「もともとは室町時代で暴れまわっていた怪人だつたけど……时空の歪みのせいで未

来と繋がつたことを利用して、歴史を好き勝手に改変しようともくろんでいた連中よ！

「……他の連中と同じ、穴の貉つてわけね」

ハナの態度に納得したフブキが、体に緑色の光を灯しながら身構えた。

過去の確執やら因縁やらは差し置いても、ヒーローとして放置するわけにはいかない相手だとわかつただけで十分だつた。

ハナはなおも怒りと焦りをあらわにしながら、鬼の兄弟を睨みつけて怒鳴りつけた。
「なんであんた達がまだ生きてるのよ!!」

「フン……！ 知つたところで貴様らに何かできるとは思えんな」

鬼の兄弟の強さを知つているゆえに、自分からは手が出せないハナを馬鹿にしたようにクチヒコが嘲る。

割と頭に血が上りやすいハナが憤慨しながら一步を踏み出しかけるが、冷静なままのユウトに制され悔しげに後ろに引いた。

「兄者！ 俺は兄者と俺を殺しやがつたあいつらが憎いぜ!!？」

「慌てるな弟よ：：ただ殺すだけでは物足りない。たつぶりと絶望を味わわせる必要がある」

「ああ！ そうだな！」

ミミヒコが金の鬼に訴えかけ、攻撃の時を今か今かと待ちわびている。

モモタロスたちの周りにも、見覚えのあるイマジンたちが徐々に輪を狭めてきているのが見えて、時の守護者たちは焦りを抱き始める。

「やるしかねえな……！」

囮まれ、退路を断たれてしまつたのならば、もう前の敵に向かつて進むしかない。不退転の覚悟を決め、まだ少し痛む尻を抑え、ポキポキと拳を鳴らすモモタロスが一步前に出る。

ちらりと視線を向け、ゼロライナーを背に身構えているハナを睨んだ。

「おい、ハナクソ女！ ミライは今どうしてる？！」

「眠つてるわ……ダメージが深刻で、立ち上ることもできないみたい」

「仕方がねえか……！」

一度バラバラに逃げる羽目になつた襲撃の時を思い出し、ミライの負荷を考えてモモタロスは顔を険しくする。

今のミライに無理はさせられない。そもそも記憶を奪われてしまつた今の彼女が魔王になれるかどうかもわからない。

そう考えたモモタロスは、自分の後ろにいる見慣れない金髪の男に振り向いた。

「おいお前！ ちょっと体を借りるぞ！」

「何つ!? ぐつ……!?」

いきなり呼ばれて驚くジエノスに、赤い光となつたモモタロスが飛びかかる。赤い光を受けたジエノスは一瞬体を震わせると、がくりとうなだれる。しかしごとにキツと吊り上げた目を向け、獰猛な笑みを浮かべて肩を回した。

「つしやあ!!？」俺、参上!!？」

前髪が全て逆立ち、一部に赤いメッシュが入り、凶暴そうな形相に変わつたジエノスがビシッと自分を指さし、歌舞伎役者のようなポーズをとる。

いつもの彼とは明らかに雰囲気が変わつたサイボーグに、サイタマが興味深そうな視線を向けた。

「お、ジエノスがチンピラみたいになつた」

「誰がチンピラだ！ こうした方が強えんだよ!!？」

（貴様……！ 俺に断りもなく勝手に!!？）

「細けえこと気にすんな!!？ 行くぜ行くぜ行くぜえ!!？」

各所から聞こえてくる評価や非難に聞こえないふりをし、ジエノスに憑依したモモタロスが拳を振り回す。

どよめくイマジンに向けて、モモタロス in ジエノスは手のひらに装備された火炎放射器を解放した。

「うおりやああああ!!? つて熱つ!?!? 熱つつう!?!?!」

ゴウツ！と普段の加減を取つ払つた豪火が発射され、イマジンたちをまとめて飲み込んでいく。

しかしあまりの威力を放つたためか、炎を放つたモモタロスにまで火が及んで大変危険な状態に陥っていた。もつとも、サイボーグであるため熱さは感じないはずだが。

「くつ……小癩な」

「おいてめえら!!? 自分自身への弔い合戦だ！ 存分に暴れやがれ!!?」

「「「ウオオオオオオオオオオ!!?」」」

かろうじて火炎を躱したクチヒコとミミヒコが、まだ炎に飲み込まれているイマジンたちに命じる。

雄叫びをあげたイマジンたちは、炎をかき分けるようにして全身を再開する。奇妙なことに、全力の豪火を受けたはずの彼らはまつたくの無傷であつた。

「ぎょうさん来よつたでえ！」

「じゃあ僕も……お姉さん、ちよつと力貸してくれる？」

「え!?!?」

突如ウラタロスに尋ねられ、戸惑いの声を上げるフブキ。

すると次の瞬間、彼女の了承を得ることなく、青い光となつたウラタロスがフブキの

中に飛び込んだ。

「お前、僕に釣られてみる？」

青いメツシユが入り、メガネをかけたフブキが青く輝く流し目をよこし、手のひらを差し向ける。

発動した超能力によつて、迫つていたイマジンたちの体が宙に浮き上がり、ぐるぐると渦に飲み込まれるように回転させられ始めた。味方にぶつかり、あるいはモモタロスが出した炎に巻き込まれ、敵は見る見るうちにボロボロになつていった。

「はっ！」

最後に衝撃波のような一撃を加え、イマジンたちを遠く空の彼方へ飛ばしてしまふと、ウラタロス・in・フブキはヒュウと楽しげな口笛を吹いた。

「超能力って結構難しいね。あ、でも慣れると結構便利かも」

（なんてこと……!?） いつもより強い力が使えるなんて……!!?）

「なんせ、二人分の力だからね？」

かつてない力に興奮を覚えるフブキだが、イマジンはまだまだ残つていて次々に狙つてきている。

そこで、パンツと手のひらを合わせたキンタロスがキングに目を向けた。

「ほな、あんたにも力貸してもらうで！」

「えつり!?」

自分が呼ばれると思つていなかつたキングは、若干焦りを覚えながら目を見開く。

有無を言わさず黄色の光となつて乗り移つたキンタロスは、近付きつつあるイマジンの胸に強烈な張り手をかまし、思い切り吹つ飛ばした。

「むうん!!?」

伸びた髪を後頭部でまとめ、色の違う金のメッシユを垂らしたキングが、相撲の四股を踏んで勇ましく吠えた。

「涙はこれで拭いとけえ！ …なんやあんましつくりこおへんな、この身体」
（……なんか、ごめん）

実はほぼ一般人並みの力もないキング。他の二人ほど派手な働きを見せられなかつたことに、内心でものすごく申し訳ない気分に陥つていた。

残つたもう一人、リュウタロスは憑依できる相手がもう一人しかいないことに非常に不満を抱いていた。

「え〜…僕この余りい〜?」

「おい誰が余りだクソガキ」

「ちえ〜じやあしようがないや。とうつ！」

ぶつぶつと文句を言いながら、このままだと自分だけ暴れられないと思つたりュウタ

ロスが渋々紫の光となつてサイタマに向かつて飛ぶ。

が、体に入ろうとした瞬間、見えない壁にぶつかつたようにあつけなく弾き返されてしまつた。

「…へぶ!!?」

顔面から思いつきり地面に落ちたりュウタロスはしばらく呆然としていたが、我に返ると信じられないとばかりに目を見開いてサイタマを凝視し出した。

「何この人!!? ゼンツゼン入れないじやん!!?」

「嘘!! リュウちゃんが取り憑けないなんて」

「せやからものすごい力持つとるつていうたやないか」

騒ぐリュウタロスと呆然となるウラタロスに呆れたように返すキンタロスだが、なぜкиングのひ弱さには気がつかないのだろうか。

火加減に慣れ始めたモモタロスは、普段から小生意気なリュウタロスの失敗に意地の悪い笑みを浮かべていた。

「へんつ！ ジャあ小僧はそこでお留守番だな！ どおりやあああ!!?」

雄叫びをあげたモモタロスが、鋼鉄の拳でイマジンたちに殴りかかる。

チンピラの喧嘩のような戦闘が好みな彼にとつて、殴つても蹴つても頭突きしても壊れる気配のないジェノスの体は実に相性がいいようであつた。

「デネブ！　お前はミライを守れ！」

「わかつた！」

「変身！」

モモタロスたちの合間を縫つて近づこうとするイマジンたちを足止めするために、ユウトもゼロノスの姿に変わつて駆け出していく。

デネブがゼロライナーの前に陣取り、指先の鉄砲を打ち出して牽制し、敵が怯んだ隙にユウトがサーベルで斬り裂いていく。

「ウオオオオオオ!!？」

「ぶつ殺せえええ!!？」

しかし、何度も敵を倒しても、どれほど時間が経つても、敵のイマジンの数が減る様子は一向に見えない。

終わる予感のしない戦いの中、徐々にジェノスたちの表情に疲弊の色が見え始めた。いくら力に差があろうとも、戦闘による体力の消耗は抑えようがなかつたのだ。

「チクショウ！　いつまでやつてりやいいんだよ!!？」

どこからか取り出した大きな紅い太刀を振り回し、力の限り暴れまわるモモタロスが苛立ち交じりにわめき出す。

質よりも数の差によって押され始めるヒーローたちを、クチヒコはにいと冷酷な笑み

で見下ろしていた。

「フン…電王になれない貴様らなど、大した脅威では……」

無限に尽きることのない兵を操り、クチヒコはこのままじりじりと憎い仇の体力が尽きるのを待っていた。

しかしその時、ドゴオオン!!?と凄まじい爆発音が響き渡り、包囲網を作っていた配下のイマジンたちが大量に空中に吹き飛ばされた。

「何……!?」?

予想外の事態に、クチヒコは大きく目を見開いて言葉を失う。

吹っ飛ばされたイマジンたちは、その衝撃のあまりの強さによつて粉々に粉碎され、雨あられとなつてその場に降り注いでいる。

その中心でたつた一人だけ、拳を振り上げた男が立つていた。

「なんだ、もう終わりなのか?」

落胆した様子で拳を降ろすサイタマに、クチヒコとミミヒコは得体の知れない恐怖を感じて後ずさる。

倒しても倒しても数を減らさない敵も、異常な力を持つ怪人を前にしても、目の前の男は巨大な岩石のように動じる様子がなかつた。

それだけで、普通の人間ではないのだと鬼の兄弟は察したようだ。

「あ、兄者！　あの禿頭、只者じやねえぜ！」

「そのようだな……だが」

見た目はただの禿頭の一般人だというのに、感じられる気配も何ら変わったところのない平凡なものなのに、何だというのかこの妙な威圧感は。

若干顔を青ざめさせていたクチヒコだったが、やがてその口元に笑みを浮かべた。
「どんなに強大な力を持つた奴が相手だろうが……あの男の力を受けた我らに勝つことはできない」

「！　そ……そうだな！」

クチヒコの激励を受けてか、ミミヒコももとの自信満々な様子を取り戻す。

モモタロスたちは態度を幾度も変える怪人達に訝しげな視線を向け、中でもハナは焦燥を感じているようでよう冷や汗を流していた。

「何だあ？　どういうこつた？」

「ガオウは……一体どれだけの力を手に入れただっていうの」

どれだけ尽きない軍団を操ろうとも、サイタマ一人で片付けられそうな雰囲気が一時流れだが、まだまだ油断はできないらしい。

クチヒコとミミヒコの見せる不気味な笑みが、ハナたちにうまく言い表せられない不安を抱かせた。

「だが、やつに使われっぱなしというのも腹立たしいのは確かだ。他の奴らは排除する
としよう」

「ああ、やるぜ兄者！」

クチヒコの声に威勢よくミミヒコが答えると、鬼の兄弟は天に向かつてそれぞれの武
器を突き出した。

すると、武器は何もないはずの彼らの頭上に激しくぶつかり、亀裂を走らせて空間が
砕き、大きな穴を開けた。

「変身！」

力尽くでぶち開けられた、奇妙な色の渦が巻くその穴の奥から、鬼の兄弟に向けて強
烈な雷が降り注いだ。

雷は鬼の兄弟の体にまとわりつくと、その体を二色の鋼の鎧に変えていく。
片や、三本の角の生えた錫杖を持つた黄金の鬼。片や、二本の角を生やし巨大な金棒
を担いだ白銀の鬼。

明らかに力を増した様子の二人の鬼を前に、モモタロスたちは険しい表情で身構え
た。

「来るがいい……時の守護者ども。今度こそ貴様らを冥府へと送り、全ての時間を破壊
してやる」

クチヒコの殺意と憎悪のこもった声が、要を失つた時の守護者たちに向けられた。

十撃目 奪われた時の列車

「さあ…行け!!」

「あいつらから分岐点を奪い取れえ!!」

各々が持つ武器を掲げ、吠えるゴルドラとシルバラの合図で、無数の怪人たちが再びサイタマたちに襲いかかる。

地震と勘違いしそうなほどに凄まじい地響きが伝わり、闇の中に映る黒いシルエットも相まって見るものに圧倒的な恐怖をもたらしていた。

「いくぜいくぜいくぜえ!!」

しかしモモタロス in ジェノスは臆することなく、ようやく調整に慣れてきた手のひらの火炎放射器を掲げ、勇ましく走り出した。

怪人たちの目前にまで達すると、モモタロスは真正面からの爆炎で相手を迎撃した。
「俺の必殺技！ サイボーグバー・ジョン!!」

手加減なしの業火に包まれ、怪人たちは焼き焦がされる苦痛の中で悶え苦しみ、やがて炭になっていく。

そして本人はやはり、自分の炎で熱そうに悶えていた。

その横では、亀の甲羅を模した槍を振り回すウラタロス in フブキが涼しい顔でスタッフにリツシユに暴れる。フブキ自身のクールな装いも相まって、実に美しい槍捌きで相手を圧倒していた。

「ふんっ！」

少し離れた場所では、分厚く大きな葉の斧を振り回し、キンタロス in キングが豪快に怪人達を斬り伏せる。やや動きづらそうにしながらも、キンタロスの持つ怪力によつて決して敵を寄せ付けなかつた。

「ダイナミックチョップ——マイルド!!」

大きく跳躍すると、怪人の一体の脳天に力強く斧を振り下ろす。

強烈な一撃を受けた怪人は真つ二つに叩き割られ、数歩後ずさつてから地面に倒れ、爆散して激しい炎に包まれた。

「いえーい！」

誰にも憑くことのできなかつたりユウタロスだが、もはやそんなことはどうでもいいとばかりに愉し気に銃を乱射する。

むちやくちな撃ち方だというのに一発たりとも撃ち漏らしがないのが、彼の異様な強さを表す一因となつていた。

「おらあ！」

ユウトもサーベルを振り回し、向かつてくる怪人達を次々に打ち倒していく。激しい火花を散らしながら、巨大な刃が怪人達を両断していった。

四体のイマジンと戦士たちに阻まれ、狙っている少女のもとへと一向にたどり着くことができない怪人達。それでも進軍をやめようとしない彼らの前に、白いマントが翻る。

と思った瞬間、繰り出された赤い拳が、凄まじい衝撃波を放つてみせた。

「必殺…………ちよつとマジなパンチ」

ドツ!!と硬い壁に真正面からぶち当たったかのような衝撃が走り、怪人達はひとまとめにされて吹き飛ばされる。中には全身をバラバラにされてしまうような者もいて、残骸があたりに散らばつて大変悲惨な光景が広げられることとなつた。

だが、ふと気づいた瞬間にはそれらは霞のように消えてしまう。

そしてその向こう側から、バラバラに吹き飛ばされたはずの怪人達が無傷のまま近づいてくるのだつた。

「……なんかちよつとイライラしてきた」

「ああクソ！ ホンツにしつけえな!!？」

いつもやつている雑魚怪人の掃除よりもはるかに苛立たしい単純作業の繰り返しに、サイタマの血管が切れそうになる。

八つ当たりのように剣を振り回すモモタロスを横目に、サイタマは引きつった表情でゴルドラとシルバラを睨みつけた。

「たかが人間が……まずは貴様から排除してくれる!!」

「うおらああああ!!」

サイタマを最優先に倒すべき標的ととらえ、シルバラが金棒を振り回して接近する。岩どころか鉄の塊さえも簡単に破壊できる鋼鉄が、サイタマに向けて雪崩のように降り注がれた。

「鬼神連弾!!?」

見た目以上の重量を考えさせない、無数の残像を残すほどの速さで繰り出される一撃を、サイタマはヒュンヒュンとてつもない速さでかいくぐる。

一片たりとも掠つてさえいないことに気づかないシルバラは、その顔を残酷な笑みで歪めていった。

「おいおいどうしたあ!!? 避けてばつかじやつまらねえぞ!!? もつと俺たちを楽しませろよお!!? ぎやはははは!!?」

耳障りな笑い声を聞いて、サイタマのこめかみにピキリト血管が浮き立つ。絶えず降り注ぐ金棒の連撃を躱したまま、赤い手袋がぐつと握りしめられた。

「は——ぐつはあああああ!!?」

「ミミヒコオオオオオオオオ!?!?」

醜く歪んでいた顔が、拳をもろに受けてより醜く破壊される。金棒までもが粉々に碎かれ、鬼の仮面が鼻の部分を中心に大きく陥没。その勢いのまま頭部がスイカのように血飛沫を撒き散らしながら試算し、ゴルドラが思わず悲鳴を上げた。

「んだよ。たいそうなこと言つといてもう終わりかよ」

シルバラの血を全身に浴び、真っ赤に染まつたサイタマがつまらなそうに呟く。

じやあ次はとゴルドラの方を向いたサイタマだつたが、ふとその目が訝し気に細められた。

自分に降りかかった血が、ビデオの逆再生のようにはがれていくのが見えたからだ。

「！」

目を見開くサイタマの前で、飛び散った血が、肉片が一点に集まり、もとの形へと逆再生されていく。

鬼の仮面が修復され、その目に光が戻ると、シルバラはゴキリと首を鳴らして氣だるげにサイタマを睨みつけた。

「ククク……言つたはづだ。貴様らが我らに勝つことなどできないと——」「うわ気持ち悪つ!?!?」

「ぐわああああああああああああああ!!?」

「兄者ぎやあああああああああ!!?」
仮面の下で不敵な笑みを浮かべていたようだが、顔を真っ青に染めたサイタマの連續の拳打によって、鬼の兄弟はまとめて粉碎されてしまう。

サイタマの反応は例えるなら、せっかく潰したと思ったゴキブリが復活して再び向かってくるかのような感じだった。

「サイタマく——ん！　あいつらいくら倒したって復活するから意味ないよ！　早く乗つて！」

「ん？　お、おう…」

あまり見たくはない光景を見せられ、肩で息をするサイタマに、背後からデネブが手を大きく振つて呼びかけた。

正直もう無限に湧く怪人の相手は面倒くさかつたし、気持ち悪いものを見てしまったサイタマは素直にそれに従い、先に乗りこんだハナたちのもとへと急いだ。

「くつ…逃すな!!?」奴らの首を獲り、分岐点を奪い取れ…ぐわつ!!?」

身体が再生されるのを待ちながら、部下の怪人達に命令するゴルドラだが、ゼロライナーはそれらを引きつぶすように容赦なく発進する。

天空に向かつて伸びていくレールに沿つて、牛の顔を持つ列車は夜空を突き進んで

いった。

なんとか列車の中に戻り、ほつと息をつく一同。

憑依していたイマジンたちが光となつて飛び出すと、いの一番にジエノスがモモタロスに掴みかかつた。

「貴様：よくも勝手におれの体を…!!」

「何だコラ!! あの方が強かつたじやねえかよ！ 文句があるなら言つて見やがれポン

コツサイボーグが!!」

「焼却する…!!」

「やめなさいよアホ共!!」

怒り心頭のジエノスと、逆ギレするモモタロスの脳天にハナのチョップが突き刺さる。

ばつが悪そうに引き下がる二人にため息をついてから、ハナはふつと肩をすくめてサイタマ達の方を向いた。

「とにかく助かつたわ……あんなゾンビみたいな連中、いつまでも相手していられないもの」

気の強い彼女からの素直な感謝を受け、サイタマは「おう」と気の抜けた返事を返す。

ようやく落ち着いたジエノスは、改めて疑問に思つていたことをハナにぶつけた。

「あれは一体どう言うことだ。先生の攻撃を受けてなぜ復活できる」

「それがわかれれば苦労はしないわよ」

座席にどっかりと腰を下ろし、ハナは苦い表情を浮かべた。

「あいつらはもともと、ミライが戦つて倒してきたやつら。時間を超えて悪さをしようとしてきた奴らだから、ガオウと近い目論見があるんだろうけど……どうやって復活したのかまでは」

かつて戦い、相當に苦戦してきたのだろう。

またそんな敵を相手にするなど、それも何度も蘇るようになつたなど考えたくもないのだろう。その表情は曇りを見せていた。

「ただ言えることは……あいつらはまだ、ミライを執拗に狙う理由があるということ。分岐点であるあの子の身柄を押さえる事こそ、あいつらが目的を達成させるために必要な不可欠なこと……それだけは、許しちゃいけない」

言い切つてからも、ハナの表情は暗く沈んだままだつた。

ジエノス達もほぼ同じ心境であつた。今回の怪人は、これまで相手にしてきたどんな敵よりも厄介な能力を持つてゐるのだから。

「どういう理屈で蘇つてゐるのかしら…」

「なんかRPGの勇者みたいだよな」

「思いつきり悪役だけどね！」

「とりあえず今できることといえば、このまま逃げ続けながら対策を練ることだけよ。絶対に何かできることがあるはず…」

ハナは眠り続けるミライを見やり、自分だけでもしつかりしなければと思ったのか、イタマが含まれていないのは、もはや通例のようであつた。

そんな彼らの少し後ろで、キングは一人考え込んでいた。

(RPGの勇者か……サイタマ氏つてばいい例え思いつくな)

先ほどサイタマがぼそりと呟き、リュウタロスが肯定していた言葉が、キングは妙に気になっていた。

たとえ死んでもある時間、ある場所で勝手に蘇る。ゲームによつてはデスペナルティがかかつたりすることもあるが、基本的にはもとの状態で蘇つて再び敵キャラに挑む事が出来る、ゲームでは不可欠なシステムだ。

(考えてみたらああいうのつて、普通の人から見たらどんな感じなんだろうな。死んでも死んでも蘇つてくる奴とか、普通なら迫害とかされそうだよなあ。魔王も魔王でドン引きしてそう…自分は一回でも倒されたら終わりなのに)

ゲームだからこそ当たり前で、現実だつたらまず考えられないシステムをキングは馬鹿正直に思考する。

生活がゲーム中心の彼としては、そう言つたことぐらいにしか興味がわかななかつた。（死んだ事をなかつたことにしてゐるんだから、他の奴らから見たらざるいよなあ……ん？）

だがそこで、キングはあることに気づいた。

それもこの一件に深くかかわりそうな、とてつもなく重要そうな事実に。

（……ガオウつてやつが、分岐点であるミライ氏の記憶を奪つて、自由に改竄できるつてことはつまり――）

自分が思いついた考えに、キングはまさかと冷や汗を流しながらも、もう一度思考する。

だが、彼がその考えをまとめなおすよりも前に、ゼロライナーに突如大きな揺れが襲い掛かつた。

「きやあ！」

「なんだ！」？

爆発かなにかでも起きたような轟音と衝撃が響き渡り、揺れるゼロライナーの中でジエノス達は目を見開く。

すると、ゼロライナーを操縦していたユウトが慌てた様子で知らせてきた。

「攻撃を受けてる…!!? 後ろだ!!?」

切迫した声が、事態の深刻さを物語つている。

ハナは急いでゼロライナーの窓の付近に顔を寄せ、こちら側に攻撃を仕掛けている相手を見ようと目を細め、やがて驚きと焦燥に大きく見開かれた。

ゼロライナーの後を追うように走行しているのは、鮮やかな赤を基調とした流線型の列車。割れた桃のような意匠の先頭車両のそれは、車両のあちこちからキヤノン法や砲台やミサイルなどを展開し、ゼロライナーに向けて発砲し続けていた。

「デンライナー…! ってことはあれに乗っているのは!!?」

表情を引きつらせたハナが、操縦席のある先頭車両を凝視する。

奇しくもハナの予想通り、デンライナーの先頭車両には件の最低最悪の怪人、ガオウの姿があつた。

「…ようやく見つけたぜ、小娘ども」

列車と接続されているバイクを操り、我が物顔でガオウはデンライナーを駆る。

ユウトもまたゼロライナーの操縦席であるバイクを操るも、両方の車両は引きはがせないほど近づけられてしまつていた。

「クソ…! 完全に背後をとられた!!」

「おいこつちからはなんかできないのか!!?」

「こつちの武装に遠距離攻撃はない！　ぐあ！」

一方的にやられてたまるかとイマジンたちが操縦席に殺到するが、回避で精いっぱいのユウトは鬱陶しいとばかりに閉め出す。

しかしそれもついに限界を迎へ、爆撃を受けたゼロライナーは車体を大きく傾けさせ、レールを外れて真っ逆さまに落ちていった。

「うわああああ!!」

「ぎやあああああ!!」

「…しばらくおとなしくしてろ、ゴミ共」

時空の渦の中へと落下していくゼロライナーを見下ろし、ガオウはフンッと残酷な笑みを浮かべる。

その笑みはやがて、大きく上質な獲物を前にした獣のような、獰猛で冷ややかな恐ろしいものへと変わつていった。

「さあ、狩りの時間だ」

ガオウは血に酔つたような、恍惚とした目でレールの先を凝視する。

自らが望む世界が、それを創造するための下地に向かうため、ガオウはバイクのアクセルを限界まで引き絞つた。

十一撃目 牙王の凱旋

異変に最初に気づいたのは、三人の弟子を連れて街を歩いていた和服に刀を提げた中年の男、S級ヒーローのアトミック侍だつた。

「……なんだありや」

ふと感じた違和感に、彼はその場で立ち止まると刃を思わせる険しい目で天を仰ぎ見た。

さつきまで晴れ渡つていた空は、急激に立ち込めてきた分厚く暗い雲によつて塗りつぶされ、光をのみ込んでしまつていた。

「急に曇つてきましたね：」

「それにしちゃあ……妙な広がり方してねえか、あの雲……？」

弟子の一人のA級ヒーロー、イアイアン・オカマイタチ・ブシドリルも何かを感じ取つたのか、訝しげな視線を天に向けて眉をひそめている。

しかし、ただ単に奇妙な天気だなという感想しか抱いていない弟子とは異なり、アトミック侍は鋭く虚空を睨みつけている。

その数秒後、彼らの目は驚愕によつて大きく見開かれていた。

「おい・まじかよ」

視界に映り始めたその光景に、アトミック侍はくわえていた葦の葉を取り落としそうになりながら絶句する。

次第に異変に気付き始めた人々の目にも、天空の雲の間から徐々に姿を現してくるその巨大な物体を目の当たりにし、小さな悲鳴やざわめきを響かせ始めた。

「せ……戦艦！」

暗雲を割いて現れた、髑髏の船首を持つ島と見間違わんばかりの大きさを誇る戦艦だつた。

戦艦はその巨体のあちこちに備え付けている、一つ一つが百メートルはある大砲を動かし、ビル群に向かつて容赦無く砲撃を放ち始めた。

「うわあああ！」

「きやああああ！」

大砲が爆ぜ、ビル群が砲撃を受けて粉々に碎かれると、真下にいた人々は崩落や瓦礫の直撃を恐れて逃げ惑う。

その最中、町中に設置された警報機がうなりをあげ、もはや聞き慣れた氣もする放送を流した。

『緊急警報発令！ 緊急警報発令！ 現在A市において、レベル龍に相当する事態が起

こつて います！ 近隣住民の皆様は、政府の指示に従つて速やかに避難して下さい！ 繰り返します――！」

すでにほんと聞いている余裕はなかつたが、警報機は己の役目を果たすために無機質な声を響かせる。

しかし不意に、うるさく叫んでいた警報機は何者かの攻撃を受けて破壊されてしまつた。

「げはははははは!!」

「久々のシャバだああ!!」

口汚く騒ぎながら現れたのは、地面に散る砂から生まれ出てくる怪人の数々。どこかで見たような、昔話の登場人物を模したような無数の怪人たちが、我が物顔で街を闊歩し始めた。

「まさか……これも師匠の言つていた最近の異変と関係がリ!!」

「とりあえずは……喋つてる場合じやなさそだぜ！」

イアイアンが戦慄した表情で目を剥いていると、ブシドリルやオカマイタチが自分の得物を用意して怪人たちを見据える。

話している間にも、現れた怪人たちはさらにその数を増やし、逃げ惑う人々の方に近づいているのだから。

「ひいいい！」

逃げ遅れたらしい一人の男性の元に蟹型の怪人が近づき、ガシヤガシヤとハサミを鳴らして追い詰めていく。

ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべた怪人が、鋭く研ぎ澄まされたハサミを大きく振り上げた。

アトミック斬 !!

だがその刹那、無数の銀色の閃光が走り、蟹の怪人に襲いかかる。

蟹の怪人は一瞬訝しげに動きを止めると、少しの間を空けてバラバラに崩れ落ちていき、爆発四散してしまった。

九死に一生を得た男性は、自分を助けてくれた相手を見上げて大きく目を見開いた。

「あ…アトミック侍！」

「早く行きな。流石の俺も、守りながらじやちとキツイぜ」

神速の剣術を誇るアトミック侍は、怪人の軍勢を睨みつけながら眉間にしわを寄せる。

助けたばかりの男性や近くにいた民間人が避難するのを確認しながら、アトミック侍は見惚れるように固まっている弟子たちに鋭い目を向けた。

「てめえらは街の連中の避難誘導だ!! 誰一人死なせるんじやねえぞ!!」

「は…はい！」

ハツと我に返つた弟子たちは、すぐさま師の命を聞いて走り出す。

ほかのB級やC級ヒーローも、一般人の避難誘導のために動き出しているのを横目で確認すると、アトミック侍は刀を肩に担いで怪人たちを見据えた。

「さてと、いちにいさん……数えんのもめんどくせえぐらに揃つてやがるな」
ざつと見ただけでも、道路が埋まるほどの数の怪人たちがアトミック侍を取り囲み、それぞれが持つ武器を突きつけている。

もとより退く気などないが、退路を完全に立たれていることも気にせず、S級ヒーローはニヤリと不敵な笑みを見せつけた。

「見てるだけで眠くなりそうだからよ、片つ端からかかつてこいや。……まとめて叩き斬つてやる」

「ナメるな人間ごときが!!」

あからさまな挑発に乗つた怪人たちが、一斉にアトミック侍に向けて襲いかかる。四方八方、さらには大きく跳躍した個体が頭上から迫つてくるが、アトミック侍は全く狼狽する様子など見せない。

彼が一度刀を抜いた直後、光の爆発かと見間違わんばかりの閃光が走り、怪人たちを細切れに切り刻んでいたからだ。

「他愛もねえ…………あん？」

数や見た目だけしか対したことがないことに、アトミック侍はやや不満げにこぼす。しかしその目はすぐさま鋭く尖り、再び刀を抜いて背後から迫る凶刃を間一髪で防いだ。

「ヒヤハア!!」

刃同士が激しく激突し、大量の火花が辺りに飛び散る。

アトミック侍は、刀にかかる重量に少しだけ顔をしかめつつ、目の前で下卑た笑みを浮かべている狼の顔の怪人を睨みつけた。

その顔に、はつきりと見覚えがあつたからだ。

「……お前、さつき斬ったよな？」

「さあ……どうだかな!!」

甲高い金属音を響かせ、アトミック侍と怪人が大きく距離を取る。

鬱陶しそうに眉間にしわを寄せていたアトミック侍は、視界に入るいくつもの異形の影に思わず目を見開いていた。

「おいおい…………こりやちよいと冗談きついぜ」

冷や汗が流れるが、それは敵の脅威に対するものでも、疲労によるものでは決してない。

斬り殺したはずの怪人たちが、先ほどと全く同じ姿で自分を取り囲んでいるという、理解が追いつかない光景が広がっていることへの混乱によるものだつた。

「斬つても斬つても数が減らねえどころか、一体たりとも斬れてねえじやねえか!!」苛立ち交じりに声を荒げるアトミック侍を、怪人たちにはニヤニヤと下卑た目で見下ろすのだった。

「……これは、どうなつてるんだ!! あたり一帯に異常な磁場の乱れが……いやそんなレベルじゃない!! 世界そのものがおかしくなつてゐみたいだ!!」

建物の間の狭い通路、そこに身をひそめるようにしながら、ノートパソコンを開いてキーボードを叩く童帝。

画面ではいくつもの数値が不規則に変動を繰り返し、映像化されたラインを歪に曲がりくねらせていた。

「時空の乱れ……? いや、さすがにそれは非現実的すぎる。SFやアニメじやあるまいし……でもこれは」

周囲の状況、特にいま現在起こつてゐる謎の現象について調べていた彼は、険しい表情で画面を凝視して思考に没頭する。

一心不乱にキーボードを叩き、数値を確かめる童帝の姿は、近づいてきた怪人たちに

してみれば絶好の獲物だつた。

「ぎやはははは!! 新しい獲物はつけくん!」

「今忙しいんだから邪魔しないでよ!」

おぞましい声で手を下そうとした熊の怪人は、童帝のランドセルの中から飛び出した無数のロボットアームによつてバラバラに解体されてしまう。

追加で爆破まですると、調査の邪魔をされて苛立つていた童帝は少しだけ溜飲を下げた。

「まつたく…」

調査を続行しようと視線を戻しかけた童帝は、ハツと目を見開くとその場から跳びのき、振り落とされた巨大な腕をかろうじて躲した。

童帝はすぐにロボットアームを構えるが、攻撃してきた怪人の姿をみると困惑で固まつてしまつた。

「え!! な…なんで!! お前は今さつき僕が…」

「なんででしようねえ!!」

いま先ほど襲われ、撃退したはずの熊の怪人は、天才の人間が理解できない事態に遭遇し、混乱する姿に笑みを浮かべる。

持ち前の性格の思考ができなくなつてゐる隙を狙い、怪人は鋭い爪を振りかぶつた、

だが。

ダークエンジエルラッシュ!!

真横から振るわれた、とてもない威力と速度の拳の連撃が怪人に炸裂し、あつとう間に爆発四散させてしまう。

童帝は飛び散る破片をロボットアームで防ぎながら、かばうように現れた全裸の豪傑を思わず凝視した。

「大丈夫かね!! 童帝君!!」

刈り上げとアフロを合わせたような特徴的な格好の、見上げるほどの巨体を持つ漢女は、頼もしい野太い声で童帝を気遣う。

「ぶりぶりプリズナーさん!!」

「そう! あなたのため脱獄完了! ぶりぶりプリズナーだ!! …ム！」

男性を好む肉弾戦系S級ヒーローはグッと親指を立て、巷ではあまり人気がない不敵な笑みを見せる。

強さと優しさをアピールし、男子からの好印象を望んでいたぶりぶりプリズナーだったが、その表情は固く険しいものに変わる。

「これは……ずいぶん厄介な事情のようだな」

再び倒れたはずの怪人が、三たび何事もなかつたかのように目の前に立っていること

で、ヒーローたちはさらなる警戒を余儀なくされた。

「オラオラオラオラア!!?」

別の場所では、尋常ではない固さを誇るバットを振り回すリーゼントに学ラン姿の青年、S級ヒーロー・金属バットが、イライラした様子で暴れまわっていた。

バットの固さだけではない、金属バットの凄まじい膂力により、打撃の嵐が怪人たちを次々に粉碎していった。

「クソツッ!! めんどくせえ上に気持ち悪い!!」

目に入っていた怪人たちを軒並み叩き潰し、ようやく一息つけるかと思えば、あたりに積み重ねた怪人の骸は霞のように消え去り、代わりにピンピンした様子の同じ怪人たちが向かってくる。

手のひらにペツと唾を吐き、金属バットは再び愛用のバットを振りかぶる。

「今日は妹の劇の発表会なんだっての!!?」

これはまた、約束を守れなかつたことで怒られるかもしれない。

わかっていても、次々に現れる怪人たちと戦うことを中心にはいかなかつた。

すぐ近くでは、動きやすいタンクトップ姿の男たちが、徒党を組みながら怪人たちを

相手にしている。

その中でも別格の動きを見せるのは、短髪に藍色のタンクトップを合わせた、他の男たちよりも凶刃な肉体を持つ巨漢だった。

「タンクトップラリアート!!?」

S級ヒーロー・タンクトップマスターが鍛え上げた四肢が放つ、強烈な一撃が怪人たちに炸裂し、異形の群れがまとめて吹き飛ばされる。

その光景に、彼の舍弟であるヒーローたちは我が事のように騒ぎ立てるのだった。

「決まつたあああ!!? タンクトップラリアート!!?」

「タンクトップの動きやすさが可能にする、あらゆるもの吹つ飛ばす無敵の一撃だア!!?」

恐ろしい外観の怪人たちが、ボウリングのピンか何かのように吹き飛ばされていくと、舍弟たちは気持ちの良さそうな笑い声をあげる。

だがその表情は、倒れた怪人たちが再び無傷の姿で現れたことで凍りつくこととなつた。

「ウソだろ…おい」

「よし弟よ、逃げる準備だ!!?」

みるみるうちに顔色を悪くしていく舍弟たちを背にかばいながら、タンクトップマス

ターは眉間のシワを深くしていた。

「……不死身か。だが、それと俺が退くこととは無関係だな」

倒しても倒してもキリがなくとも、怪人から逃げる理由にはならない。

そう告げたタンクトップマスターは、凄まじい雄叫びとともに再び怪人たちに向かつて突つ込んで行つた。

また異なる場所、とある公園では白い犬の着ぐるみを着たヒーロー、番犬マンが怪人たちの残骸を放り捨てて息をつく。

狩つた怪人の数は百や二百をとうに超え、山のように積み上げられているはずだつたが、視界に入るのは無傷のまま向かつてくる異形たち。

「…ひとのナワバリでうるさいな」

滅多に自分の担当場所から離れない彼にとつて、自分の領域を我が物顔で侵そそうとする輩がいるだけで不快以外の何物でもない。

終わる気配のない謎の現象への疑問よりも、なかなか片付かない面倒ごとへの苛立ちが優つていた。

あらゆる場所で、多くのヒーローたちが懸命に戦闘を繰り広げる。

今のところはまだ、誰も敗北する様子など見られない。だが、止む気配のない敵の増援と蓄積していく疲労は、確実にヒーローたちを蝕んでいく。

強力な戦士が、徐々に力を削がれていく。それは、この一件の黒幕にとつて望み通りの展開であった。

「ククク……慄け、恐れよ、愚民どもに役立たずの似非ヒーローデモ。どうせ全部消える世界で、必死に足搔いてみせろ」

大きな瓶の酒を呷り、焼いた獣の肉を乱暴に食いちぎるガオウは、街のあちこちから聞こえてくる悲鳴や破壊音に満足げに笑みを浮かべる。

聞こえてくる音は全て、これから始まる祭を盛り上げるためのBGM。上がる火の手は、祭を彩る提灯代わりだ。

「さあ……俺様主催の宴の始まりだ!!」

恐怖と絶望が支配する世界を作り出し、ガオウは高らかな嘲笑をあげるのだった。

十一撃目 蘇る凶敵

「童帝、およびぶりぶりプリズナー、怪人との戦闘開始！」

「アトミック侍の戦闘、継続中です!!?」

暗い空間の中、モニターや計器の光がいたるところで瞬き、スーツ姿の男女数人の顔を照らし出す。

幾千もの戦闘をサポートしてきた組織のエリートたちは、かつてないほどに切羽詰まつた様子で目の前の機材に集中していた。

「謎の怪人集団、現在も増殖し続けています!!?」

「市民の避難、まだ20%しか完了していません!!?」

冷や汗を流し、険しい表情になつた彼らは次々に送られてくる情報を片つ端から整理し、ヒーローたちへの指示を放つ。

だが、全国から舞い込んでくる謎の怪人軍団の情報はありえないほどの量で、とても数人のオペレーターだけで捌き切れるものではなかつた。

「一体……何が起こっていると言うのだ…!!?」

鬼気迫る様子でオペレーションに挑む部下たちを見下ろし、ヒーロー協会の職員であ

るシツチは震える声を漏らす。

いつも通りのはずだった。いつも通り怪人が現れ、それをヒーローに伝えて倒すまで待つ、その繰り返しが待っているはずだった。

なのに、いま起こっている状況は一体なんだというのか。

「童帝君の言つていた異変といい、突然現れた連中といい：理解のできないことばかり起こっている……！」

戦う力のない、肩書きさえなければただの一般人でしかないシツチは、もはやヒーローたちが自体を収束させてくれることを願うほかにない。

ただ縋ることしか、彼にできることはなかつた。

「アマイマスク、現場に到着しました！」

それ故に、強力なヒーローの登場の報を聞けば、現金だとわかつていても笑みを浮かべずにはいられなかつた。

一瞬、まばゆい閃光が走つたかと思えば、次の瞬間には怪人たちが細切れに切り刻まれて爆散する。

手にこびりつく砂を気持ち悪そうに払う甘い顔のヒーロー・アマイマスクは、すぐにまた現れる怪人たちに舌打ちする。

「うつとうしい……！」

苛立たしげに、精巧に整った顔を歪めた彼は、迫りくる悪を全て殲滅するため、固く握り締めた拳を携えて迎え撃つ。

旋風と爆炎の中で戦う姿は美しかつたが、同時にとてもない冷たさを見せつけるものであつた。

「噫れ、我が愛槍・タケノコ！ 五連突き！」

タケノコの形をした穂先が、目にも留まらぬ速さで突き出され、五体の怪人達に一つずつ大穴を開ける。

胸の中心を貫かれ、体をえぐられた怪人達は断末魔の悲鳴さえ上げられず、バタバタと倒れて爆発四散していった。

「くそっ……倒しても倒してもキリがねえな！」

必殺技とも言える大技を出したA級ヒーロー・ステインガーは、大粒の汗を垂らしながら肩を上下させる。

消耗によりうまく動けない彼の元に数体の怪人が迫るが、そこに稻妻を纏つた蹴りが割り込み、怪人達をまとめてなぎ払つた。

「大丈夫か、ステインガー！」

「悪い！ イナズマックス！」

いつもなら順位を競い合うライバル、しかし現在のこの状況では序列にこだわっている暇などなく、互いを守り合う体制が自然とできている。

「俺たちがしんがりになつて、民間人を避難させる。それはわかるが……」

「こうも数が多いんじやなあ……」

謎の戦艦と怪人軍団による襲撃から數十分。

多くのヒーローが自体解決のために駆り出されているが、怪人側も相当な実力者が多数いるらしく苦戦を強いられている。

荒い息を着く二人の元に、数体の怪人を相手にしていた、蛇のように滑らかに鋭い拳法の達人が声をあげた。

「ぼやいてる暇があるなら戦え！ 敵は待つてはくれんぞ！」

「わかってるっての！」

蛇咬拳のスネックの叱咤によりやる気を取り戻したステインガーとイナズマックスは、自らに課せられた役目を果たすために再び怪人達に挑むのだつた。

数百人ものヒーロー達の尽力により、大勢の一般市民達が逃げる時間が稼がれる。

しかしどんなにヒーロー達の努力が積み重ねられようと、事態が好転するわけではなかつた。他でもない、民衆のせいで。

「どけよお前！」

「ばか、押すなつて！」

「もつと急げよ！」

「うわああああ来たあああ!!?」

怪人との戦闘に向かないC級ヒーロー達に誘導される市民達だが、皆が皆自分が先に助かることばかりを考え、大騒ぎになつてゐる。

互いに押しのけ、踏み越え、自分勝手に他者を出し抜こうとする者が多く、誘導があつてもうまく避難してくれないので。

「落ち着いて！ ヒーローの誘導に従つて速やかにシエルターに避難を！」

C級ヒーローの一人、無免ライダーはどんなに呼びかけても、自分のことばかり考えてしまう市民達に歯噛みする。

脳裏に浮かぶ怒りは、ということを聞いてくれないことへではなく、耳を貸してもらえない自分の力のなさに対するものだつた。

「くつ…一体や二体ぐらいなら、僕だつて囮にぐらいなれそなのに…！」

無数に湧き出す怪人達のうちの一體や二体では、大した助けにはならないだろう。

あくまで自分は一般人並みの力しかないという事実が、無免ライダーの両肩にとてつもない無力感としてのしかかっていた。

「おい！ もう行こうぜ！ あらかた避難させただろう!!？」

「急がねえと俺たちもあいつらの餌食になつちまうぞ!!？」

「あ、ああ：わかつた。すぐにいく」

大体の市民の避難が完了したと判断し、他のC級ヒーロー達が無免ライダーに促す。このままここにいれば、自分たちも危険であるからだ。

その時だった。どこかの戦闘の余波により、巨大な瓦礫が無免ライダー達に向かつて吹き飛んできたのは。

「危ない!!？」

とつさに顔を腕で覆つて防御態勢をとるC級ヒーロー達だが、その程度で身を守れるはずもない。

しかし次の瞬間、飛来してきた瓦礫は何者かによつて粉碎され、バラバラにあたりに飛び散つていった。

「大丈夫かね、君たち!!？」

そう無免ライダー達に声をかけるのは、ブーメランパンツ一丁の装いで、黒く艶やかな肌に鋼のような逞しい肉体を誇示する大男。

怪人の攻撃ではびくともしない、凄まじい肉体の頑丈さに無二の評判を持つヒーローのトップの一人大つた。

「え…S級のクロビカリ…！」

「苦戦しているようだね……だが安心したまえ。俺がここにいる限り！」

無免ライダー達を庇つた超合金クロビカリは、すぐに振り向いてまた集まり始めた怪人達を睨みつける。

ムキッ、というよりミチミチイツ！と聞こえそうなほどに筋肉を膨張させ、山のような巨体を邪悪な怪人達に見せつけた。

「こいつらは見た目こそゴツいが、俺ほどの防御力はないようだ。つまり、俺のこの鋼のボディさえあれば臆する必要はないということだ!!？」

力説するクロビカリだが、怪人達もただポーズを決められただけで臆するほどやわではない。

醜悪な怪人達が徐々にヒーロー達との距離を詰めていった時、不意に怪人達が左右に分かれ、道を作り始めた。

「……む？」

「あ…あれは…！」

突然の謎の行動に、クロビカリもC級ヒーロー達も訝しげに眉をひそめる。

そんな中ただ一人、無免ライダーのみが怪人達の列の間を歩いてくる「巨大な影を目の当たりにし、ゴーグルの下の目を大きく見開いていた。

「あらあ…？ なんだか見覚えのあるゴミどもがたむろしてるじゃない…!!？」

現れたのは、黒光りをもける筋骨隆々の体と鱗のびつしりと生えた緑色の肌をした、魚類のヒレのような耳を持つ怪人。

赤いマントに王冠を被つた、王と呼ぶにふさわしいでたちの怪物が、他の怪人達を従えながらニンマリと笑みを浮かべた。

「…………!?」 深海王：なのか!??

かつて数人のS級ヒーローを相手に止めることができなかつた、本物の怪物。

一度は討伐されたはずの最恐の存在が、今再びヒーロー達の前に立ちふさがつていた。

「ふはははははははは!!？」 全く事情は飲み込めんが、これほどの僥倖を逃す理由はないだろうな!!？」

高らかと笑い声をあげ、天空を我が物顔で飛び回る天狗の怪人。

天空王を名乗り、ヒーロー協会本部を少数で襲撃するほどの猛者が、下卑た笑みを浮かべながら逃げ惑う人々を見下していた。

「ホーク！ イーグル！ ファルコン！ カイト！ 遠慮はいらんぞ……好きなだけ暴れるがいい!!？」

自分の息子達に命じ、天空王も口から巨大な火炎の玉を吐き、街を次々に破壊していった。

また別の場所では、マグマのような体に四本の腕を持つ異形が、地面や建物を溶かしながら市民のいる方向へと歩いていく。

その後を、土塊を固めたような姿を持つ無数の兵士たちが付き従い、アスファルトを踏み砕きながら進軍を開始した。

「此度こそ、我ら地底族が世界を支配する時!!？」

大地の力を持つ、地底王と呼ばれるその怪人もまた、王と呼ばれるにふさわしい威厳のこもつた声で宣言してみせた。

さらに少し離れた場所では、隕石が一つ落ちてきたのかと勘違いするほどの轟音と衝撃が鳴り響く。

その音の原因はあろうことか、全長数千メートルはあろう超々巨大な怪人の足音であった。

「兄さん…どこにいるんだ兄さん!!?」

なぜか涙を流す怪人は、歩くたびにあらゆる建造物を破壊しながら何かを求めて叫び続ける。

その声もまた凄まじい轟音となり、あたり一帯のガラスや金属を震わせ、一切触れることなく粉々に破壊していく。

「うおおおおおお!!? 兄さんはどこだあ!!?」

探しているものが見つからない悔しさからか、巨人はさらに激しい足取りであたりを歩き回り、様々なものを破壊していく。

その光景を、どうにか建物の陰に身を潜めたC級ヒーロー達が戦慄の表情で凝視していた。

「おいおいおいおい……あいつらどう見ても、前に散々暴れてS級ヒーローに倒された連中ばかりじやねえかよ…!?」

「何でまだ生きてんだよ…!?」 意味わかんねえ…

あちこちで目撃される超強力な怪人達、それらは皆上級ヒーロー達と相対し、対処されてきたはずの危険な存在。

それがまとめて蘇ってきたなど、悪夢としか思えない光景であつた。

「どうなつちまうんだよ、俺たちは…！」

ガタガタと震え、頭を抱えるヒーロー・ひよつとことスタッズドレス。するとそのすぐそばから、赤鼻マンが一目散に駆け出していった。

「あつ、おい！」

「どこいくんだよお前!!?」

「決まつてんだろうが！ 逃げるんだよ!!?」

呼び止める二人に振り向くと、赤鼻マンは目を剥きながら怒鳴りかえした。
「あんな化け物どもを相手に戦えるわけねえだろ!!? あんなのはS級の連中に任せとけば、勝手に片付けてくれるんだつてきつと!!?」

「呆れるほど無責任だが賛成だ!!?」

「俺たちだつて死にたかねえ!!?」

ヒーローを名乗るくせに情けない印象もあるが、彼らもまた一般人より少し強い程度のC級ヒーローでしかない。危ない橋を渡る義務はないのだ。

「ん？ なんだアレ？」

しかしふと、先頭を全力疾走していた赤鼻マンが立ち止まり、物陰でコソコソと動いている影に気づく。

思わず声を漏らすと、潜んでいた影はビクッと盛大に身を震わせて倒れこんだ。
「ひつ…ヒイイイ!!? ま、ままま待つてくださいい…!!?」

物陰に潜んでいた、もやしに手足が生えたような貧弱そうな生き物が、青い顔で頭を抱える。

ビクビクと怯える哀れな姿に、C級ヒーローたちは肩透かしを食らっていた。
「ぼ、僕は全然全く強くなんてないんですうう!!? やめて殺さないでええ!!?」

「…なんだこいつ」

「敵意がまるで感じられない……ホントに怪人か?」

「おい赤鼻マ……」

「こんな雑魚に関わっていないでさつさと逃げよう、とスタッズドレスが赤鼻マンに振り向く。」

その視線の先で、赤鼻マンはニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて、どう見ても弱そ
うな一匹の怪人(えもの)を見下ろしていた。

「正直さあ……ヒーローが一体も怪人倒せないってのはカツコ悪いなつて思つてたんだ
よなあ……!」

「おい、放つておけよ! さつさと逃げようぜり!?」

「ああ、逃げるよ。…ただし」

ひよつとこの制止も無視し、尻餅をつきながら後ずさる怪人にゆっくりと近づいてい
く。

強者
弱者

「怪人がネズミをいたぶるような、圧倒的優位さに立つ優越感に浸る赤鼻マンは、ついに大きく拳を振り上げて怪人に突進した。

「怪人一匹分のボーナスを確保してからなあ!!?」

あからさまに弱そうな敵にのみ強気になる、ヒーローとしての資格に問われる表情となっている赤鼻マン。

迫りくる拳を前に、怪人は涙目で悲鳴をあげていた。

「冷ええええ!!? で、でも僕——」

その表情が、次の瞬間一転する。

恐怖に引きつっていた顔が、あつという間に悪意に満ちた捕食者の形相へと変貌したのだ。

「お前みたいな雑魚には絶対殺されないんですううう!!?」

怪人が手をかざした直後、とてつもない冷気が迸り赤鼻マンを飲み込み、一瞬にして氷の牢獄の中へ閉じ込めてしまった。

ひよつとことスタッドレスは一瞬思考を停止させ、間抜けな顔のまま固まっている赤鼻マンを凝視する。

「なつ…!!」

ようやく我に返り、臨戦体制に入つた時にはもう遅い。

改めて向き直った怪人の手によつて、残る二人のC級ヒーローも一言も発することなく、分厚い氷の中に閉じ込められてしまつた。

「それとおゝ……いい気になつた弱い奴をぶつ殺すのも大好きなんですか……!?」
弱者の皮を被り、まんまと獲物を仕留めてみせた怪人——やせ細りもやしは、そう
いつてにたりと不気味な笑み度浮かべるのだつた。

十三撃目 逃げろ！

A市の上空を我が物顔で旋回する巨大な戦艦。その砲門は今、街ではなく上空に向かって構えられていた。

立て続けに放たれる大砲が狙っているのは、鈍色に光る鋼鉄の鎧を纏う機械の戦士、S級のメタルナイトだった。

『…コレホドノ規模デアリナガラ、通常ノ戦艦ト同等以上ノ機動力ヲ有シ、ソノ上空マデ飛ベルノカ。前回ノ宇宙船トハマタ異ナル技術力ニヨルモノノヨウダナ。……素晴ラシイ』

自身に、正しく言えば遠隔操作された機体に向けて放たれる砲撃を躊しつつ、攻撃のタイミングを計り続ける。

一般人や街を守るためではない、純粹に戦艦と戦い、破壊するためだ。

『ドゥニカシテサンプルヲ採取シテミタイガ、ソウソウマクハイカヌヨウダナ』

高速で飛行するメタルナイトを脅威と判断したのか、戦艦はほぼ全ての砲門を迎撃のために使用している。

まさに嵐のように放たれる砲弾だが、メタルナイトはそのことごとくを軽く回避

し、機体に搭載されたミサイルポッドを展開させた。

『全弾発射!!?』

メタルナイトの放つたミサイルは、高性能なシステムにより全てが外れることなく命中する。

凄まじい爆発が起き、戦艦の外装が所々破損するが、飛び散った破片は自ら意思を持つように動き、元の形に復元されていった。

『自己修復能力マデアルノカ?! マスマス解析シテ技術ヲ手ニ入レタイモノダ』

敵の技術に感嘆の声をあげるメタルナイトだが、実際は彼の望むような未知の技術の塊であるわけではない。

そうとは知らないメタルナイトが、再び始まつた砲撃を躊躇していた時だつた。

『ム? 何ダ、アレハ』

彼の機体のセンサーが、空中に発生した穴から飛び出す奇妙な形状の列車を捉えた。

まるで悲鳴のような甲高い金属音をあげ、緑色の牛の顔を持つ列車・ゼロライナーが真っ逆さまに落下していく。

しかし地面に接触する前に車体が浮き上がり、なんとか墜落することなく地面を勢いよく滑つていつた。

「くっ…！　おい、大丈夫か!?？」

神業のような回避をやつてのけたユウトは、操縦席から他の面々の無事を確かめる。すると、後ろの車両からうめき声のような返事が返ってきた。

「ええ…何とかね」

「クソツ…あの男め！」

「ウツプ…気持ち悪つ…」

「……」

モモタロスやジエノスは憤慨し、フブキやハナは頭を振り、サイタマは非常に青い顔で気持ち悪そうにそれぞれ声をあげる。キングのみが、白目をむいて返事をできずにいた。

すぐさまヒーローたちはゼロライナーから降り、外に広がっている景色に眉を寄せた。

「ここは……元の時代か？」

「あの野郎…ミライを手に入れるために合流した後を狙つてきやがったな」

モモタロスは拳をブルブルと握りしめ、自分たちがまんまと罠にはめられたことに怒りを募らせる。

まだ敵の手に落ちていないことが救いだが、このまま今場所にとどまつていればいざ

れ追つ手がくるのは明白だつた。

「どうにか墜落はまぬがれたけど、ゼロライナーがこれじゃ……」

「何がなんでも修理して復帰させるぞ。デネブ、手伝え」

「あ、ああ！ わかつた！」

横倒しになつているゼロライナーに駆け寄り、まずは縦に起^レこううと必死に力を込めるユウトとデネブ。

ハナも力を込めるが、重すぎてうまく動かせないことに苛立ちながら、動く気配のないヒーローたちを睨みつけた。

「ちよつと！ あんた達も手伝いなさいよ！」

思わず声を荒げさせたハナは、不意に自分の手にかかるていた重力が軽くなるのを感じた。

サイタマが軽いひと押しで、転覆していたゼロライナーを起こしてみせたからだ。

「これでいいのか？」

「……せめてもう少し丁寧にやりなさいよ」

「注文の多いやつだな」

言われた通りに手伝つたのに、なぜ文句を言わねばならないのか。そんな不満が彼の顔にはありありと表れていた。

だがそんなサイタマの表情は、視線を横にずらした瞬間に苦虫を噛み潰したような険しいものに変化していた。

「うつわ……なんかすげえことになってるぞ」

サイタマのつぶやきに、ジエノスたちも彼の見ていた方向に目を向けて言葉を失う。A市があつた場所は、今や凄惨な地獄のような世界に変貌していた。無数の怪人、巨大な戦艦、破壊された街、どれを見ても絶望的としか思えない光景が広がっていたのだ。

「あれは……!?..?..」

「あの異形は……間違いない。以前俺も遭遇したことがある怪人達です」

「マジで？」

人の顔も苦手なサイタマは、自分が倒した怪人のことさえよく覚えていない。

しかも彼が関わった怪人以外にも見覚えのある個体もいるようで、ジエノスやフブキは大きく目を見開いて立ち尽くしていた。

「おそらくあれもガオウの仕業だ……理屈はわからんが、過去の敵を“再生”しているようだな」

「困ったなあ……こんな大事になる前に解決したかつたのに！　このままじや時の運行がめちゃくちゃになっちゃうよ！」

険しい表情でユウトが呟くと、デネブが隣で頭を抱えて天を仰ぐ。

これほどまで破壊された時間を、果たしてどれほど修復することができるのか、想像することも難しい。

そんな時に、サイタマはふとこの場にいない少女のことを思い出した。

「…つーか、ミライはどこ行つたんだ？」

無数の瓦礫が転がる、崩壊した街並の中を少女はたつた一人で歩く。

激しい頭痛に苦しめられながら、それでも決して足を止めてはならないと自分の肉体に叱咤し、前へ進み続ける。

「うつ……くつ！」

覚束ない足取りは体を引きずつていてるようで、見ているだけで痛々しさが募るもの。

苦痛に歪むミライの表情が、その痛ましさに拍車をかけていた。

それでも少女は、グラグラと歪む視界を見つめ、歩き続けていた。

「早く……もつと、遠くへ……！」

目覚めたときから自分を守ってくれていた、ハナという記憶にない少女達の元からも離れ、人気のない場所へ急ぐ。正気の沙汰とは思えない行動だったが、ミライの目はひたすらに前しか見ていない。

しかしやはり、崩れた街の中をたつた一人でゆくのは目立ちすぎた。

「おじょーちゃん、なにしてんのぉ~?」

「ぎやははははは!!?」

「ヒイツ……！」

突如瓦礫の陰から現れた、複数の怪人達。下卑た笑い声を上げて取り囲まれ、ミライは足をもつれさせるとそのまま転倒してしまった。

しかしミライは唇を噛んで恐怖を押し殺すと、何度も転びそうになりながらその場から急いで走り出した。

「逃げるなよお~！　おじさんとちょっとだけでいいから遊ぼうぜえ！」

「そうちら鬼ごつこだ鬼ごつこ!!?」

怪人達は少女の必死の努力をあざ笑うように、わざとゆっくりと後を追いかけ始める。

伸ばせば簡単に手が届く距離を保ち、弱者をいたぶる醜い精神が現れた顔で、怪人達は哀れな少女を追いかけ回した。

「あうっ!!?」

そしてついに、ミライの足が限界を迎える力が抜けてしまう。

起き上がるよりもがくものの、頭痛や吐き気に苦しむいまの彼女には余裕はなく、貼つて進むことすらできなくなっていた。

「ひやつひやつひやつひやつひやつひや!!? つゝかゝまゝえ……」

次はどうやつて甚振つて遊ぼうか、そんなことを考えながら手を伸ばした怪人は、次の瞬間強烈な衝撃を受けて吹き飛ばされる。

突如隣から消え失せた同胞に目を瞬かせた他の怪人達も、一瞬のうちに食らった激流のような一撃により、一瞬で物言わぬ肉塊と化していくつた。

「……やれやれ。最近の怪人は礼儀もなつとらんのぉ」

ピツ、と手についた鮮血を払い、億劫そうに構えを解いた老人が独りごちる。

あたりに転がつた怪人達の骸に背を向けると、S級ヒーロー・シルバーファングは荒い呼吸でしりもちをつくミライに心配そうな声をかけた。

「お嬢ちゃん、大丈夫か? こんなところをうろついてないで、さつさとシエルターに避難しなさい」

逃げ遅れた一般市民と思つたのか、怪人を相手にしたときは真逆の優しさに満ちた声で手を差し出す。

ミライはじつと目の前の手を見つめていたが、やがて視線を逸らし、その手を横に押しのけた。

「…………だめ」

「ん?」

「私が逃げたら……あいつらは追つてくる。私を狙つて……来ちやう……そしたら……みんなヒドイ目に遭つちやう……」

そう答え、ミライはガクガクと震える体を無理やり立たせ、シルバーファングに背を向けて歩き出そうとする。

慌ててシルバーファングが止めようと手を伸ばすが、ミライはそれを拒むように急ぎ足で歩を進め続けた。

「もつと……もつと遠くに逃げなくちや……」

シルバーファングは思わず、大きく目を見開いてミライを凝視する。

恐怖心で怪人から逃げていたのかと思っていたが、彼女はむしろそれを押し殺して、怪人を引きつける囮になろうとしていたというのか。

こんなにも弱々しい姿なのに、なんという決意であろうか、と。

（この娘は……一体何を背負つておるのだ？　ただの正義感ではない：追い立てられるような責任感で動いておる。あの怪人の軍勢がこんな子供を狙うなど到底思えんが：）必死に戦おうとしている少女を止められず、その場で立ち尽くして考え込んでしまうシルバーファング。

そこへまた、新たな怪人がミライを見つけ、甲高い声で笑いながら迫ってきた。

「キヒハハハハ!!？」獲物みーつけ——」

一撃で叩き潰してやろうと、大きく腕を振り上げて飛びかかった怪人は、先ほどの怪人達と同じように刹那の技で狩られる。

残骸を適当にばらまいたシルバーファングは少し考えると、困り顔でミライのそばに歩み寄つていった。

「お嬢ちゃん……そういうのは美德とは言わん。実際は自己犠牲なんぞ誰も喜ばんぞ。
…喜ぶアホもおるけどの」

自分よりも他人を優先する、臆病で勇敢な少女をどうにか思いとどまらせようと、シリバーファングは隣を歩きながら説得を試みる。

しかしミライは、歯を食いしばつて歩き続けるだけで、シリバーファングに応えようともしなかつた。

「仕方がないのう。じゃあしばらくわしがそばにいてやろう。その方が安心じゃ」

本当なら、無理にでも引きずつて連れて行くのがベストなのだろうが、どうにもそうする気にはなれない。

稀に見る頑固者に呆れていた時、後ろからバタバタと駆け寄つてくる足音が聞こえてきた。

「お！　じーさん来てたのか！」

「んん？　サイタマくんか？」

底知れぬ実力を感じ取り、自分の流派を教えられないか勧誘し、親交ができた若いヒーローの登場に、シルバーファングは純粹に驚きの声を上げる。

サイタマも思わぬ相手との遭遇に、少しだけ意外そうに目を見開いていた。

「家に向かつても誰もおらんかつたからどうしたのかと思つとつたんじゃが、そつちはそつちで急ぎのようだつたらしいの」

「ああ…うちに来てたのか」

「しかし長年生きとるが、ここまで派手にやられたのは流石に初めてじやのう。ヒーロー協会も対応が間に合つておらんでてんやわんやらしいわ」

そう言うシルバーファングが見つめる先には、街を破壊し蹂躪の限りを尽くす怪人の軍勢と、逃げ惑う人々の悲鳴が聞こえる地獄がある場所。

普段は穏やかな彼の目が、研ぎ澄まされた刃のような鋭い光を帯び始めていた。

「……ちつとばかり、本気を出さねばならんか」

低い、他のだれかに届かないような小さな声でシルバーファングが呟いた時、彼は横を通り過ぎる影に気づいた。

サイタマはスタスタと早足で歩くと、フラフランとよろめいていたミライを捕まえ、強引に抱き上げるとシルバーファングの方に戻ってきた。

「じーさん、こいつ頼むわ」

買い物の途中で荷物を頼むかのような気軽さで、サイタマはシルバーファングにミライを託す。

シルバーファングは訝しげに片眉を上げるが、すぐに応じて見た目よりもずっと軽い優げな少女を受け取つた。

「？ 別に構わんが…どこへ行く気じや？」

「ヒーローのやることなんて決まつてんだろ」

尋ねてきたシルバーファングに、新人ヒーローサイタマはなんてことはないと言うふうに答え、彼らに背を向ける。

敵がどんな能力を持つていようが、説明されてもわからないヘンテコな現象が起つていようが、彼に一切興味はないし理解する気もない。

「人助けだ」

一人の少女が気合と覚悟を見せつけられたのだから、それに報いることができるくらい。

己がヒーローであり続けるために、正義を執行するだけだ。

十四撃目 理不尽の権化

ヒーローと不死の怪人達の戦いは、苛烈を極めていた。

しかし拮抗していた戦況も、次第にヒーロー側が押されはじめ崩されていく。無限に湧き出る敵を前に、ヒーロー達の体力も徐々に落ち始めていたのだ。

「ダメだ、やっぱC級やB級じや相手にならねえよ!!?」

「撤退しろ撤退!」

「誰かA級かS級呼んでこい!!?」

い。

C級に所属するヒーローのほとんどが、一般人に毛が生えたレベルの戦闘能力しかな

B級以上の実力者達は本当に全体の一握りしかなく、そんな彼らも迫り来る怪人達にはまともに太刀打ちできない。より強いものに助けを求めることがしかできなかつた。

「ヒヤハハハハ!!? だらしがねえなあヒーローってのは!!?」

「尻尾巻いて逃げて情けねえぞ!!?」

「あいつらっ!!?」

「待て、いくな! 奴らの思うつぼだぞ!!?」

勇ましく名乗りながら、命からがら逃げ出していくヒーロー達を、怪人達はここぞとばかりに嘲笑する。

悔しさに歯を食いしばり、激昂しそうになるのを必死に押さえつけ、恥を噛み締めながら、ヒーローは怪人達に背を向ける。

「ギヒヤヒヤヒヤヒヤ……あ？」

馬鹿にするように、逃げ去つていくヒーロー達を追いかけていた怪人達は、ふと感じた違和感に訝しげな声を上げる。

すると次の瞬間、あたりを闊歩していた怪人達がまとめて宙に浮かび、米を握るかのようにひとまとめに圧縮され、小さく潰されてしまった。

「あんた達、こんなザコ相手にどんだけ手間取つてるわけ？」

緑色の光を纏い、片手を握りしめていたその人物は、苛立たしげに厳しい声で告げる。

逃げ惑っていたB・C級ヒーロー達は、突然起きた現象に目を疑うと、自分たちを見下すように空中に佇んでいる小柄な女性を凝視した。

「邪魔だからどつか消えててくれない？」

癖の強い緑の髪を持つ、一見少女にしか見えない体つきに、氷のような鋭い眼差しを持つ彼女の名はタツマキ（28）。

S級ヒーローの中でも最強の一角を担う、この世で知らぬ者のいないとてつもない超

能力者だつた。

「せ……戦慄のタツマキ……」

「フンッ……ほんつと役立たずなんだから」

タツマキは見た目に似合わぬ辛辣な言葉を吐き、慌てるばかりであつたヒーロー達を呆れたように見下す。

自身と同等、もしくはそれに準ずる実力者以外を認めない彼女は、力のない者が戦場に出ることを極端に嫌う。優しさのかけらもない孤高の女性だつた。

「……ん？」

そんなタツマキの視線がふと、先ほどまで怪人達がいた方へ向けられ訝しげに細められる。

サイコキネシスで原型をとどめないほどに押しつぶしてやつたはずなのに、怪人達は激昂した様子でタツマキを睨みあげていた。

「このっ……クソガキがあああ！！？」

「ぶつ殺してバラバラにしちまえ！！？」

一方的なやられ方が気に入らなかつたらしく、屈辱を倍にして返そようと怪人達があちこちから集まつてくる。

流石のタツマキも氣味が悪そうに眉間にしわを寄せ、納得の唸り声をあげた。

「……ああ、そういうこと。これは確かにあんた達じや相手するのは無理ね」

「そ…そ…うなんだ！ 倒しても倒しても敵が復活する！ 対処法が見つからない限り手も足も出せなく……」

真下にいるヒーローの一人が、せめて情報を渡そうとタツマキを見上げて声を張り上げる。

しかしタツマキはギロリと彼を睨み付けると、鬱陶しさと苛立ちが混じった恐ろしく低い声で告げた。

「言つたわよね？ 邪魔だからどいててって」

タツマキは「フンッ」と鼻を鳴らすと、怪人達に人差し指を向けて軽く力を込める。

途端に怪人達のうちの何体かが空中に浮かび上がり、ベキバキボキと勝手にひしやげて肉塊にされていく。だがすぐにその姿は消失し、元の状態で物陰から現れるのだった。

「……ほんっとうつとうしいわね、アレ」

倒しても倒しても片付かない敵に、タツマキのイライラは否応がなく募っていく。

すると次の瞬間、タツマキの全身をより濃い緑の光が包み、それは強烈な衝撃波となつて怪人たちをまとめて薙ぎ払つて行つた。

「……行こうか」

「おお…」

どう見ても手を貸す必要はないし求められてもいない。むしろ加勢すればこちらの命はない。

あまりに圧倒的すぎる力を前にし、B級以下のヒーロー達は妙に達観した顔で、すぐさまとその場を後にしていくのだつた。

しかし弱者達が姿を消す中、タツマキは険しい表情で空中に留まつていた。
自分が負ける要素など微塵もない。しかしこの自体を収集できる未来も、今の所全く見えてこなかつたからだ。

「なんていうのかしら…穴の空いた桶で水を掬つてる感じね。いい加減飽きてきたし…そうだわ。こうしてあげる」

考え込んでいたタツマキの目が危険な光を宿し、ニヤリと意地の悪い笑みが浮かべられる。

くいっと彼女が片手を動かすと、怪人達とともに周囲の瓦礫も浮かび、ゆっくりと動き始める。それらはぐるぐると円運動を始め、空中の一点を中心とした球状の嵐へ変化していくつた。

「殺しても殺しても死なないんなら、殺し続ければいいってわけよね」

タツマキの作り出した嵐の中で、怪人達は互いや瓦礫と激突しあつという間にボロボ

口にされていく。

予想通り一度死んでも復活していたが、すぐにまた念力の檻の中に閉じ込められ、またしても攻撃を受け続ける羽目になる。あまりに恐ろしい刑罰に、怪人達の悲鳴が嵐の中でいくつもこだましていた。

「ぎやあああああ!!?」

「そこで永遠に死に続けなさい」

根本的な解決はしていないが、それでも怪人達を一方的に攻撃できてご満悦になるタツマキ。

その時、彼女の背後から突如青白い鬼火のようなものが襲いかかり、咄嗟に躲した彼女の肌を焼きかけた。

「…! どこのどいつよ! 生意気に不意打ちかましてきたザコは!?」

せつかくいい気分に浸っていたところを邪魔され、怒りをあらわにするタツマキ。

そんな彼女の目に入ったのは、何もないビルの屋上の影から滲み出るよう現れた、奇妙な格好の男だつた。

「…お前も、俺の願いの邪魔をするのか」

「はあ?」

毛皮のついた小汚い着物という、時代がずれたような格好をしている美丈夫が、空中

に佇むタツマキを忌々しげに見上げている。

意味のわからないことを耳にし、馬鹿にするような視線を返すタツマキの前で、美丈夫は懐から一本の鞭を取り出し、振り回し始めた。

「あの男は言つた……この時間を破壊すると。それを成し遂げた暁には、俺の過去も破壊すると」

宙を裂く鞭は美丈夫の腰に巻きつくと、一瞬にして金属製のベルトに変化する。

異様な気配を放つそれに触ると、美丈夫はさらに取り出したパスケースのようなものを持つて、ベルトの前にかざした。

「俺は忌々しいあの時間を破壊し……ソラを取り戻す。それを邪魔するというのなら、何者であろうと潰して進む……変身」

（ハイジャックフォーム）

低い男の声が響いた直後、ベルトから無数の暗い光の破片がばらまかれる。それらは一旦空中にとどまり、次の瞬間には美丈夫の全身にまとわりつき、一着の黒い着物を作り出す。

さらに美丈夫の周囲に鬼火をまとつた金属の塊が浮遊し、怪物の牙を模した鎧となつて美丈夫の体に張り付く。

最後に顔を骸骨に似た仮面が覆い、赤い線路のようなマフラーがたなびいた。

〈Full charge〉

「ぬうああああああ!!?」

幽汽と呼ばれる、死者の戦士へと変貌した美丈夫が、雄叫びとともに機械的な斧剣を振りかざす。

すると幽汽の体から溢れ出た鬼火が刀身に宿り、タツマキに向かつて一気に放たれた。

ターミネイトフラッシュ!!?

凄まじい炎が天空をも焼き、タツマキの小さな体をも呑み込もうと勢いよく迫る。

とつさに念力で防ごうとしたタツマキだつたが、向かつてくる鬼火はその勢いを落とすことなく、タツマキに襲いかかった。

「くっ……」

一瞬目を見開いたタツマキは、即座に防御ではなく回避に移り、鬼火の届かない上空へと飛翔する。

かろうじて衣服の端が焦げるだけで済んだタツマキは、真下で見上げてくる幽汽に鋭い目を受けた。

「…へえ？ なかなか骨があるやつがいるじゃない」

言葉こそ愉しげだが、雑魚と思っていた相手に不覚を取られた彼女の目に宿る怒り

の感情は、凄まじい迫力を伴っていた。

「あーくそ……あいつらのせいで随分遅れて到着しちまつたぜ」「相も変わらず憎らしい奴らだつたな、弟よ……」

広い自動車道を、金と銀の二体の鬼を先頭に怪人達の軍勢が闊歩する。

その姿はまるで戦に赴く異形の軍隊であり、相対する戦士達から歯向かう気力を容赦なく奪い去つていた。

「ほんじや、思いつきり暴れて取り戻そうかね！」

鬼の一体、ゴルドラが錫杖を掲げると、後ろに続く怪人達が咆哮を上げる。

彼らが向かおうとしている先にあるのは、逃げたヒーロー達と一般市民が避難しているシエルターがある方向だった。

「オラア!!? いけ、野郎ども!!?」

「目につく全部をぶつ壊せ!!?」

「うおおおおおおおお!!?」

出遅れた苛立ちをぶつけるように、シルバラが地面を金棒で思いつきり叩いて粉碎する。アスファルトが粉々に粉碎され、その上を恐ろしい外見の怪人達が一斉に駆け抜けた行つた。

鬼の兄弟がニヤリと下卑た笑みを浮かべた時、先に突撃していた怪人達が突然吹き飛ばされ、あちこちで爆発四散し始めた。

「アア!!?」

いきなりの事態に、ゴルドラとシルバラは各々の武器を構えて眉間にしわを寄せる。おののき始める怪人達の前に、その男は音もなく降り立つた。

「……騒がしいと思えば、こんなところにもいたのか」

長い白金の髪をなびかせ、研ぎ澄まされた剣を持つた美貌の剣士が、群れる怪人達を見据えて呟く。

すでに何体も仕留めようとして、謎の現象により邪魔されてきたが、それでも彼のやるべきことは一切変わらなかつた。

「閃光のフラツシユ、正義を執行する」

「へッ…やつてみやがれ、優男が!!?」

構えを取るフラツシユの宣告に、シルバラが小馬鹿にするように笑い、金棒を突きつけて吠える。

宣言通りフラツシユは文字通り閃光のごとき速度で駆け抜け、シルバラに刃を食らいつかせた。

だが、それは甲高い音とともに弾かれ、虚しく火花のみを舞い散らせるだけだつた。

「……！」

「へっ、斬ったと思ったか？ 残念…痛くも痒くもねえよ」
目を見開くフラツシユにシルバラが金棒を振り下ろすが、フラツシユはすぐさま回避し距離を取る。

そしてまた猛スピードで疾走し、今度はゴルドラとシルバラ両方に向けて、目にも留まらぬ連続攻撃を繰り出し始めた。

「おおお！ 速えはええ!!？ ハエみたいにはええな!!？」

「クチヒコよ、洒落が効いているな!!？」

どれほど刃を走らせてても、どれほど急所を狙つても、フラツシユは鬼達の鎧を抜くことはできずにいた。

やがてフラツシユは一旦大きく後退し、やや険しい表情で鬼達を鋭く睨みつけた。

「……これほどまでの防御力……刃を通すのも難しいか」

初めて口にした弱気な言葉。S級の中でも上位に君臨する彼には似合わない泣き言が紡がれるが、フラツシユの表情に悲観の色は見られない。

むしろその瞳は、先ほどよりも鋭く濃い決意を宿したものに変化している。

「少し、本気を出すとするか」

今の彼の中に生まれたのは、久しく味わつていなかつた緊張感を堪能したいという、

挑戦者の気概だつた。

灰色のコートを着た、生者には見えない肌色の男が放つ銃弾が、一発もうち漏らされることなく標的に食らいつく。

しかし放たれた銃弾は硬い装甲によつて防がれ、火花を散らしながら無残に歪んで地面に転がるばかりだつた。

「チツ……！ これだけ撃つてかすり傷ひとつつかんとはな……！」

不死のヒーロー・ゾンビマンは苦々しく呟き、道のど真ん中を堂々と歩いて来る機械的な格好の怪人を前に舌打ちする。

一見パトカーに似た特徴を持つ鎧をまとつたその怪人は、両の目を怪しく光らせゾンビマンに銃口を突きつけた。

「完全なる時の運行の管理のため……人類の排除を完遂する」

物騒なことを言い、怪人はどこか機械的な動きで引き金を引く。

反射的にゾンビマンが飛びのくと、一瞬前まで彼がいた場所を無数の光弾が貫き、着弾した途端に激しく爆発した。

「チツ……！」

いくら不死身といえど、あの攻撃で四肢を欠損すれば復活には相当時間を食われるこ

とになる。瓦礫をうまく盾にしながら、怪人への有効打を考えねばならないだろう。ゾンビマンがいつでも動けるように身構えていると、怪人の前に割つて入るように、突如黒い光沢のある人影が降り立つた。

「……駆動騎士」

「下がつていろ、ゾンビマン。お前ではあの怪人の相手は相性が悪い」

黒い直方体の機材を備えた機械の戦士は、どこか自身と似た雰囲気のある怪人を見据え、赤い一つ目をひときわ光らせる。

そして次の瞬間、二体の機械の戦士はとてつもない衝撃と爆音を生み出しながら、激突するのだった。

*

街全体を見渡せる、ヒーロー協会の本部の屋上で一人、ガオウは盃に注いだ酒をかづくらう。

耳を済ませれば心地のいい悲鳴と破壊音が聞こえてきて、着々と野望の実現の時が近づいていることに笑みが浮かぶ。

「おーおー、がんばれがんばれ」

それに抗おうと必死に戦う者の声も聞こえるが、それは徐々に一つずつ消えていく。あの軍團に勝てる可能性など最初からなかつたのだ。

上機嫌に盃を傾けていたガオウだが、ふとその笑みが消える。

彼の耳に、近づいてくる何者かの足音が届いたからだ。

「……なんだ、テメエは」

胡乱げに、そして愉悦の邪魔をされて苛立たしげに表情を歪め、ガオウは足音の主の方へ目を向ける。

鋭く貫くような視線に対し、その男は純白のマントを翻し、気だるげに答えてみせた。

「最初は趣味で、今はプロヒーローをやっている者だ」

十五撃目 最強ＶＳ最凶

「ヒーローだあ…？」

自分の視界に現れたハゲ頭の男をにらみ、ガオウは苛立たしげにつぶやく。ぽけ一つとした表情で腕を組む、白いマントを翻すサイタマを無遠慮に観察すると、やがてガオウは嘲笑を浮かべた。

「ハツ……つまらねえな。てめえも下にいるやつらと同じか」

無表情のまま突っ立っているサイタマにそう吐き捨て、ガオウは億劫そうに立ち上がり、ぼきぼきと首を鳴らす。

居場所を突き止められた焦りなどは、一切感じられない。

「他人を助けて何の益があるんだ？ この世は弱肉強食……そこのらの雑魚怪人にやられるようなやつは、最初から生きてる価値もねえ」

聞こえてくる悲鳴と怒号、それは怪人たちに狙われている者があげるものばかりではない。

自分が先に助かろうとする者、他者に蹴り出される者、理不尽に怒りをぶつける者。ヒーローたちが救う中には、そんな腐った性根の人間たちも混ざっていた。

「てめえらみたいなクソみたいな正義感をひけらかす偽善者を見てるとなあ、虫唾が走るんだよ！ 弱い奴を助けて感謝されて、ちっぽけな自尊心を満足させていい気になつてるような奴らを見るとよお !!？」

聞いているのかもわからない、氣の抜けた顔で佇んでいるサイタマに向か、ガオウは自身の胸の内で渦巻く苛立ちを叩きつける。

それはまさに、身勝手でくだらない人間にに対する嫌悪に満ちた、真っ黒い感情だつた。
 「見ろよ、この世界を……下にいる弱者どもをよ！ バカみてえにヒーローに助けて助けてつてすがりついて、そのくせ役に立たなきや見下しやがる！ どいつもこいつも胸糞悪いクズじやねえか !!？」

ガオウは自身の目に、彼を破壊者たらしめた憎悪と憤怒を宿らせ、それを発散させるよう喚き散らしていた。

正しいとは決して言えない。しかしあたりの光景を見て、少なからず同意させられてしまふだけの怒りが表されていた。

「見ていて本当に腹が立つ……！ だから消してやるんだよ。あのガキの残りの記憶もぶん取つて、人間の歴史そのものを全部ブツ壊してやるんだよ !!？」

「うんわかつたわかつた。忙しいからさつさとかかつてこい」
 しかしその怒りは、この男にはなんの影響ももたらさない。

ヒートアップしていたガオウが、サイタマの面倒臭そうな声で唐突に止まる。ぎょろりと殺意のこもった目で睨みつけ、頬をヒクヒクと痙攣させた。

「…てめえ、誰を相手にしてんのかわかつてんだろうな？」

「ぎやーぎやーうるせえな。いいからかかってこいつて言つてんだろ。天氣無茶苦茶悪くなつてきたし」

「……ああ、ダメだわ」

がくりと肩を落とし、ガオウは氣だるげに天を仰ぐ。別に理解されたかつたわけではない。ただ単に自身の怒りを適当な相手にぶつけ、八つ当たりしたかつただけだつた。

しかしこの男には、ガオウの怒りなど微塵も興味がない。ガオウを脅威とさえ認識していくない。

それがどうしようもなく、腹が立つた。

「お前は、俺が今すぐに食い殺す」

ガオウは懐から一本の金色のベルトを取り出し、勢いよく振り回して自身の腰に巻く。

爬虫類の牙のような意匠のついたそれについたボタンを押し、ガオウは片手で持つたパスのようなものを掲げた。

「…変身」

〈G a—O form〉

ガオウがパスをベルトにかざし、直後に無数の光のかけらが舞い散る。光は一旦ガオウの周囲を浮遊し、一斉に集まつて一着のライダースーツのような戦闘服を生み出す。さらにいくつものパートが出現し、牙を模した黄金色の鎧となつてガオウに纏われる。

最後に顔に金属のワニの顔が装着され、変形して一つの仮面へと形を変えた。

「うお、すげ」

子供の頃、テレビの向こうでよく見ていたような派手な演出に、サイタマは思わず感嘆の声を上げる。

対する、戦士の姿へ変わつた牙王^{ガオウ}はベルトの両側に掲げられた黒い部品を取り、組み合わせて一振りのノコギリのような剣に変える。

「テメエは選択を間違えた……俺がこの姿になる前にさつさと逃げるべきだつた。今更後悔しても遅いぜ……！」

「知るか」

異様な質量の殺気がサイタマに襲いかかるが、彼はそれを物ともせず、散歩にでも行くような軽い調子で一步踏み出す。

そして一瞬にして牙王の目前にまで接近し、固く握り締めた拳を振りかぶつた。

「とりあえず、さつき撃ち落とされて気持ち悪くなつた分だ」

仁王立ちしたまま、動く様子のない牙王の顔面に、文字通り一撃必殺の威力を誇る拳がありえない速度で迫る。

またただの一発で終わつてしまつた、そう直感したサイタマだつたが、次の瞬間彼の視界は大きくブレた。

「……!?」

サイタマは大きく目を見開き、バランスを崩して倒れていく自分自身に困惑する。

視線を向ければ彼の目の前には、自分と同じく拳を振り抜いた牙王の姿があり、後ずさるサイタマを嘲笑し見下ろしているのが見えた。

「何かしたか？　お前」

サイタマは即座に踏ん張り、バランスを取り戻すと自分の手をグツパツと何度も握つて感覚を確かめる。

そして戸惑いの顔のまま、またも無防備に佇んでいる牙王に向けて、先ほどよりも力を込めたストレートを放つた。

ちよつとマジなパンチ!!?

大気を破裂させるような音とともに、数多の怪人たちを仕留めてきた拳が振るわれる。

しかし決まったと確信した直後、サイタマの顔面にとてつもない衝撃が走り、またしても後ずさり後退する羽目になる。

「？ 今おれ、あいつのこと殴ったよな？」

別に痛くはないし何も問題はない。

しかしいつも通りの作業の一環だつたはずだつたのに、一向に自分の攻撃が通らない理由がわからず混乱する。

半ばムキになつてもう一度突撃すると、舌打ちした牙王がそれよりも早く拳を繰り出してきた。

「鬱陶しいんだよ!!？」

凄まじい轟音が鳴り響き、サイタマの体を吹っ飛ばす。危うくビルの屋上から落下しそうになり、サイタマはますます不思議そうに眉間にしわを寄せた。

「何呆けてんだ…？」 一方的に殴られんのは初めてみてえだな

何が何だか分かつてないサイタマに、牙王はゆっくりと追い詰めるように近づいてくる。

トントンと剣で肩を叩き、見下した態度を隠すことのない余裕の態度を見せ、牙王は仮面の下でニヤリと笑みを浮かべた。
「やつとわかつたぜ……てめえがサイタマとかいうヒーローか。どんな怪人でも一撃で

倒す……だがインチキだなんだと人間どもから見下されてるつてなあ』

〈F u l l c h a r g e〉

ベルトにもう一度バスをかざし、牙王が剣を掲げる。

鋭く並んだ牙のような刃にエネルギーを蓄積せながら、牙王はぼーっと突つ立つたままのサイタマに一気に接近して行つた。

「確かにテメエは強え……だがその拳は俺にはどかねえ。テメエがどれだけ向かつてこようど、何の意味も持たねえんだよ」

タイラントクラッシユ!!?

剣に宿つたエネルギーが爆発するように、強烈な斬撃となつてサイタマに襲いかかる。

巨大なワニが食らいつくような光が炸裂し、常人男性程度の体重しかないサイタマを軽々と吹き飛ばし、ビルの中に激突させた。

「……必殺マジシリーズ」

窓ガラスを、コンクリートの壁を数枚破壊しながらようやく停止したサイタマは、すぐ起き上がって床に両手をつく。

片足を後ろに引いて身を伏せさせると、牙王のいる方向を見据えてグツと全身に力を込めた。

マジダツシユ!!?

直後、ドンッ!!?と大気が震え、砲弾のような勢いで飛び出したサイタマが宙を舞う。身体能力を全開にしたサイタマが、全力ダツシユの勢いのまま牙王の顔面に拳を突き立てようとする。

「意味ねえんだっての」

だがそれも虚しく空を切り、反対にカウンターを食らつて反対方向に吹き飛ばされてしまう。

いくつものビルを貫き、破壊しながら視界から消えていくサイタマを見下ろしながら、牙王は心地良さそうな笑い声をあげるのだつた。

「ガハハハハハハハ!!?」

弾丸のように天を貫き、ビルの方へ飛ばされていくハゲ頭のヒーローを目の当たりにし、その真下にいたヒーローたちは思わず目を瞠つていた。

「なつ…先生!!?」

ジエノスは自分が師と仰ぐ男が一方的にやられ続けているという光景に驚愕を隠しきれず、目を見開いて立ち尽くす。

それはサイタマの尋常ではない強さを知っているフブキやキング、シリバーファング

にとつても信じがたいものだつた。

「まさか…今吹き飛ばされたのはサイタマ君か!!?」

夢ではないか、とシルバーファングは確かめるように口にするが、それで事実が変わ
るわけではない。

現に見覚えのある格好のヒーローが激突し、目の前で高層ビルがガラガラと崩壊して
いるのだから。

（バカな…!!? 先生の一撃は今確かに決まつていたはずだ!!? なのに殴られたのは
先生の方…何がどうなつてある!!?）

（S級ほどじやないにせよ、あいつの一撃は強力なもののはず！ 私の目にも終わつた
と感じられたのに、どうして…!!?）

（……逃げよ）

誰の目にも、サイタマと牙王の戦いの不自然さは目立つていたらしい。白目を剥くキ
ングにも、想定外の自体であることは理解できていた。

理屈は不明だが、何かしらの異常な現象が起きているのは間違いないと、全員が直感
していた。

「何じや、あの妙な鎧の男は…!!? あのサイタマくんをああも手玉にとるなど…
「…奴こそが、今起きて いる異常事態の黒幕だ。シルバーファング」

「なんと……」

ジエノスの言葉に、シルバーファングはさらに驚愕で目を見開く。

改めて牙王の方を見やると、しぶとく飛び出してきたサイタマの攻撃を受けるよりも前に、牙王が剣でカウンターを食らわせているのが見え、シルバーファングの表情が陥しくなった。

「見る限り……あれは単に相手が強いのではないの。破壊力も速度も十分すぎるほどじやというのに、蜃気楼でも殴っているかのように無効化されておる」

当たればほぼ確実に怪人を倒せる最強の一撃。余波で山をも吹き飛ばせる異常な威力と速度を誇るそれが、いまだに決まっていない。

幾度もサイタマの戦いぶりを見てきた一部のヒーローたちにとつて、それは明らかに違和感だつた。

「アレを倒すのは……並大抵のヒーローにはおそらく不可能じやな。わしを含めて」

細めた目で牙王を睨みつけたシルバーファングがそう結論づけると、あたりはしんと静まりかえる。

地球の危機を、幾度もその拳のたつた一撃を持つて粉碎してきた最強の男。彼は倒せ

ない相手を、一体どうやつて討てばいいと言うのか。

そこはかとない絶望が漂い始めたときだつた。

「ちくしょう…！ やっぱ見てるだけとか性にあわねえ！」

ミライのそばであぐらをかいていたモモタロスが、肩を怒らせながら立ち上がる。

先ほどから、サイタマの戦いを見ている間に何度も貧乏ゆすりをしたり、唸つたりしていたが、とうとう我慢の限界に達したらしい。

「ちよつ、ちよつと先輩！ ダメだつて！」

「離せ亀！ あのムカつく野郎の顔面へこませてやるんだよ!!？」

「あの兄ちゃんにもでけへんのにモモの字にできるわけないやろ！」

「モモタロスのおバカ！」

「うるせえ、熊に小僧!!？」

「落ち着きなさいよバカモモ！」

牙王の方へ飛び出そうとするモモタロスを、他のイマジンたちとハナが必死に押さえつける。

彼らも倒し方のわからない敵を前にどうしたらいいのかわからなかつたが、迂闊に動くべきではないという冷静さは辛うじて残つていた。

(絶対に倒せない敵とか無理ゲー…つていうかクソゲーだな)

ギャーギャーと騒がしいモモタロスたちに背を向け、さていつ姿を隠そうかと考え込むキングがふと思う。

生糞のゲームーである彼にとつて、ここまで理不尽なボス戦は正直手を出す氣にもなれない代物であつた。

(…ああ、こんなことなら今日サイタマ氏の家に行かなきやよかつた。せつかく過去に行ける電車があるんだから、今日の出来事なかつたことにしたい…)

友達の家に行くか行かないか。その選択で自身の命運が決まるなどどれだけ理不尽なのか。

こんな些細なことで人生がゲームオーバーになるシナリオなどそうそうなかつたが、それでも過去の選択を悔やまずにはいられなかつた。

「……ん？」

過去の自分を思いつきり殴りつけ、現在の自分も手を痛める妄想をしていたкиングは、あることに思い至る。

自分の思い浮かべたフレーズが、何か妙に引っかかった気がしたのだ。
無かつたことにする？

その言葉に気付いたとき、киングの頭の中でカチリと動いた気がした。

そのたつた一言が、硬い金属の箱の鍵をたやすく開けたような、難題を解き明かしてしまつたような、そんな感覚だつた。

「……え、アレ？ そういうことなの？」

思わず口に出してしまったキングに、サイタマの戦いに集中していたジエノスたちや、騒いでいるモモタロスたちが一斉に視線を向ける。キングは「え？」と真顔で反応してしまい、自分の迂闊な発言を激しく後悔するのだつた。

それが、本当にこの事件を解決に導くひらめきであることにも気づかずに。

十六撃目 最後の希望

青白い炎が辺り一面に広がり、ビルも道も、あらゆるものを灼き、溶かしていく。単純な熱によつて溶かしているわけではなく、まるで酸を吹きかけたかのようにどろどろにしているのだ。

「チツ…！ 雑魚のくせにしぶといじゃない」

念動力で空中にとどまるタツマキにもそれは襲いかかる。

物理法則を無視しまくつている彼女の力を持つてしても、防ぐことができない奇妙な炎。それは確実に、世界最強のエスパーを追い詰めていた。

「S級の首、貰い受け…!!?」

「邪魔すんじやないわよ!!?」

しかも敵は一人ではない。他の場所から集まつて来た怪人が、弱り始めているタツマキを討とうと襲いかかってくるのだ。

それを排除するのはさしたる問題ではないが、集中を邪魔されるのは正直厄介であつた。そしてその隙を狙い、鬼火のような炎は容赦無く食らいついてくる。「超能力でも消し飛ばせない炎……やつてくれるわ」

タツマキは冷や汗をかきながらも、真下から睨みつけてくる幽汽に不敵な笑みを見せつけた。

恐ろしいほどに硬い金属同士が超高速で激突し、激しい火花が断続的に飛び散る。

斧のような刃の生えた銃を振るう機械の怪人と、片腕に黒い刃を備えた駆動騎士。両者が一步も譲ることなく、互いを仕留めるために攻撃を繰り出し続けていた。

「お前の戦闘パターンは完全に把握した——行動を継続する」

「やりづらい相手だ……」

一旦、それぞれで武器を強くぶつけ、距離を取る怪人と駆動騎士。

どちらも機械の肉体ゆえに疲労は一切ないが、駆動騎士の方にはやや焦りのような感情が芽生えていた。

「こちらの戦術は、できるだけ秘匿しておきたいのだがな……」

武装を展開するたび、戦闘を繰り広げるたび、駆動騎士の有する戦術は敵に伝わる。しかも倒しても倒しても復活するため、対策を練られてしまう可能性さえある。

ゆえに駆動騎士は、迂闊に手の内をさらさないように戦うという無茶振りが課せられることとなっていた。

「むおおおおお!!?」

「あははははは!!?」

また別の場所では、超合金クロビカリと深海王が真っ向から殴り合いを行なつていた。

拳が激突する余波によりあたりには衝撃波が撒き散らされ、全てのガラスは割れてアスファルトも碎かれていく。

「む…俺の筋肉でも打ち破れないとは、お前も相当鍛えているな」

「あなた…前に私が潰したやつより強そうね。でもそれだけ…今度はあるのハゲと一緒に殺してあげる！」

鋼鉄よりも硬い鋼の肉体を誇るクロビカリは、それをもつてしても倒せない深海王に内心感心する。

すでに一般市民もC級ヒーローも避難済みで退くこともできたが、深海王が後を追つてこないという保証は無論なかつた。

「相手にとつて不足は…!!?」

「どいてくれないか…」

ならばこの手で始末しておこうと、さらに筋肉を膨張させようとした時、クロビカリの肩を引く一人の豪傑の姿があつた。

クロビカリは振り返った先に見えた、決意を目に宿したS級ヒーローに一瞬言葉を失つた。

「ぶりぶりプリズナー？」

「できればコイツは……」の手で仕留めたい」

そう告げ、ぶりぶりプリズナーはクロビカリの前に割り込み、一瞬にして衣服を己が筋肉で引き裂く。

戦闘態勢に入つた、頭一つ分は小さいヒーローを見下ろし、深海王は実に愉しげな笑みを浮かべてみせた。

「あらあ……？　また殺されに来たの？」

見る者を恐怖させる笑みを前にしながら、かつて自分を敗北させた敵を見据えながら、ぶりぶりプリズナーは一步たりとも引こうとはしなかつた。

*

「くそつ……いつもならあんな数どうつてことねえつてのに」

ビルの屋上であぐらをかき、荒っぽい口調でそう吐き捨てたのは、頭から出血して全

身真っ赤になつた金属バット。
怪人たちによる総攻撃を食らつた彼は、なんとか撃退しながらも一時的撤退を余儀無くされていた。

「童帝君。何か情報は掴めたかい?」

「悪いんですけど……全部の数値がめちゃくちゃになつてることしか。正直お手上げつて感じですね」

「そうか……」

アマイマスクに尋ねられた童帝は肩をすくめ、ビルの上から街中を見渡す。

戦火は街の周囲にも広がり、そこかしこから悲鳴と怒号がひつきりなしに聞こえてくる。

特に激しい戦いの場は、S級ヒーローが暴れている箇所であろう。

「だああくそッ!!? もう十分休んだ! 僕はもういくぞ!!?」

「ちよつ! その状態ですか!?」

「相変わらず血の気の多いやつだ…」

「るつせえ!!?」

「待て!!?」

他のヒーローたちの戦いに触発されたのか、金属バットが応急処置もままならないうちに歩き出そうとして、他の者を呆れさせる。

それを止めたのは、比較的最近ヒーローになつたサイボーグと、それに付き添う最強と謳われる男だった。

「ジェノスさん…？」

「キングが気づいた……重要な話がある」

ジェノスの真剣な表情に、金属バットは胡乱げな目を向けつつも、立ち止まつた。

コンクリートが風船のように破裂し碎け、瓦礫が辺りに四散する。

衝撃で吹き飛ばされていくサイタマは空中の大きな瓦礫を足場にし、剣を担いで佇む牙王を見上げた。

「おいおいどうしたあ…？　ハゲヒーロー…そんなもんじゃ俺は倒せねえぞ!!？」

破壊者は相変わらずの上から目線で肩を揺らし、サイタマを嘲笑する。苛立ちはさらにもう一歩近づき、長く続く戦いにうんざりし始めているのがわかつた。

「いい加減鬱陶しいんだっての…さつさと尻尾巻いて逃げてろよクソヒーロー!!？」

再び刀身がエネルギーを帯び、剣から分裂してサイタマに喰らいかかる。

ヒーロースーツが斬り裂かれ、衝撃によつてまた吹き飛んでビルに激突するが、サイタマは根性でその場に踏みどまり、ギロリと牙王を睨みつけた。

「あのヤロー調子に乗りやがつて……ちよつとヒーローっぽくなつてきたけど全つ然楽しくねえぞ」

一人のヒーローが一方的にやられ続けている痛々しい光景だが、当の本人の表情は、

変わらぬまつすぐな目を浮かべていた。

「ヒーローが逃げるわけねーだろ」

感情が薄れ、久しく感じていなかつた、熱い炎が胸の奥で燃え上がる感覚を噛み締めながら、サイタマは再び破壊者の元へと跳躍するのだつた。

「“特異点”に“分岐点”ねえ…」

ジエノスとキング、そして二人とともに来たシルバーファングやフブキ、ハナたちの語つた情報に、アトミック侍は渋い顔で頬を撫でる。

難しい表情なのは、童帝もアマイマスクも同じだつた。金属バットに至つては頭から煙を上げているが。

「量子力学は専門外なんだけどな…」

「にわかにや信じがたいが、そう言われりや納得できるもんもあるな」

「あの記憶に関する食い違いも、それが原因ということなら……なるほど、道理で違和感が拭えないわけだ」

とはいって、敵の謎の能力に関する貴重な情報であることは確かで、ヒーローたちは一応の理解を示す。

考え込んでいた童帝は、険しい表情で佇んでいるキングに視線を移す。

「それで、キングさん。あなたが気づいたことというのには？」

「まだ単なる思いつきなんだが……敵のトップの戦いを見ていて思い浮かんだことがある」

内心、恐ろしいほどプレッシャーを感じてガクブルになつているキングだが、必死に替え面を取り繕つて語り始める。

本当に単なる思いつきだが、異様に納得の声を聞かされた考え方。

「やつは食した相手の能力を奪う能力を使い、記憶を改ざんできる能力をも奪つた。そして自分の能力の応用が何かで、分岐点であるミライ氏の記憶も奪つた……なぜそんな必要があつた？」

キングの発言に、ヒーローたちはそれぞれで答えを考える。

分岐点の記憶が重要なものであるのはわかるが、それを奪うメリットがなかなか思いつかない。

「ハナ氏は言つた。分岐点の記憶は積み重ねられてきた人類史そのものであると……ならばもし、ガオウの能力がそれさえも好き勝手に改竄できるとしたら？」

「……まさか」

童帝がハツとした表情で振り向くと、ハナとモモタロスたちは忌々しげに眉間にしわを寄せる。

なぜこんな簡単なことに気づかなかつたのか、そんな感情がありありと現れていた。「やつは過去さえも書き換えていいんだ。自分に起こつたことを自分の都合のいいように」

キングが好むRPGゲームに例えて考えてみるとする。

強力な力を持つボスキャラがいて、それに挑むとする。その能力値は非常に高く、そのままでは一度は必ず負けることが確定している。

ならばと先にアバターを鍛え上げ、装備を一新し、万全の状態に備えた上で挑む。しかしプレイヤーにはまだ不安がある、相手の攻撃手段もわからないのに挑んでいいものか。

そこでボス戦を前にセーブし、挑戦して敗北した後、再びセーブする前に電源を切る。そうするとどうなるか？

ボスと戦う前の、所持金も装備も経験値も失つていない、万全の状態の時に戻るのだ。——ボスとの戦いの経験を得ながら。

「自分が攻撃を食らつた後、分岐点の記憶を改ざんして過去を改变する……ってえわけか」あまりに突拍子もないキングの考えに、アトミック侍は顎を撫でながらなるほど、といった様子で唸る。

あいにくゲームはしたことないが、卑怯な手段であることだけは理解できた。ズル賢

いガキが使いそうな手だ、と思わず例えるほどに。

「過去を書き換えるなんて……下手すればレベル神どころか本物の神の所業じゃないですか！ そんなものどうやつて対処すればいいんですか？！」

童帝もアマイマスクも目を見開き、しかし疑う様子は見せずにただただ困惑の表情を浮かべていた。

全員の思考が停滞しかけた時、訝しげに片眉をあげたある男が前に出た。

「…ひとつ、いいかのう？」

不思議そうに首を傾げ、片手を擧げるシルバーファング。

手詰まり感に苛まれていたヒーローたちは、訝しげに老ヒーローの方に振り向いた。

「怪人が倒しても倒しても復活してくる理屈はわかつたが：わしが倒した怪人は蘇つておらんかつたと思うぞ？ なぜじや？」

「え？」

「……なんだと」

シルバーファングの言葉に、その場にいた全員が驚きの声を擧げる。

ジエノスは目を見開きながら、そういえば先ほどミライを保護した時、怪人らしき残骸がそこらに転がっていたと思い出す。

「そ…それ、本当ですか？！」

「あのミライつて子が襲われかけたところに割つて入ったときじやが……うむ、肉塊になつたままじやつたな」

現象についてよく知らず、特に気にせず倒したため、シルバーファングもやや朧げに思い出しながら頷く。

絶句していた童帝は我に返ると、すぐさまシルバーファングの方に詰め寄つた。

「その時……何かいつもと違つたことはありませんでしたか!? どこか急所を潰した感覚があつたとか、環境の違いとか！」

「そう言われてものう……」

氣付けば童帝だけではなく、他のヒーローやハナたちもシルバーファングに凝視している。

凄まじい圧の中でも表情一つ変えず、シルバーファングは眉間にしわを寄せてつい数十前のことと思い浮かべて見た。

「強いて言うなら……」の子がいたことぐらいじやな

少しの間考えて思いついたのは、ほんの些細なことだつた。人類にとつて非常に重要な鍵となる少女が近くにいたか否か、その程度のことしか思いつかない。

だがその情報は、ハナに闇が開けたかのような鮮烈な衝撃をもたらした。
「もしかして——ミライが怪人が倒されたことを認識していたから……」

ハナのつぶやきに、童帝も気づいたのかハツと振り向きミライを凝視する。頭脳が足りずついていていけていない他の面々は、慌てて詳しく説明してくれそうな少女に視線を向けた。

「どういうことですか!?」

「……ミライの記憶はまだ、完全にガオウの物になつてない。記憶を改竄することで過去が書き換えられるなら、新しく書き加えることもできるってことじゃ……!?」

「目には目を……つてことですか」

「なんて荒技……」

そこまで説明されてようやく、ジエノスたちはハナが思いついた起死回生の一手を理解する。

敵が過去を書き換えられるのなら、こちらは新たに過去を書き加えればいい。変えられた事実に上書きし、本来の歴史に修復すればいいというのだ。

アマイマスクは険しい表情でうつむき、次いでもう一人の少女の方に視線を移す。

「ならば、この状況を打破できるのはただ一人……」

「……僕、が」

数組の探るような視線に晒されて、ミライはびくりと肩を震わせて後ずさる。策があるのはわかつた。可能性があることも理解できた。しかしそれを自分がこな

せるかどうかという時点で、ミライの胸中には不安が渦巻いていた。

「いや、ムリだろ」

話の半分も理解できていない金属バットが、思わず口にした容赦のない言葉。それはその場で無言になる歴戦のヒーローたちの本音を、見事に表していた。

十七撃目 高貴の白

「お前マジでいい加減にしろよ。どう考えてもなんかズルしてんだろ、絶対」

ヒーロースーツをボロボロにされ、泥だらけになり、それでも体には傷一つついていないサイタマは、こめかみに太い血管を浮き立たせながら牙王を睨む。

いつもいつも、ただの一撃で決着がついてしまう厄介な自分の強さ。それが通用しない相手というのは最初はワクワクしていたが、こうも長く続けられるといい加減頭にきていた。

「どういう理屈かは知らねーけどな、一回殴らせろ。一回でいいから殴らせろこの野郎」

そうすりやこのイライラは終わるのだと、いつもとは真逆のセリフをぶつけるサイタマ。強敵に出会えた喜びなどあるはずもなく、とにかくこの怪人を倒したくて仕方がなかつた。

「必殺マジシリーズ」

じやり、と地面を踏みしめサイタマがその場で低く腰を落とす。メキメキと両足の筋肉を膨張させ、風船のように限界ギリギリまで張り詰めさせると、一気にその力を解放する。

まるで強靭な弾力を有するゴムのように、サイタマはまっすぐに空中へと飛び立つた。

マジジヤンプ!!?

地面に巨大な陥没を作るほどの跳躍で、サイタマはビルの屋上に立つ牙王の元へと飛翔する。

そして同時に、氣だるげに佇んでいる怪人の顔面に叩き込んでやろうと頭上に拳を構え、まっすぐに空中を貫く。その一撃は槍のようくビルに突き刺さり、コンクリートを易々と貫通していった。

「……しつけハゲだ」

[Full charge]

しかし、ビルを一つ崩壊させるまでの威力を見せたそれも、牙王に傷一つ負わせることもできなかつた。

お返しだと言わんばかりに放たれた斬撃により、サイタマはまた別のビルに叩きつけられ、崩れていく瓦礫の中に飲み込まれていつた。

「……かなり近づいて来おつたの、じきにここまで生き延びるとは……」

「先生を相手にここまで生き延びるとは……」

「おいおい……ポツと出の野郎に美味しいとこ持つてかれちやおつさん達の出る幕なくなつちまうじやねえか」

珍しく苦戦を強いられているサイタマを見たシルバーファングとジエノスは、やはり信じられない様子で事態を見守っている。

サイタマの一撃の凄まじさをまだ目撃していないアトミック侍に関しては、そこらのヒーローが翻弄されているくらいにしか思っていないようだが、牙王の厄介さだけは伝わっているようだ。

「つ！ 焼却砲!!？」

その時、背後から接近する熱反応を感じたジエノスが背後に向けて自身の手のひらを向け、強烈な火炎放射を放つ。

ミライを襲うため隙を伺っていたイマジンはそれにより火だるまになり、あつという間に焼き尽くされて地面に崩れ落ちた。

「……そうでもなさそうだぜ……！」

「雑兵がここを嗅ぎつけ始めたか……！」

「まあともかくよ、俺たちやあのワニ野郎からこの嬢ちゃんを是が非でも守らにやならねえってわけだな」

あちこちから感じられる怪人たちの気配に、アトミック侍は肩をすくめてそう呟く。

ハナやキングの考えを完全に信じたわけではない。だが確かにこの状況を開拓できる切り札になるかも知れないと思い、アトミック侍は愛用の刀を肩に担いで背を向けていた。

「奴と戦えるのが嬢ちゃんだけだからって、押し付けるのはヒーローどころか、男としても最低だからな」

「へっ！ おっさんに言われなくともわかってんだよ！」

やる気を見せたアトミック侍に触発されてか、まだ血まみれのままの金属バットも勇ましく立ち上がり、中年剣士とは違う方向に向かつて歩き出す。

我の強いS級ヒーローたちには、共闘という選択肢はまず挙がらない。強い敵が現れたならそれは自分の相手なのだという先入観があつた。

「よつしや！！？」

「うおりやあああああ！！？」

互いに背を向けあうように屋上の端に出た二人は、ためらうことなくその身を空中に踊らせる。勇ましく雄叫びをあげた二人は、それぞれの獲物を掲げて怪人たちの群れへと挑んでいった。

だがそれが、黒幕の相手を誰かに任せると、初めの経験で二人とも気づいていなかつた。

「くううう…！ 僕も戦えりやなあ…！」

「ボクも暴れたーい」

「ミライがこんなんやから変身できへんねんからしやーないやろ！」

「ほんつと、先輩もりユウタも血の氣が多いんだから」

戦場に赴いたヒーローたちの背中を凝視していたモモタロスたちが、そう悔しそうに喚くのをウラタロスが呆れたように見やり、肩を落とす。

ジエノスとシルバーファング、フブキも行きたそうな顔をしていたが、ちらりとミライの方に目を向けると自分を諫めるように表情を引き締める。

「…では、僕はここでガオウに対抗する手段を考えることにしますか」

もう一人、その場に残つた童帝は再びパソコンに向き直り、全身全靈をもつて観測と打開策の模索に集中することに決める。

直接の戦闘ではなく、頭脳に特化した自分にできる、最大限の共闘だと信じて。

「さーと…そろそろちよつとぐらい本気を出してみようかな！」

その時、氣だるげに屋上で首の骨を鳴らしていた牙王が、忌々しげに舌打ちをこぼし、サイタマを埋めている瓦礫の山の方を見下ろした。

「ああ…いい加減鬱陶しくなってきたわ、てめえ」

仮面越しではわからないが、牙王の顔には深いシワが刻まれ、脳裏には間抜けな顔のサイタマが浮かんでいた。

たつたの一撃も決まらず苛立つていたサイタマだつたが、それは牙王も同じことだつた。放たれた攻撃は全て牙王を捉え、そのたびに牙王は過去を書き換えていた。

その手間と拳を受けた時の痛みは着実に牙王の記憶に刻まれ、彼に苛立ちを与えていた。

「ブツ飛ばしても斬りつけても平気なツラして戻つて来やがる……ただの弱者が俺の邪魔をしてんじゃねえ。俺は忙しいんだ」

ギロリとミライがいる方のビルを睨み、牙王はゴロゴロと崩れていく瓦礫の山に視線を移す。

並みの怪人であれば瞬殺できる猛攻をその身に受け、服しかダメージを受けていない

など、すべての破壊を望む牙王にしてみれば屈辱以外の何物でもなかつた。

「てめえの攻撃も無駄で俺の攻撃も無駄……こんなもんいつまでたつても終わらねえ。俺の貴重な時間を削りやがつて……だがしうがねえ」

イライラした態度でつぶやいていた牙王だつたが、やがて仮面の下でニヤリと笑みを浮かべる。

その手が、瓦礫の間から顔を出したサイタマに向けられた。

「これやつちまつたら、正攻法じや俺がてめえに敵わねえって認めてるようで癪に触るが、もうしのぎの言つてられねえ。てめえさえ片付けちまえば、後の連中はみんな雑魚ばつかだからな」

そうつぶやいた直後、ズン、と空気が重くなつたかのような錯覚をジエノスとシリバーファングは覚える。

世界そのものが握り締められ、壊されているかのような嫌な気配が、サイタマを除く誰もの背筋に寒気となつて襲いかかつた。

「……!? 何だこの脅威的な数値の変動は!? 何かする気だ!!？」

「……まずいんじやないの……!?」

周囲の磁場などを調べていた童帝は、機材が示す異様な反応に表情を引きつらせ、フブキは超能力がなくても伝わる威圧感に冷や汗を流す。

すべての人間、そして怪人にも恐怖を与えた牙王は、自分の力の標的にサイタマを捉えながらさらに笑みを深めた。

「生まれた日」と消えちまえ」

手を焼いた獲物を仕留める、嗜虐的な顔になつた牙王が徐々にその力をサイタマに向けて開放していく。

違和感を覚えたのか、緊張感のない表情で訝しげに自分の体を、幻のように薄れてい

く四肢を見下ろすサイタマに、シルバーファンギングはハツと目を見開いた。

「いかん！ サイタマくんの存在そのものを歴史から消すつもりじゃ!!」

「先生！」

人類史そのものに干渉するという、反則じみた力。

それをたつた一人に対してのみ発動させようとしている牙王にジエノスたちは焦る。数々の人類への脅威、滅亡の危機を回避させてきた男が、はじめからいなかつたことにされるという残酷な危機にさらされる。止めようと動いたジエノスたちを嘲笑うように、牙王の目が危険な光を放つた、その時だつた。

「ダメええええええ!!？」

誰よりも悲痛な表情で、薄れていくサイタマの姿を凝視していたミライが、悲鳴のような声を上げる。その声が大気を震わせ、牙王の元へと届いた瞬間。

まばゆい白銀の光が、牙王を吹き飛ばした。

「ぐお……！」

突然襲ってきた衝撃に、牙王は防御もままならないまま後退させられ、発動しようと

した力を霧散させられる。

消えかけていたサイタマの体が元に戻るのをよそに、牙王は処刑の邪魔されたことに忌々しげに舌打ちし、白銀の光の中にいる人影を睨みつけた。

「降臨…！　満を持して」

光を裂いて現れたのは、白鳥を模したような姿のイマジンだった。

純白に輝く体に、王子のような高貴な佇まいをした彼は、なぜか周囲に舞い散る羽毛の中で舞台俳優のように両手を広げた。

「ジーク…！」

「手羽野郎！？　何でお前がここにいるんだよ！？」

「し、知り合いなの！？」

「ずいぶん前に……でも、なんでこの時代に」

新たなイマジンの登場に驚かされたのは、ハナやモモタロスたちだった。

フブキたちは、白いイマジンと知己らしいハナたちを凝視し、何者だと視線で問う。だがハナたちにはそれどころではないらしく、絶句していたところで白いイマジンが振り向き、恭しく首を垂れてみせた。

「姫…お久しゆうございます。姫の窮地と伺い、急ぎ馳せ参じた次第」「おいてめえ！　無視してんじゃねーぞコラア！」

「ジーク……あんたどうやつて……！」

騒ぐモモタロスたちを無視してハナにのみ例を見せるジークに、ハナは戸惑いながら立ち尽くす。

だがすぐに、頭上で汽笛を鳴らしている緑の列車の姿に気づき、納得したように笑みを浮かべた。

「ゼロライナー……ユウトが連れて来たのね」

「その通り、そしてこの悪漢を討つために、私はここに参戦した！」

ジークはハナに背を向け、改めて牙王に向き直る。そして、どこからともなく黒いベルトを取り出し、自分の腰に巻きつける。

翼を広げた金色の鳥のモチーフが中心に飾られたそれから美しいハープのメロディが鳴り響き、ジークはさらに取り出したパスを右手で掲げた。

「変身」

〔W^{ウイ}i^ンn^グ f^ォr^ム〕

ジークがパスをベルトの前にかざした直後、大量の羽毛が舞い上がりジーグの姿を隠す。

羽毛の壁の中では眩しい光がほとばしり、ジークのシルエットを見る見るうちに変えていく。やがて羽毛が晴れ、ジークの姿が再び露わになっていくと。

「え!? ?」

「おお」

「何イ!? ?」

そこに立っていたのは、白鳥の怪人などではない。

金色のスーツに身を包み、純白の鎧を纏う、青い翼の形のモチーフで髪をツーサイドアップにまとめた、ミライと瓜二つの少女であつた。

巨大な機械の翼を背から広げた姿は天使のようで、切れ長の目が高貴な雰囲気を醸し出す。

怪人の予想だにしない変貌ぶりに、ジエノスらはもちろんハナたちも驚かされていた。

「なんでお前……変身できてんだよ!? ? ズリイぞ!!?」

砂の体のまま、モモタロスや他のイマジンたちがジークに向けて吠える。いきなり出てきて出番を搔つ攫われるのは、暴れたい彼らにとつては見過ごせない問題だった。

だがジークは、そんなモモタロスに無言で振り向き、凧いだ目を向ける。そして、ギヤーギヤーとうるさい彼らに小さく告げた。

「……お膳立てはしてやる。お前達はさつさと手段を講じていろ」

「つ！ あんた……まさか時間を稼ぐために…!? ?」

ジークの言葉の意味を察したハナが言葉を失っていると、ジークはすぐに視線を戻し、腰に下げる黒いパンツを外し、空中に放り上げて組み合っていく。

アンドアックスとブーメランに変化したそれを構え、ジークは牙王へと斬り掛かつていった。

「誇るがいい……この私の美しき戦技により逝けることをな！」

「ほざきやがれ!!?」

牙王の剣とジークの刃が激突し、甲高い音が響き渡る。

白鳥の戦士と牙の暴君は互いを排除すべき害とみなし、また何度も刃をかち合わせ、激しい火花を散らしていった。

十八撃目 諦めない奴ら

崩れた廃墟の前に停車している、近未来的な外見の列車デンライナー。その前で氣だるげに座り込んでいる二体の怪人達のもとに、どこからともなくビリビリと空気を震わせ破壊音が聞こえてくる。

それが自分たち以外のイマジンや怪人達がもたらしているのだと思うと、列車の見張りを任せているイマジンたちには苛立ちが募つていた。

なぜこんなつまらない命令をこなさなければならないのか。

「かつたりいな……こんなもん見張つての必要なんてもうねえだろ」

「そう思うなら直接言いに行つてみろよ、存在ごと消されるぜ」

現在のイマジンたちが存在を保つてているのは、ガオウがそう過去を書き換えているから。

絶対的な支配者の位置に立つてているガオウに文句を言おうものなら、怒りのままに消されるか、もしくは死と復活を延々と繰り返されるか。考えるだけで恐ろしかった。

「あーあ…俺もあつちで暴れてえな」

「もう少ししたら交代の時間だ。我慢し…ろ…」

相方と同じく、力を持て余していたイマジンがそうなだめていると、その声が急に尻
薙になっていく。

急に黙り込んだイマジンに不審げな視線を向けた相方は、彼が向いている方向に目を
やると、同じように驚愕で目を見開き、言葉を失くした。

彼らのいる方に向けて、一人の男が近づいてきていたからだ。

「こ、こいつ！あの顔の傷跡……！」

「まさかあの、キング……!?」

ズシ、ズシと瓦礫の砂利の上を踏みしめ、顔に深い傷を刻んだ金髪の大男、キングが
恐ろしい形相で近づいてくる。

それなりの距離があるのに聞こえてくる、エンジンのような重低音を耳にした彼ら
は、キングが完全に戦闘態勢に入っていることを察して硬直してしまった。

「な、なんなんだよこいつ……!?」

「く、来るんじやねえよ!!？」

慌てて立ち上がりつたはいいものの、彼らはそれ以上の行動を起こす事ができない。

一步でも動けば潰される。わずかに動きを見せただけであの男の餌食にされると錯
覚させられるほどの威圧感が、迫つてくる大男からは感じられていた。

「そこから動かないでくれるかな……俺は今にも、何もかもを解き放ちそうなんだ」

「う…あ…！」

「もしさうなつたとしても君達には何の責もない……俺も咎めるつもりもない…だから、そこをどいてくれ。他ならぬ君達自身のために」

圧倒的な力の差を見せつけながら、逃げる猶予を与えるようにキングは告げる。だが、それを聞いてもイマジンたちは動くことはできなかつた。

敵の言う事を信用できないという単純なものではない、かすかに緊張を解けば意識が吹き飛ばされそうな気がしていた。

（なんだこの、とてつもない威圧感…!? こいつ本当に人間か…!?)

(たとえ倒されても、俺たちはすぐに復活する…どんなに強いヒーローが来たって問題じやねえ…なのになんて、なんでこんなにも体が震えるんだ…!?)

復活する力など何の意味もない。むしろ復活して、この男にまた立ち向かわなければならぬのかという絶望感が湧きあがり、逆らう心をへし折られる。

ガタガタと震えたまま立ち尽くし、反応さえ返す事ができないイマジンたちに向けて、さらに凄みを増した表情でキングが口を開いた。

「これは最後の警告だ…どいてくれないかな」

魂まで見抜かれそうなすさまじい眼光に、イマジンたちはもはやまともな思考さえできなくなる。

呼吸も脈動もおかしくなりながら、徐々に理性の鎖が壊れていき、衝動のままに勝ち目のまつたくない戦いを挑みそうになつた、その瞬間。

【Full charge】

横から聞こえてきた声と眩しい光に、イマジンたちの意識がハツと現実に引き戻される。

しかしその時には、イマジンたちは両方ともサーベルの刃をその身に食らい、真つ二つに両断されてしまつていた。

「でやああああああ!!?」

「ぎやああああああ!!?」

ユウトの刃をその身に受け、イマジンたちは断末魔の悲鳴を上げて爆発四散する。

復活を懸念し振り向いて身構えるユウトと、指先の銃口を突き付けたデネブは、一目散に走り去つていく先ほどのイマジンたちの背中を見やり、ひと段落とばかりに肩を落とした。

「もーヒヤヒヤしたよ…キングさん無茶しすぎ」

「だが助かつた。睨むだけで連中を戦闘不能にするとはな…やはり、伝説は本物か」

唯一の武器であろう拳は、キングのポケットの中に納められたまま。ただその辺を散歩するような悠々とした態度でイマジンたちの方へ向かつたその勇姿は、歴戦の戦士で

あるユウトたちから見ても感嘆せざるを得ない。

勝算の施栓を双方から受けながらキングは、今にも爆発しそうな自分の股間に称賛の念を送っていた。

(よく頑張ったぞ、俺の膀胱)

尊敬の念さえ向けているユウトたちには口が裂けても言えない。
デンライナーの奪還のため隠れていたところを、爆発音に驚いて物陰から飛び出してしまい、ヤケクソになつて突撃をかましてしまつただけなどとは。

そうとは知らないユウトたちがデンライナーに乗りこむのを見ながら、キングも急いで車内に乗り込んだ。

「オーナー、大丈夫か!?!?」

乗客室に飛び込んだユウトは、座席の一つに座り悠然と構えている男性、オーナーのもとに急ぐ。

捉えられていたわりには平然としている男性は、息を荒げていてユウトを落ち着かせるように穏やかな声で応じた。

「特に怪我などはしていませんよ。…私のマスター・バスは奪われてしましましたがねえ」

「ガオウが使っているアレか…」

「非常に申し訳ない。奮闘はしたんですがねえ……」

オーナーは無表情のままだが、実際にかなりの責任を感じていてるらしく、忌々し気に歯を食いしばるユウトやデネブに申し訳なさそうな視線を向けている。

ふとその目が、所在なさげに立ち尽くしているキングの方にも向けられ、深々と頭が上げられた。

「キングさん……あなたやこの時代のヒーローの方々にも苦労をかけて、大変申し訳ない」

「あ、いや……成り行きだし仕方ないっていうか……」

見知らぬ男性に急に謝られ、キングは内心かなりビビりながら手と首を振る。

何故だろうか、オーナーの謝罪は無関係の人間に向けられているだけではなく、一般市民に対しても感心する謝意にも感じられたのは、
冷や汗を流すキングをよそに、オーナーはユウトの方に向き直り、状況の説明を求めた。

「ミライさんは？」

「ハナやミライのイマジン達と一緒にだ。だが正直、ガオウへの打つ手がなくてな……」

「ふむ……なるほど」

悔し気な眉間にしわを寄せるユウトに、オーナーは表情を変えないまま顎に手を当て

て考え込む。

しばらくするとオーナーは顔を上げ、席から腰を上げるとステッキを手に持ち、コンと床を叩いて歩きだした。

「さて…では反撃といきましょーか」

平然とそう告げるオーナーを、ユウトとデネブは目を見開いて凝視する。

自分たちがもたらした報告は全く希望が見当たらない、耳を背けたくなるような内容ばかりだつた。

それでも好意的に受け止められるという事は、打開策があるという事か。

「!? 何か奴に対抗する策があるのか?」

「彼が何を思つてミライさんを狙つたのかは、捕まつている間にだいたいの検討はつきましたからねえ…あとはそれをどう防ぐかです」

信じられないとばかりに立ち尽くすユウトたちの前を通り過ぎ、オーナーは先頭車両がある方へ一人颯爽と歩いていく。

放置されたユウトたちやキングがオーナーの背中を見つめていると、彼はふと思い出したというように立ち止まつた。

「まあ…そちらはミライさん自身に任せましょー。一度改変されてしまつた時間は、上書きすることでしか元には戻せませんから」

「どういうこと?」

「復活した怪人たちは、ガオウを倒したとしてもこの時代に残るということです」

オーナーの言葉に、ユウトはハッと息を呑んで表情を強張らせる。

確かに、ガオウを倒したところで時間の流れが完全に元に戻るという保証はない。これだけ滅茶苦茶にされた時間が、何もせずに勝手に奇麗さっぱり元通りになるわけがなかつた。

「最悪だ……過去の怪人の中には、危うく人類を滅ぼしかけた連中だつているんだぞ

!?!? そんな奴らを、いつべんに相手にするなど無謀すぎる……」

「確かにそうです。ある奇跡の存在によつて退けられてきたこの時間の脅威、それが繰り返される……そう簡単には乗り越えられないでしよう」

くるくるとステッキを回し、オーナーはユウトたちに背を向けたまま歩く。

その足がふいに止まり、コンコンカツンつと杖でリズミカルに床を鳴らすと、オーナーは意味深な笑みを浮かべてユウトたちに振り返り、口を開いた。

「ですが……だからこそヒーローがいるのです」

珍しいオーナーの笑みに、ユウトたちは呆気にとられたように立ち尽くし、どういう意味かと尋ねるように凝視する。

間抜けな姿を見せていく若者たちを諭すように、オーナーは穏やかな表情のまま向き

直り、彼らにビツと人差し指を突き付けた。

「怪人と戦うために必要なのは、人の域を超えた純粹な力ですが……我々時の守護者に必要なものは、そんな単純なものではありません」

オーナーを訝しげに見つめるユウトには、彼の言いたい事が何なのか分からぬ。

記憶を奪われ、戦う手段を奪われ、何一つ為せないよう弱体化させられたミライの事を考えれば、打つ手など一つも残されていないようにしか思えない。

しかしオーナーは、そんな疑念を否定するように不敵な笑みを浮かべてみせるのだった。

「彼女は、すでに持っているものです」

十九撃目 未来を託す

F_u_{ll} charge

「ぬうん！」

白い電流を纏わせたブーメランを投げ、もう片方の手にハンドアッ克斯を握ったジーグが牙王に向かつて突進する。

牙王は向かつてきたブーメランを剣で弾き、振るわれた斧の刃を受け止める。激しい火花を撒き散らし、白鳥と鷲の仮面が真正面から睨み合つた。

「きくかよお!!?」

力任せにジークを振り払つた牙王は、背後から再び飛んできたブーメランをまた弾き、自らジークに向かつて突撃していった。

白鳥の騎士は戻つてきたブーメランを受け止め、ハンドアッ克斯と交差させると牙王の剣を受け止める。だが、膂力の違いが顕著に表れ、大きく後退させられる羽目になつた。

「くははは…！」でかい顔で出てきたと思えば、やつぱりつまらねえなあおい！ もつと俺を楽しませろよ白鳥野郎!!?」

剣で肩を叩き、耳障りな笑い声をあげる牙王は執拗にジークを叩きのめそうと迫る。

対するジークは追い詰められるも、一切窮地を感じさせない態度で武器を構え、軽い足取りで牙王を翻弄し続けていた。

「フン、貴様を愉しませるなど虫唾が走る。奪つた宝石で偉くなつた氣でいるお山の大将ごときが……せいぜい今のうちに辞世の句でも考えておくがよいわ」

「うるせえ!!?」

力の差を技術で補い、ジークは牙王と対等に渡り合う。だがやはり、時間ばかりが過ぎるだけで反撃の糸口を見いだせずにいる。

時間稼ぎに徹しているジークを忌々しげに睨み、牙王が情け容赦なく剣を振るい続ける。その背後に、大きく仰け反つた人影が接近した。

「俺を忘れてんじゃねえよ」

マジ頭突き!!

大きく頭を反らせたサイタマが、眼下の牙王に向けて渾身のヘッドバットを食らわせようと体を折り曲げる。

牙王はそれを異様な反射速度で躱し、空振りしたサイタマは足場である屋上を思い切り碎いてしまう。また何かズルをしたのだと察し、ビキツとサイタマのこめかみに血管が浮き立つた。

「うつとうしいんだっての……！ 食らいやがれ！」

【Fuel charge】

褐色のエネルギーが牙王の剣から逆り、刀身が勢いよく射出される。牙王は電流でつながったそれを振り回し、碎けた足場の上でよろめくサイタマとジークに向けて思い切り振り下ろした。

「おらああああ！！？」

カツ、と閃光が走り、二人のヒーローごと屋上が吹き飛ばされる。

とてつもない爆音と衝撃があたりに発せられ、大量の瓦礫が雨のように地面に降り注いでいった。

「うおらあああああ！！？」

裂帛の気合いとともに、金属バットが特別製のバットを振り回す。そのたびに怪人達の身体はバラバラに吹き飛び、あるいは弾丸のようにビルの壁に突き刺さっていく。

気合い野蛮トルネード！！？

ストレートにあらわされた名の業が決まり、あつという間に金属バットのまわりから怪人達は一掃される。だが、すぐさま物陰から怪人達が姿を現し、金属バットは苛々した様子でバットを構えなおす。

次から次へと表れ、復活する怪人達を前にヒーローたちは一歩も引かない。

背にしているビルに何人たりとも近づけさせまいと、懸命に戦い続けていた。

「嬢ちゃんのところへは蟻一匹通さねえぜ！」

アトミック侍の声に賛同しているわけではない。しかし同じ思いを有したヒーローたちが、事態の収束を担う希望を守るため、測らぬうちに背中を合わせて戦うようになつていた。

「ぶへえつ！？」

宙を舞っていた赤い光が少女に弾かれ、砂の塊となつて地面に叩きつけられる。

地面に散らばつた砂はざるざると蠢くと、悔しげな顔の鬼に変わつてギリギリと歯を食いしばつてみせた。

「クツソオ…！ ダメか！」

「やつぱりのう…今のミライとは契約自体がなかつたことになつとつて乗り移れへん」

「でも乗り移れたところで、あんなのが相手なんじゃ…」

「じゃあれどうするの…？」

モモタロスの挑戦が失敗に終わると、他のイマジンたちがどうしたものかと頭を抱えて唸る。

ミライに憑依することで、戦う力となつていたイマジンたち。それができないうえ、それでも敵わない敵が相手となつては打つ手がなかなか見つからなかつた。

「全く情けないわね！　あんた達四人も揃つて何の打開策も思いつかないわけ!?」
「…このバカ共にそんなひらめきを求めるのは酷ですよ」

「あんだとハナクソ女に高飛車女！　てめーらだつて何にもできてねえじやねーか！」

呆れた様子で肩をすくめるフブキと、ジト目で睨んでくるハナにモモタロスが抗議の声を上げるが、事実であるため否定はできない。

モモタロスは砂の身体のまま、不安げな表情で立ち尽くしているミライを見やつて頭を抱えていた。

「ちくしょう…ミライが変身さえできればあんな野郎なんて…！」

「…なるほど」

ぶるぶると拳を震わせ、悔しさをあらわにするモモタロスやほかのイマジンたちの耳に童帝の声が届き、思わず全員で振り向く。

自前のパソコンとにらめっこしていた彼は、若干目を充血させながら、いつの間にかやり遂げた様子で画面を見つめていた。

「あ？　なんだちびっ子、なんか分かつたのか？」
「観測機を何十台も使ってようやくね……ちびっ子とは失礼だな」

ぎろつと不本意な呼び方に凄むが、そんな無駄なことをしている場合ではないと、童帝はすぐにパソコンに向き直る。

モモタロスたちやハナたちも同じく画面を覗き込むが、よくわからない数値が表示されているだけで意味が分からず、みんなで一斉に眉を顰めていた。

「君たちイマジンとは、つまりは実体のない精神だけの存在。砂の姿なのはあくまで僕たち人間が君たちのいまの姿を認識できないため、脳が代替的なイメージを作り上げているだけ……まさにイメージの魔人だ」

「ん…？ まあそうだな」

「先輩：わからないなら無理しなくても」

「うるせえ！」

頭がそれほど優秀ではないモモタロスを無視し、童帝は自分が見つけ出した回答を説明すべくイマジンたちの方に目を向ける。

周囲の磁場の数値から始まり、イマジンたちやミライの肉体の隅々まで観測した結果得られた情報の全てを統合し、童帝は状況を開拓するためのある秘策を導き出そうとしていた。

「そして人間がイメージすることにより、君たちは擬似的な姿を得る。そして契約を交わすことにより実体を持ち、物理的な干渉が可能になる……極めて興味深い存在だ」

「あ～！ そんなむずかしい話はもういいから！ どうすればいいのかだけ教えてよ！」

「慌てないで……これも必要な説明なんだから」

あちこちから聞こえてくる爆発音や破壊音に焦ったのか、慌てた様子で先を促すウラタロスを制し、童帝はできるだけ正確な情報をかき集める。

そのためのいろいろなことを、今一度モモタロスたちに詳しく確認しておく必要があつた。

「君たちはかつて、ミライさんと契約を交わして戦士としての力を手にしていた。どうだつたよね？」

「せや」

「そして今、君たちとミライさんとの契約が切れてしまい、憑依して戦うことができなくなつた……」

「それがどうしたのさ？」

頷くキンタロスやリュウタロスに、童帝は最後のシミュレーションを行う。

ほとんど手つかずの専門外の分野だが、集めた情報をどうにかして纏め上げ、秘策という一つの形に仕上げていく。

ものの数秒で、不敵な笑みを浮かべた童帝が鋭く目を輝かせた。

「だつたら話は簡単だ……もう一度ミライさんにイメージさせた上で契約し直せばいい」

童帝の示したプランはシンプルなものだつた。

クラッシュしたパソコンを蘇らせるために、全ての機能を最初からやり直すような、単純な考えだつた。

小難しい作戦でも出るのかと身構えていたモモタロスたちは、提示された案に思わず目を見開いて固まつてしまつた。

「何い!?」

「それは……できるの?」

「考えたこともないでそんな荒技……！」

「面白そー！」

それぞれで反応を異ならせ、顔を見合わせるイマジンたち。

種族的な本能というべきか、契約の仕方については深く考えずとも自ずとでききたため、童帝の言うような方法など考える由もなかつた。

不安になつてきたのか、ウラタロスがちらりとミライを見やりながら尋ねた。

「本当に可能なの? そんな荒唐無稽なこと……」

「正直言つて賭けだ。机上の計算な上に、失敗したらどんなことがあるかもわからない

……イマジンたちにも、ミライさんにも

保証はできない、と童帝は苦々しい表情になる。天才を自負する彼にとつて、ここまであやふやな答えを提示するのは抵抗が大きいのだろう。

それでも、現状で最も成功確率が高い策であることには変わりなく、童帝は決断を求めるために、少女の方を振り向く。

視線を向けられた少女は一瞬口をつぐみ、やがて意を決したように顔を上げ、頷いて見せた。

「……僕、やるよ」

いまだミライの顔には、怯えが混じついて頼りなさげである。

しかしそれを必死で抑え込もうとしている強い眼差しを目にし、モモタロスたちの方があつけにとられる。

だがすぐに、よく言つたといわんばかりに不敵な笑みをミライに向け始めた。

「…へっ！ しようがねえな！」

「やりますか」

「おっしゃ！ 乗つたで !!」

「イエ～イ！」

笑みを浮かべて鼻を拭うモモタロスを筆頭に、イマジンたちは続々とミライの方に近

づき、互いに小突き合いながら意気を高めていく。

それに慌てたのは、決意を口にしたミライに絶句し、反応が遅れたハナとフブキだった。

「あんた達……本気でやる気なの!?」

「この状態のミライがやる気出してんだ。俺たちが根性出さねえでどうするんだ」

「たまには、泥臭い努力も必要だよね」

「おっしゃ、こうなつたら最後まで付き合つたるわ！」

「イエーイ！ やろやろ♪♪」

砂の身体のまま、腕を伸ばしたりと準備運動を始めるイマジンたちに、ハナは呆れて言葉もない様子でため息をつく。

リスクが大きすぎるというのに、それを微塵も気にする様子もなく試そうとしているイマジンたちのミライへの信頼、あるいは能天気さに返す言葉もないようだつた。

構わずモモタロスは、動悸を抑えようと胸を抑えていたミライと向き合い、ビシツと指を突き付けた。

「ミライ、お前はとにかくひたすらイメージしろ！ なんでもいい、俺たちと一緒に戦うための何かだ！」

「……うん」

まつすぐに見つめてくるモモタロスに頷き、ミライはスッと目を閉じて集中を始める。

恐れはまだ、ミライの中で根を張っている。しかし胸の奥でくすぐる何かに、そしてモモタロスたちに背中を押され、ミライは覚悟を決めていた。

「よっしゃあ！ 行くぞお前ら！」

「しようがないね」

「やつたろやないか！」

「イエ～イ！」

気合いの声を上げたモモタロスたちが、一斉に四色の光の球となつて空中に浮かび上がる。

赤、青、黄、紫。四色の光は目を閉じたままのミライの目の前に浮かび、くるくると回つてその輝きを大きく強くしていく。

「……一緒に、戦う」

伏せていた目をかすかに開いたミライの口から、小さな咳きがこぼれる。

その瞬間、ミライの目の前で回つていた光がカツと弾け、急速にその形を確かなものに変えていく。

丸い円盤と、長く伸びる分厚い刃。赤を基調とした、レバーのついたそれは、奇妙な

形ではあるが確かに一振りの剣だつた。

四つの仮面が円状についたその剣が、ふわりとミライの伸ばした手の中に納まる。

「……これが秘策……！」

「……デンカメンソード」

予想外の現象に、ハナやフブキだけでなく童帝も驚愕の表情で目を見開く。

両手に感じる武器の重みに、ミライは閉じていた瞼をゆっくりと開いて、託された希望をじっと見下ろす。そして、黒いパスケースを取り出し、剣の刀身にはめ込んだ。

「……変身」

〔^ラ_イ^ナ_ー^フ_オ^ム
L i n e r f o r m〕

電子音声が鳴り響き、ミライの全身に光のかけらが張り付いて、深紅と白と黒に彩られたスーツを生み出す。その上から、竜の顔を模したような流線型の装甲が張り付き、輝きを放つ。

最後に前頭部に、デンライナーの前面の形をした髪留めがつき、左右から三色の突起が羽のように展開され、さらに頭頂部からパンタグラフが伸びる。

これぞ、急遽生み出された時の守護者の新たな姿。

始終戸惑いの表情を浮かべていたミライは、全身を包む鮮やかな深紅を見下ろし、その目から強い輝きを放つた。

二十撃目 起死回生

「…………」が、電王

金属製の籠手に覆われた自分の手を見下ろし、ミライはどこか夢見心地で呟く。体に突然宿った力はふわふわとした感覚で、自分の力とは思えない。無理に高いヒルを使つて背伸びしているような、そんな頼りなさを感じてしまうくらいだつた。

『いくぜミライ！』

「う、うん！」

しかしそれでも、その手に仮面の剣を掴んだ瞬間から、ミライはキッと表情を改めて覺悟を決める。

集められた力に背中を押され、重く手にのしかかる剣を両手で握りしめ、崩壊したビルの屋上でに佇む牙王を睨みつけた。

「ぐつ…もう！」

「はははは！　もう手も足も出ねえようだな…もうこんなもんでいいだろう」

牙王の手が、ボロボロになつたジークの首を片手で掴み、目前に持ち上げる。

苦悶の声を漏らしながらも、ジークは氣丈に牙王を睨みつけ、しかしやはり悔し気に

歯を食いしばる。

純白のドレスと鎧には多くの傷が刻まれ、奮闘の跡をうかがわせた。

「あとは俺の胃の中で、この下らねえ時間が消える様を見てやがれ」

「ぐああああああ!!?」

牙王がそう告げた瞬間、ジークから白い光が放たれ、その体が粒子のように崩れていく。

牙王の仮面が口のよう開き、その中にジークであつた光が飲み込まれていく。そのまますべてを食らいつくすと、牙王の仮面はげっぷのよう蒸気を放ち、一際大きな光を漏らした。

「ジーク……！」

ハナは消滅したジークから目を逸らし、苦し気に顔を歪めてうつむく。ただ見ているばかりで、何もできなかつた自分自身が悔しくて仕方がなかつた。

牙王はやや満足げに肩をすくめ、首をゴキゴキと鳴らして横目を向ける。その先には、大量の鉄骨の山の中でもがく禿頭の白マントの男の姿があり、うまい具合に絡まつてしまつたのかなかなか抜け出せない様子だつた。

「次はてめえだハゲマント……せいぜい俺を怒らせた」と後悔して消えちまえ！」

下卑た笑みを浮かべ、牙王はサイタマの姿がよく見えるように屋上の端に歩み寄つて

いく。

ゆっくりと掌を掲げ、時間に干渉する力を解放し、忌々しい邪魔者を完全に消滅させてやろうとした時だつた。

「やあああああ!!?」

甲高い金属音とともに、真下から少女の雄叫びが聞こえてくる。

鬱陶しそうに振り向いた牙王は、金色の光のレールの上を剣を掲げて滑走してくるミライの姿を目にし、ちつと舌打ちをこぼす。

引き攣った顔で剣を振るう少女に、鉄筋に囚われたサイタマは目を丸くしてその姿を見つめた。

「……あいつ」

「てめえ……しつけんだよ小娘が」

振るわれた斬撃をやすやすと躱した牙王は、すぐ目の前を通り過ぎ屋上に辿り着いた少女に険しい目を向け、思わず低く唸る。

たらを踏みながら降り立つミライは、おつかなびつくりといつた様子で剣を構えなおしながら牙王に向き直り、震える切つ先を突き付ける。その情けない姿に、牙王はますます苛立ちを募らせた。

「もういっぺん喰われなきやわからねえみてえだな!!?」

ブンと自分の剣を振りかざし、牙王はミライの方へ一步ずつ近づいていく。

次第に駆け足になつていく敵にミライはやや怯えながら、それを無理矢理押し殺してその場にとどまり、剣を向け続けていた。

「おらあああ!!?」

「ひうつ!!?」

しかし、牙王が剣を振るうと勇気は一瞬で引っ込んでしまい、涙目で後退り腰を抜かしてしまう。

牙王は容赦なく次の斬撃を振るい、そのたびにミライは躱そようとするも、すれすれを通り抜ける刃に思わず体を硬直させてしまった。

「ぴいつ!!?」

刃が風を切り、犠牲になつていく自分の髪や、浅く傷をつけられる自分の鎧とスースにぞつと背筋を震わせる。

そして恐怖する暇もなく向けられる悪意の猛攻に、ミライは情けない悲鳴を上げ、ただひたすら逃げ続けるほかになかった。

「ひやああああ!!?」

「おいおい：拍子抜けさせんじやねえよ！ もつと俺を…楽しませろ!!?」

自分から向かつて来たかと思えば、結局この程度なのかと牙王は激しい落胆を覚えて

吐き捨てる。

立ち上がるどころか、まともに向かう事もできずにいる少女に向けて、牙王は執拗に剣を振るい続けた。

瓦礫に囲まれたビルの真下に集まる、無数の怪人やイマジンたち。

彼らは存分に力を振るい破壊をもたらせる場所を探し、やがて軍団の最優先目標である分岐点の少女の姿を捉え、一斉に同じ場所を目指し始めた。

「いたぞ！ 分岐点のガキだ！」

「捕まえて今度こそぶつ殺してやれ!!？」

軍団の頭目である牙王、その男に下された命令だからというだけでなく、見るからに弱く甚振りがいがありそうな標的を狙う快感に突き動かされている彼ら。

そんな彼らを真下で防いでいるのは、自然と共に闘体制が出来上がりつつあるS級ヒーローたちだった。

「くつ…… 加勢に行きたいところだが、この数では！」

手のひらから業火を発射し、鋼鉄の拳をたたき込むジエノスが、一向に減る様子のない怪人の波に鬱陶しそうに唸る。

やはり一体一体はそれほど強力ではない、災害レベル虎か鬼程度の脅威でしかない

が、それが大群を成しているのだから始末に負えなかつた。

「しゃらくせえ！」

「どけオラア !! ?」

超高速の斬撃と、気合によつて振るわれるバットが怪人達を吹つ飛ばし、片つ端から片付けていくもその状況は変わらない。

だがそれでも、ヒーローたちの表情に絶望はない。やけくそになつてゐるわけではない、唯一の希望に全員が懸けていたからだ。

「たつた一人の少女に頼ることしかできんとは：せめて雑兵どもの掃除は任されんとな」

流れる激流の動きとともに、シルバーファングが自身の悔しさを破壊の力に変えて怪人達に叩き込む。

心が折れそうなほどに圧倒的な兵力の差を前にしても、彼らは止まりはしない。各々にできることを全力でやり遂げようとしていた。

「邪魔するんじやねえぞクソヒーローども！」

進めないことに苛立つたイマジンの一体が吠えるが、その顔面に鉄拳がぶち込まれ、その体が大きく吹つ飛ぶ。

山のような巨体を誇る黒スーツのその男は、その背に立つ黒髪の美女を守るように怪

人の軍勢を睨みつけた。

「出番よ、フブキ組！」

美女の号令で、何十人もの黒スーツたちが隊列を組み、怪人達に相対する。

フブキも自身の超能力を全開にし、地面から少しばかり浮きながら、淡い緑色の光を纏いながら戦闘態勢に入つた。

「メインデイツシユはあの子に譲るけど、向こうより目立たせてもらうわよ！」

「「はっ！」」

自身の派閥フブキ組総員を動員し、フブキも少女の戦いを守るために尽力する。

時の干渉を抜け出た不死の怪人軍団とヒーローたちの戦いは、少女の周囲を中心に激しさを増していくのだった。

「あうっ……」

小さく悲鳴を上げ、ミライが勢いよく倒れこむ。

体中に小さくも傷を負わされた、今にも泣き出しそうになるも懸命に我慢し、震える体を起こそうと足搔いていた。

「いい加減うざつてえんだよ……何回喰い殺せば黙るんだよクソガキ！ さつさと潰れやがれ!!？」

生意気に自分の剣を躲し続けていた少女に、牙王は理不尽な怒りをぶつけて怒鳴りつける。もはやこの小娘に反抗する力などのことってはいまい。なのになかなか仕留めきれずにいることが腹立たしくて仕方がなかつた。

剣呑な気配を発する牙王の目の前で、ミライは剣を支えに立ち上がり、傷だらけの顔を上げて目を向ける。

「……つぶれ、ない……！」

向けられるその目に、牙王に対する恐怖はない。苦痛の表情が混じっているものの、逃げ出したそうな様子は見受けられない。

決意と覚悟を秘めた、思わぬ力強さを秘めた目を目の当たりにし、牙王の方がわずかに気圧されていた。

「弱かつたり、運が悪かつたり、何も覚えてなくたつても……それは何もしない言い訳にはならない……！」

ぶるぶると震える足で立ち、ミライは再び剣を構える。先ほどまでの押され続けていた情けなさがいつの間にか鳴りを潜めていて、牙王の方が戸惑わされる。

剣と鎧がもたらす力だけではない、自分の胸の奥から湧き上がる何かが、気弱な少女に立ち向かう気力を与え始めていた。

「この時間は……壊させない!!？」

【モモソード】

「やああああ!!」

剣のついたレバーを回すと、並んだ四つの仮面も回転を始める。

その中の一枚、赤い桃のような仮面が頂点に達すると、ミライはそれを力強く叫びながら牙王に向けて横薙ぎに振るつた。

「くっ…！」

【ウラロツド】

受け止めた牙王が、斬撃の思わぬ鋭さに苦悶の声を漏らすと、ミライはさらにレバーを回して仮面を回転させる。

青い亀を模した仮面を頂点にすると、ミライは剣を構えなおし、まるで槍のような鋭い突きを何度も振るつて見せた。

【キンアツクス】

一転し防御に回つた牙王に、ミライは今度は金の字を模した仮面を頂点にして飛び掛かる。

頭上から剣を振り下ろし、斧のような重い一撃をたたき込むと激しい火花が散り、発生した衝撃が牙王を大きく吹き飛ばした。

【リュウガン】

たらを踏んだ牙王に今度は紫色の光弾が命中し、さらにあとずらせる。

剣を銃のように構えたミライは、屋上を駆け回り一定の距離を保ちながら牙王を狙撃する。

牙王はさらに怒りを燃やし、光弾に構わずミライに向かつて突進を開始した。

「ちいっ……うざつてえんだよ！ ザコのくせによお!!？」

苛立ちを込めた渾身の斬撃を振るう牙王だが、それが届く直前にミライは大きく後ろに飛び、足元に伸びたレールの上に着地する。

空中に自在に伸びていくレールの上を滑走し、ミライは徐々にその速度を上げて牙王を見据えた。

『やるやないか！』

『効いてる効いてる！』

『イエーアイ！ ザマーミロ！』

『よっしゃあ！ 一気に決めてやれ、ミライ！』

「う、うん！ ……って、えり!?」

モモタロスたちに促されるままに頷いたミライが、レバーを押した後で目を丸くして

振り向く。

レールを統べるミライの周囲にエネルギーが集まり、列車の形を成し始めた時点での

ミライは狼狽しながら剣に宿っているモモタロスたちを凝視した。

「え？ え？ どうすればいいの！？ 何すればいいの！？」

『何つて必殺技だ必殺技！ あいつらもみんなやつてるだろ！』

『とにかく勢いで思いつきりやつちやえればいいんだよ！』！』

『派手に決めたれや！』

『ほら急いで急いで～！』

『えつと…！ えつと…！？』

そうこうしているうちに、ミライとミライを乗せた光の列車は牙王に向けてまっすぐに突っ込んでいく。

このままではただ激突するだけだと気付き、ミライは慌てて発光する刃を掲げる。そして、眼下のヒーローたちが行っている行為、『技名叫び』を試みた。

「で…電車斬り！？」

『センスねえ！？』

あまりのダサさに叫ぶイマジンたちをよそに、急遽思いついたミライの必殺技が牙王に向けて放たれる。

眩しい光とともに突っ込んでくる光の列車を見上げ、牙王は自身もベルトにパスをかぎし、剣にエネルギーを収束させていった。

「なめんじやねえぞ…」のガキが!!?」

【F u l l c h a r g e】

激昂した牙王の放つた斬撃が、せまりくる光りの列車と激突してすさまじい轟音と閃光が迸る。

衝撃波により、ただでさえ崩壊しかけたビルがさらに軋みを上げ、ガラガラと大量の瓦礫を真下に落下させた。

「やあああああああああ!!」

「おおおおおおおおおお!!?」

吠えるミライと牙王、両者の放つ光は互いに引かず、周囲に破壊をもたらしながらビリビリと大気を振動させる。

闇の空を太陽の様に照らした激突を制したのは、剣を強く振りぬいた牙王の方だった。

「あぐっ…!」

鍔迫り合いに破れた未来は、その場から大きく吹き飛ばされて屋上に叩きつけられる。

その際の衝撃で仮面の剣を手放してしまい、鎧も消えて元のみすぼらしい格好に戻ってしまい、無防備な姿を晒してしまった。

「ご大層な才モチヤを引っ張り出してきやがつて……ゞ苦労なこつたな」

『ミライ！』

『ヤバイよコレ…！』

モモタロスたちは未来を案じて声を上げるが、イメージをし直し再契約した今の彼らでは駆け寄ることもできない。

そんな彼らを、牙王がひよいと持ち上げ嘲笑うように目前に掲げた。

「てめえらも俺の胃の中でおとなしくしてやがれ」

『ち、ちくしょ……ぐあああああ!!?』

馬鹿にするような笑い声とともに、牙王の仮面の口の中にモモタロスたちが吸い込まれていく。

あつという間に彼らの声は聞こえなくなってしまい、ミライと牙王のいる屋上に完全な静寂が訪れる。そして、その場にミライの味方は誰もいなくなってしまった。

「モモ…タロスさん……ウラタロスさん……キンタロスさん……リュウタロスさん……ジークさん…」

自分に全てを託し、力を貸してくれた者達が次々にいなくなり、どうにかもつていた

ミライの心が崩れていく。

果然とうつむくミライの目の前に、見下した様子の牙王が立ちはだかつた。

「頼みの綱のイマジンどもはもういねえ……クソヒーローどももお前のお守りどころじゃねえ。詰んだな、時の守護者」

反応を返すこともできないミライの前で、牙王はゆつくりと剣を掲げていく。
隅に追い詰めた獲物を、じりじりと追い詰めるような醜悪さで、牙王はミライの首を狙う。

どこからか、ハナが叫んでいるような声が聞こえるが、それに応える余力さえ今のミライには残されていなかつた。

「ボクは…………どうして……こんな…………！」

「こいつで本当に終いだ……！　じゃあ、あばよ……クソガキいいいい！！？」

心を折られ、身動き一つできない少女に、牙王の無慈悲な刃が振り下ろされる。

最期を悟り、希望を見失つてしまつた未来は、心の中でモモタロスたちやハナ、ヒーローたちに自分の不甲斐なさを詫びながら、涙の滲んだ瞼を閉じる。

——弱くて、ごめんなさい。

牙王の刃が、細い首をたやすく切断する。

そう、力なくつぶやかれた時だつた。

「おい」

ガンツ!!と鈍い音がして、振り下ろされた刃が止まる。

仮面の下で目を見開いた牙王が、真横から突き出された赤い手袋に目を見開き、すぐさま忌々し気に歪められる。

いつまでたつても痛みが来ない事を訝しんだミライが、顔を上げたその瞬間。「だから……俺のことを忘れてんじゃねーっての！」

白いマントをはためかせ、牙王の前に立ちはだかつた男の背中に、ミライは釘付けになっていた。

二十一撃目 忘れられない記憶

「……よう、大丈夫か？」

目の前でばさりと大きく広がる、真っ白なマント。

黄色いスーツに赤い手袋とブーツ、そして眩しく光り輝く頭。

なかなかに目立つ組み合わせで、一度見れば忘れそうにないほど強烈な強さを持つたその男が、少女の前で盾となり立ちはだかる。

——覚えていたのは、ある傷だらけの背中だけだった。

ボロボロの格好になつたその男の後ろで庇われるミライはしかし、男の後姿にひどい既視感を覚え、同時に全く異なる姿を重ねて見てしまう。

今とは全く比較にならないほど豊かに生えた黒髪に、一般人と変わらない平凡な格好の、彼の姿。

——そこにいた人たちはみんな、自分が助かることばかり考えていて…。

ドジを踏んで転んだ僕を助けようと思う人なんか、一人だつていなかつた。

僕だつて、もう助かりっこないって諦めて。何もかもを投げ出そうとしていた。

片つ端から奪い取られ、網目のように穴だらけになつていていた自身の記憶。かすかに残つたその一部、か細く残つたその残滓が再生され、ミライの脳裏に走馬灯のように流れる。

それを見ているうちに、ミライの瞳に輝きが灯り始めた。

「邪魔だつて言つてんだろ……」のハゲがあ!!?」

獲物を狩る邪魔をされたことに怒り狂う牙王が、立ちはだかるヒーローに向けて高密度のエネルギーを纏つた刃を振り下ろす。

放たれた斬撃は地面をえぐるが、ヒーロー本人に一切の傷を刻むことなく、衣服のみを切り裂くのみだつた。

——でも、一人だけ。

たつた一人だけ、そんな未来をぶつ壊してくれた人がいた。

ミライの視界にノイズが走り、記憶の中の彼と目の前にいるヒーローの姿が混じり合ひ、一つになつていく。

そして、ミライの中の記憶の穴が、瞬く間に埋め尽くされ始めた。

——どれだけ恐ろしい敵がいたつて、どれだけ傷ついたつて一步も逃げない。

そんな強い人がたつた一人だけ、僕の前に現れてくれた。

薄っぺらい、誰かのためつていう偽善のためでも、称えられるためでもない。

自分が自分であるためだけに、その人は僕に背中を向けたまま、一步も動こうとはしなかつた。

それは疑いようもない、本当のヒーローの姿だつた。

僕がなりたかつた、目指したかつた未来の僕だつた。

弱く、惨めで、泣いてばかりだつたかつての自分。

運もなく、毎日のように襲い掛かる不運や悲しみに縮こまるだけだつた自分が抱いた、変わりたいという願い。そのきっかけを与えてくれた彼の姿が、ミライの失われた記憶を次々に蘇らせていく。

戦士として見出された時、後の仲間達との出会い、時に激しくぶつかつた戦友との遭遇、そして、数々の困難を乗り越え続けた想い出。

その全てが、ミライという少女を作り上げてきた全てが、取り戻されていく。
——その出会いがあつたから、僕は立ち上がつた。

差し出された手を掴んで、自分の力で立ち上がることができた。

そして無意識のうちに、僕はあの人の後を追いかけていた。

躓いても転んでも、一度だつて立ち止まらずに歩き続けることができた。

それが全ての始まり、僕の原点。

だから僕は、ここにいる。

自分という存在そのものを奪われ、弱かつたころに引き戻されても、決して忘れることがなかつた大きな背中。

その姿を映すミライの瞳が、星のように強く輝かしい光を宿した。

「今度こそ……死ね！」

スーツをズタズタにされながら、決してその場から動くまいと鋼の意志を見せつける邪魔なヒーローに、牙王は焦れた様子で舌打ちし手のひらを向ける。

今牙王を止める者はいない。牙王の怒りを買い、標的となつたサイタマが、今度こそ歴史から消し去られ用としたその時だった。

がしりと、邪悪な力を宿した牙王の腕が、華奢な手に掴み取られた。

「……！」

またしても、邪魔者を排除する邪魔をされた牙王が、うつとうしそうに自分の腕を掴む少女を睨みつける。

だが、少女の顔がゆっくりと上げられ、スッと瞳を向けられた途端、牙王の背中を得体の知れない悪寒が走り抜けた。

「……返せ」

息を呑む牙王に向けて、ミライは短く告げる。

その声はこれまでの様な、弱々しく不安氣で搔き消えそうなものではない、固く強い

意志を秘めた鋭いもの。

多くの人と時間を救つてきた、歴戦の戦士のみが持ちうる霸気を纏つた声だった。

「返せ、それは僕の道標だ!!?」

「ぐつ…ぐおおおお!!」

ミライが牙王に向けて吠えた瞬間、牙王は自分の胸をかきむしるようにし、苦悶の声を漏らし始める。

牙王の胸の内側に五色の光が灯り、外へ飛び出そうと暴れるように点滅を繰り返す。見覚えのあるその光をミライは凝視し、牙王の腕をグイッと引っ張りもう片方の手を伸ばす。

直後、光は勢い良く牙王の中から飛び出し、ミライの胸の中へ吸い込まれるように消え、衝撃が迸つた。

「うお…何じゃありや」

ミライが発した衝撃に押され、仰向けに転んだサイタマが目を丸くしながら、今度は自分を庇うようにして立っているミライを凝視する。

思わず目を瞬かせてしまうほど、サイタマは驚きをあらわにしてミライを見つめてしまう。それほどまでの劇的な変化が、彼女に起こっていた。

「がはつ…な、何だ…!!?」

「……へつ」

解放され膝をついた牙王は、自身に起こった以上に驚愕し、それを起こしたであろうミライを腹立たしげに睨みつける。

しかし当のミライは牙王に背を向けたまま、小馬鹿にしたような笑みを口元に浮かべて仁王立ちする。いつの間にか髪を両サイドで束ね、逆立つた前髪に赤いメッシュを流した少女は、くるりと振り返り自分を親指で指さしてみせた。

「俺、さんじょ……わーいわーい！ ミライが復活した！ やつたー！」

不敵な笑みを浮かべたまま、まるで歌舞伎役者のような派手なポーズを決めようとしたミライ、いや、ミライに乗り移ったモモタロス。

だがその途中でいきなり紫の光が入れ替わり、ミライの格好と表情が一変する。じやらじやらと過剰にストラップをつけたカジユアルな格好とキヤップに、ウエーブのかかつた紫のメッシュを持つ無邪気な雰囲気へ変貌したのだ。

「ちよつとりュウタ、はしやぎすぎだよ！ いかにも決戦な雰囲気だつたのに台無しじやないの……ええやないか喜ぶくらい！ 俺はもうどうなることかと心配で心配で……うるせえ！ お前ら人の名乗りの途中で邪魔すんじやねえよ!!？ ……全く、相変わらず騒がしい連中だな……手羽野郎！ 何お前まで入ってきてんだよ!!？」

変化はそれだけでは終わらず、青や黄色や白と次々に光が走り、コロコロとミライの

格好も一変していく。

眼鏡とレディーススースを着たクールな青メッシュになつたかと思えば、次の瞬間には着物を纏つた黄色メッシュの涙もろいポニーテール、そして次には豪奢なドレス姿の高飛車白メッシュと、別人のように外見が変化していく。

最後に変化した赤メッシュ勝気ツインテールが怒鳴りつけると、そこでようやく牙王が再起動を果たし、信じられないといった様子で声を上げた。

「てめえら……なんで……？」

「ああ？　へへへへ……わかんねえのか？　ミライが自分で、てめえが奪つたものを取

り戻したからに決まつてんだろ！」

「だからそれがありえねえつづつてんだろうが!!？」

自身の理解が追いつかない事態が気に入らないのか、牙王は平静さを完全に失いながら吠える。

自分の計画の最も大きな障害であつた分岐点、彼女から力の全てを奪い、自分の者にしたはずだつた。だが今日の前で、この少女はそれを自らの力で奪い返してみせた。それがどうしても理解できなかつた。

「そのガキは戦いの記憶全部を俺に奪われて、ただの腰抜けの抜け殻になつてただろうが……なのになんで……なんで立ち向かってきやがるんだよ!!？　何で折れねえん

だよ!!？俺は牙王！お前らを食う最強最悪の存在だぞ!!？』

「知るかよ、そんなこと」

激昂する牙王に向けて、憑依されたミライこと、Mミライは面倒くさそうに吐き捨て、じろりと敵の親玉を睨みつける。

長々と語る気も、答え合わせをしてやるつもりはない。この男は自分の大事な仲間を傷つけ、彼女が守ってきた全てを滅茶苦茶にしようとしたムカつく相手なのだ、許す道理は彼らには一切なかつた。

「細けえことは俺にだつてよくわからねえ。だがたつた一つだけ言えることがある……それは」

またしてもやりと笑つたMミライは、牙王に向けてビシッと指を突き付け、真正面から挑発する。

牙王が怒りのボルテージを急上昇させていくのをひしひしと感じながら、そんな悔しそうな顔を見られたことに満足感を抱き、Mミライはフンッと鼻息を荒くした。

「てめえが馬鹿笑いできる時間はもう終わりで、こつからは俺たちのクライマックスだつてことだ!!？」

言いたかつたことを全て言い切ると、Mミライは一度赤い光とともに引っ込む。

本来の自分の姿に戻ると、ミライはベルトを片手で掲げ、自分の胸にもう片方の手で

触れる。そこに宿っている五人の仲間の存在を噛みしめるように、目を閉じて笑みを浮かべた。

「……もうあんたには、何も渡さない。平和も、命も、未来も、全部返してもらう!!?」
ヒュンツ、とベルトを振るい、ミライは自分の腰に巻き付ける。

牙王はその余裕綽々と言つた態度にさらなる苛立ちを覚え、仮面の下でギリギリと引き歯を食いしばる。

たかが女のガキ一人、簡単に始末できてしまえるはずだつたのに、簡単に世界の時間をすべて破壊できるはずだつたのに、その尽く妨げられた。その事実が牙王の怒りを膨張させ、理性の鎖を引きちぎらせた。

「クソ……ガキがああああ!!?」

癪癩を起した子供のように、牙王は剣を振り回して怒号を撒き散らす。手ごろにある瓦礫を片つ端から粉碎し、親の仇でも見るようミライを、ミライたちを睨みつける。

そんな牙王に、ミライはわずかにも表情を変えず、凛とした態度で相対した。
その手に、新たな赤い携帯電話のような道具を持つて。

「さて……じゃあ、そろそろ反撃といこうか?」

【モモ・ウラ・キン・リユウ】

『いいねえ!』『よつしやいくでえ!』『てんこもりだー!』『存分に見させてくれよう!』

ミライの指が、並んだ四つのボタンを押していく。そして、電話の横に着いたボタンを押した途端、軽快な音楽が鳴り響き、ミライの全身を光の欠片が覆い、黒いスースと赤い鎧を纏わせた。

ミライはさらに、携帯電話の画面部分をベルトの中心に取り付け、ボタン部分を押し込み、画面部分の上部分から二本の角を生やさせた。

【C l i m a x f o r m】

ベルトが声を響かせると、ミライの周囲に四つの仮面が出現し、肩と胸、背中に順番に回転しながら装着されていく。

最後にミライの後頭部から桃の形の仮面が線路を走るように現れ、展開して髪留めとなる。おまけに表面部分が浮き上がり、皮がむけるようにスライドされる。

ものの数秒で、ミライは五つの仮面を全身に纏う、奇天烈な格好の戦士へと変身を遂げてみせた。

「うわ、派手」

あまりにカラフルなミライの格好に、サイタマは若干笑いをこらえるように感想をこぼす。頭には二つに分かれた桃、胸には竜の顔、右肩には亀の甲羅、左肩には金の字、背中には翼を模した仮面が貼りついた鎧など目立ちすぎて仕方がなかつた。

「俺達、参上!!?」

ミライたちはそれに構わず、獣のような咆哮を上げる牙王に不敵な笑みを浮かべ、もう一度自分を指さし、お決まりのポーズを取つてみせる。

その声に応じるように、五つの仮面がカツと眩しい光を放ち、牙王に挑戦の意志を示した。

「さんざんやつてくれやがつた分……まとめて返してやるぜ！」

雄々しく吠えたミライは、腰に備わった四つのパーツを組み合わせ、十字の形に組み合わせていく。

その先端からは赤い刀身が伸び、電流をまといながら刀を輝かせた。

「いくぜいくぜいくぜえええ!!?」

雄叫びとともに、剣を手にしたミライは翼を翻し、最強最悪の敵に挑みかかっていつた。

二十二撃目 ヒーローの意地

「デネブ！」

「ほいきた!!」

ユウトの指示で、デネブは銃口となつてゐる自分の手を、ユウトの両肩に交差させながら置く。

鋼鉄の腕は新たな鎧としてユウトに備わり、デネブの身体が漆黒の布に変化する。同時にユウトの胸にデネブの顔の形をした鎧が現れ、より重厚な形状へと変わつた。

〔Vega ベガ form フォーム〕

最後に牛の形状の仮面が後頭部に引っ込み、かわりに小型のドリルが現れ、花弁のように展開して新たな仮面へと変わつた。

「最初に言つておく！ 胸の顔は飾りだあ!!」

(余計なことは言わなくていいんだつつの!!)

憑依したデネブが、ノリノリでよくわからない紹介をするが、ユウトが中からそれを叱る。

苦笑しながら頭をかいたデネブは、組み合わせたサーベルを振りかざし、目前にいる

怪人・やせ細りモヤシに向かつて颯爽と駆け出した。

「ひいいい！　こないでください…！」

「その手は食わないよ!!」

泣き叫びながら、虎視眈々と相手が油断するところを待つていたやせ細りモヤシの演技を、デネブは一発で見破りサーベルを振るう。

優しい彼であつても、何人ものプロヒーローたちを卑劣な手段で屠つてきたことを許すつもりは、さらさらなかつた。

「ちつ、ちくしょう！　どうせお前なんか、僕の足元にも及ばないんだあ!!」

ふいうちは無意味だと悟り、やせ細りモヤシは両手から強烈な冷気を滅茶苦茶に放つて、ユウトとデネブを狙う。

僅かに触れても凍結させられないそれを、デネブは両肩の銃器で爆破することでの応戦していた。

「ミライちゃんが頑張つてるのに、俺たちがサボるわけにはいかないからね！」

（さつさと決めるぞ、デネブ！）

「おう！」

バキバキと、周囲が極地のように氷で覆い尽くされていく中を、デネブがサーベルを振りかざし、標的に向かつて踊りかかつていった。

ズシン、と地響きのような衝撃を周囲にもたらし、二人の豪傑の拳が互いの体に炸裂する。

片や緑色の半魚人、もう片方は全裸の巨漢という組み合わせの二人は、すでに數十人の間勢いを衰えさせないまま戦い続けていた。

「ぐふうつ…!!」

「きひやつ…!!」

鋼鉄をもじのぐ硬度の拳がそれぞれに決まり、深海王とぶりぶりプリズナー両方の顔面が痛々しく陥没する。

苦悶の声を漏らすぶりぶりプリズナーとは反対に、深海王の声には喜色が混じつていた。

「効いたわあ…♪ 前よりちよつとだけね」

「効くなあ…やはり」

二人とも、戦闘狂というわけではない。ぶりぶりプリズナーは単純な正義感により、深海王は己よりも下等な生物を踏み潰すことへの快感により、己が全力を振るうことによる無類の喜びを見出している。

しかし深海王は、他のヒーローよりもはるかに続いた戦いにいやや不満げな様子を見

せていた。

「でもね、やっぱり期待外れよね。完膚なきまでに潰してあげたのに、またのこのこ殺されに出てくるなんて…殴られ過ぎておかしくなつちやつたのかしら？」

「……お前にはわかるまいよ」

ギリツ、と握りしめられた拳が軋みを上げる。ぷりぷりプリズナーの胸中に蘇る、かつて完膚なきまでに敗北した屈辱の記憶が、彼に沸々と力を与える。

負けたことが悔しいだけではない、無様を晒したことが悔しいのでもない、ヒーローとしての本分を全うできなかつたことが悔しくて仕方がないのだ。

「確かに俺は、お前に完全な敗北を喫した。だがな：おれの愛はそれで折れるほど脆くはない」

「……はあ？」

「おれは負けた……そして愛するべき、守るべき男子たちを危険にさらしてしまった。この屈辱は今もなお俺の胸に深く突き刺さり……」

血がにじむほどに力が込められた拳をぶるぶると掲げ、大切な男子たち（一方的な感情）の顔を思い浮かべる。

もう決して曇らせてはならない、決して奪わせてはないと自身の心に再度叫び、ボゴンツと筋肉の鎧をさらに膨張させた。

「おれの再戦の意志を燃え上がらせているのだ…!!」

カツ！と見開かれたふりふりプリズナーの目が、己が今越えなければならぬ壁を見据えて、強い光を宿す。

その背から、光を呑み込む漆黒の翼を羽ばたかせ、ふりふりプリズナーはさらなる自身の愛の進化のために、力強く飛翔した。

「お前はここで、俺のこの手で倒す!!」

「意味が分からぬのよ……やつぱり下等な生物はいやね」

凄まじい霸気を纏い、頭上から迫るふりふりプリズナーに、深海王は呆れた様子でため息をつき、やがてにんまりと笑みを浮かべた。

もう少しこのおもちゃで遊んでやろう、そんな残酷な考えを抱いて、深海の異形は巨大な拳を振りかぶる。

「おおおおおおおおおおおお!!」

「あはははははははははは!!」

雄々しい咆哮と狂気に満ちた笑い声。

わかりやすい善と悪の意思を抱き、豪傑たちは再び拳撃の応酬を繰り広げるのだつた。

「うおおおおお!!」

瓦礫が飛び散り、障害物が散乱する道を、正義の自転車乗りが爆走する。

本気の状態である立ち漕ぎモードに移行した無免ライダーは、必死の雄叫びを上げながら後ろに振り向き、自身を追いかけてくる異形たちの集団を見やつた。

「待ちやがれクソザコガ!!」

「チツ……！ 何で自転車なのにあんな速いんだよ!!」

人外の脚力で追いかけてくる異形たちだつたが、日夜愛用の自転車で疾走し続ける無免ライダーの速度には敵わず、一定の距離を保つたままになつていてる。

無免ライダーのそばに民間人やほかのC級ヒーローたちの姿はなく、怪人達は彼のみを追いつけていた。

(これでいい……！ 少しでも、少しでも俺が時間を稼げれば……!!)

戦闘能力のない彼が決死の覚悟で選択した、自身が囚となる方法。

怪人側の戦力を一部でも割き、咥えて民間人への注意を反らす彼の目論見は、途中まではうまくいっていた。

慣れない道に入つてしまい、前方と左右を壁で塞がれた空間に入つてしまうまでは。

「！ しまった……行き止まりか!!」

急ぎ方向転換しようと停止した無免ライダーだつたが、振り向いた時にはすでに、背

後に迫っていた怪人達が待ち構えていた。

冷や汗を流して硬直する無免ライダーに、怪人達は苛立ちを抱いたまま、嗜虐的な笑みを浮かべて近づいていった。

「手間かけさせやがって……だが、もう終いだ……!!」
「……やるしか、ないのか……!!」

迫りくる、凶悪な形相の怪人達を前に、無免ライダーは自転車の上で構える。
勝てるとは最初から思ってはいない、ただ、何もせずあきらめるという選択だけは、彼は取りたくなかつた。

ズン、ズン、と凄まじい地響きが鳴り、超大型の巨人が街を彷徨う。

何十何百もの怪人達が足元で暴れていることなど気にかけず、自身の片割れだけを探しながら、巨人は歩き続けていた。

「兄さん……どうしてどこにもいらないんだ……もう一度、もう一度俺達兄弟の夢をかなえよう……俺が最強の身体を、兄さんが最高の頭脳を使つて……世界を支配するんだ……そうだろう……!!」

体だけしか取り柄がなかつた馬鹿な自分のために、最強になれる薬を作つてくれた兄。二人で世界を手にしようと誓い合つた兄。

自分で手にかけてしまった兄を探しながら、巨人は滂沱の涙を流して泣きわめき続けていた。

「兄さああああん!!」

雷鳴のような咆哮があたりに響き渡り、衝撃でビルの窓ガラスがまとめて叩き割られていく。

誰にも止められないと思われていた巨人の進撃は、ふいに巨人が膝を折ったことで止められる。ズシン、と巨人に膝をつかせ、アスファルトに巨大なクレーターを作らせた張本人は、黒く輝く肉体を見せつけるように見事な着地をしてみせた。

「……団体はデカくとも、人体の弱点はそのままらしいな」

巨人の膝裏に渾身の体当たりを食らわせた、俗にいう膝カツクンを行つた超合金クロビカリは、逆にいえばそれ以外では普通のヒーローでは歯も立たないという事実に眉間にしわを寄せる。

自分が程の強者がいなければ、この超巨大怪人には抗う事もできないのかと。

「だがこれしきの事で倒れるなど、鍛え方が足りないぞ!! せつかくの筋肉が泣いている!!」

ビシッと指を突き付け、たつた一撃で倒れかけた事への忠告を行うクロビカリ。

超巨大巨人はビルを押し潰しながら腕を立て、ゆっくりとその巨体を起き上がらせて

いく。伏せられた目がクロビカリの姿を映し、ギラリと鋭い光を放つた。

「邪魔を…するなああああ!!」

巨人が吠えた直後、クロビカリの姿が一瞬で消える。かと思えば、振り上げられた巨人の腕と吹き飛ばされたクロビカリが、ほぼ同時にビルの壁に激突し轟音を響かせた。ガラガラと崩れていくビルの中を、クロビカリは自慢の筋肉の鎧で防ぎながら抜け出し、ゆっくりと立ち上がっていく巨人を見上げた。

「いいパワーだ……だが!! その程度で、おれのこの肉体には傷一つつきはしないぞ!! ムキッ! とクロビカリの鋼の肉体がボーズを取り、体に着いた埃や砂塵を吹き飛ばす。

ただの力まかせ、しかしそれだけでも無視できないほどさまじい威力をその身に受けても、クロビカリの闘志に衰えは見られなかつた。

異なる場所では、流星のごとき速さで刃が駆け抜け、二体の鬼を翻弄する。

全身に無数の傷跡を刻まれた金と銀の鬼の兄弟は、それぞれが持つ武器で迎撃しようと試みるが、ビルの壁を足場に駆け回る剣士を目に捉える事さえできていない。「あ…兄者!! こいつ…さつきより速くなつてねえか!!」

「ひ、怯むな!! どうせ傷ひとつつけられやしねえ!!」

ミミヒコが泣き言をこぼすと、すかさずクチヒコがそれを諫めて鼓舞する。

いかに素早く鋭い剣術を見せられようと、肝心の刃は自分たちの分厚く硬い鎧に阻まれて、僅かな傷さえつけられていない。

決して自分たちを屠ることはできないのだと、クチヒコは完全に油断していた。

「浅はかだな」

閃光のフラッシュがそう呟き、加速を繰り返した身体で二人の鬼の間を駆け抜ける。移動による強烈な風が吹き抜けたと思った直後、金と銀の鬼の鎧にピシリと亀裂が走り、鬼たちの身体から鮮血が噴き出した。

「ぐふつ……!!」

「お前達とじやれ合うのもさすがに飽きた……けりをつけるとしよう」

一度立ち止まつたフラッシュが、膝をつく鬼の兄弟に向かつて低く身構える。

ちやきつと音を立てる彼の剣が、幾度も風を「斬つた」ことでかつてない程に研ぎ澄まされ、危険な輝きを放っていた。

その真上では、青い炎が噴火の様に荒れ狂い、空中に浮かぶ超能力者を焼き焦がそようと猛つている。

緑色の光を纏い、空中を自在に飛び回り回避し続けるタツマキを、幽汽が執拗に狙い続けていた。

「俺の邪魔をするな…小娘が!!」

幽汽が剣を振るい、青い炎がタツマキを取り囲むように膨れ上がる。服の端は焦がされ、肌にも何か所も火傷を負わされたタツマキには防ぐこともできず、避けきれそうにもない。炎の包囲網はもはや逃げ場はなく、小柄な女性はあわや焼き尽くされそうになる。

そう思われた瞬間、彼女に食らいつこうとした炎は、蠟燭の火を吹き消すようにまとめて搔き消されてしまった。

「何…!?」

「……やつとコツがつかめてきたわ。そういう攻撃もあるってわかつたから、儲けものとでも考えておこうかしらね」

信じられないといった様子で、仮面の下の両目を見開く幽汽に、タツマキは小馬鹿にするよう得意げな笑みを見せつける。

ただ逃げ回っていたわけではない。自分が対応できない敵の攻撃など決して認めないと、回避の最中にずっと攻略法を探し続けていたのだと、嗜虐的な笑顔は悠然と語つていた。

「じゃあ、もう終わりでいいわね」

果然と立ち尽くす亡靈に向けて、タツマキの纏うただでさえ強力な超能力の光が、さ

らなる凶悪な光を放つた。

「理解不能……反応速度が上昇している……！」

無数の銃弾を発射しながら、G電王は目の前に立ちはだかる黒い機械の戦士を凝視する。

何十分も戦闘を繰り広げ、黒騎士の戦闘能力の全てを把握したつもりになつていた彼は、理解の追いつかない状況に困惑に似た反応を示していた。

「敵の行動パターンを理解し、対策を打ち出す頭脳の高さは見上げたものだが、それだけで俺に勝てると驕つたのが敗因だつたな」

無数の部品から構成される、黒騎士が操る『盾』がG電王の放つ銃弾の近くを防ぎ、徐々に接近していく。

赤く光る眼で敵を射抜いたまま、黒騎士はどこか嘲笑うように、変幻自在の専用武器を蠢かしてみせた。

「俺の戦略が、そろそろ攻略できるわけがないだろう」

空中に浮かぶ超巨大戦艦が、上空を旋回する鋼鉄の騎士に向けて大砲を発射する。ロケットエンジンを全開に蒸かすメタルナイトは、モニターに表示される数値を目に

すると、生身の方の眉を寄せて舌打ちをこぼした。

『……えねるぎー残量モ心モトナイナ。中途半端ダガ、一時撤退シテオクカ』

未知の技術の確保、同時にヒーローとしての職務の遂行、自分勝手ながらそれだけを理由に戦闘を続けてきたが、やがて対抗手段が尽きることを悟つて一旦この場を離れようと試みる。

だがその時、彼の横をすさまじい速度で通り過ぎるカラフルな列車の姿に気づき、咄嗟にカメラのレンズを向けていた。

『：何ダ？』

メタルナイトを追い越して上空を走る列車、デンライナーと連結したゼロライナーが、汽笛を鳴らして戦艦の上を舞う。

それを操る、コツクピットのバイクにまたがつたキングは、引き攣った表情を隠すこともできないまま恐る恐る後ろを振り返つた。

「ねえ…これやつぱり無理があるんじやないの：？俺マジで免許持つてないんだけど

！』

なぜこんな目に遭っているのかと世の不条理を嘆きながら、振り向いた先でくつろいでいるオーナーに向けてキングは叫ぶ。

限界を迎つつあるキングに、オーナーは悪びれる様子もなく口を開いた。

「仕方がありません。お二人には怪人達の排除をお願いしていますから。あの巨大戦艦を撃墜するには、デンライナーとゼロライナーの火力が欠かせません」

「でも何でその役目を俺が!..」

「ゲームがお好きだと聞いていますし、こういうものの操縦は得意かと」

「いや俺はこういうゲーセンのゲームじゃなくて家庭用ゲームが得意なだけで…それにしたつて何で俺が!..」

生身で怪人に立ち向かわされないだけまだが、眼下に見える巨大戦艦の相手など同じくらい危険なのではないだろうか。

キングエンジンを盛大に鳴り響かせ、真っ青な顔でハンドルを握りしめるキングに、オーナーは意味深な笑みを浮かべてみせた。

「頼めるのは現状、あなた以外にはいませんからねえ……それに、こういうのはヒーローの役目でしょう?..」

「あんたホントは俺が弱いの知ってるだろ!.. 鬼か!..」

みつともなく泣き喚きそうになるのを必死にこらえ、キングはとんでもない無茶ぶりを吹つかけてくるオーナーに抗議の声を上げる。

しかしそれを、敵は待ってくれない。射程範囲内に近づいてきた列車に向けて、巨大戦艦の砲門の全ての照準が合わされ、大量の爆発が空中で起こった。

「うわあああああ来たあああああ!!」

恐怖で変に力が入ったキングの腕が、バイクのハンドルを押してゼロライナーの進行方向を変える。

奇跡的に、方向を変えられたゼロライナーは爆発の間を潜り抜け、巨大戦艦の猛襲からの回避を成功させる。その後も謎の偶然が重なり、キングの操縦は戦艦の爆撃を躱し続けた。

「ぬおおおおおおお!!?」

最早悲鳴なのか雄叫びなのかもわからない、涙目で無茶苦茶にバイクを操る彼は、備えられていたボタンにうつかり触ってしまう。

すると、ゼロライナーとデンライナーがそれぞれで変形し、ドリルや大砲や、ミサイルなどを展開し、戦艦に向けて一斉に発射し装甲を片つ端から破壊し始めた。

『…!! ナントイウ火力……撤退ハヤメダ。残量ぎりぎりマデ戦闘ヲ続行シ、さんぶるノ採取ヲ試ミルトシヨウ』

戦艦が端から爆破されていく光景に、メタルナイトはやや離れた位置から感嘆の声を上げる。

一方、その火力を見せつけた当人であるキングは最早悲鳴さえ上げられず、いまだ雨あられと襲い掛かる爆撃を躱し続けることに夢中になっていた。

「やればできるではないですか。このまま思う存分暴れて下さい」

「弁護士を呼んでくれえ!!　俺への扱いがひどすぎる!!」

人の恐怖心も知らず、のんきにまた無茶ぶりをしてくるオーナーに殺意さえ抱きながら、キングはハンドルを握り続けた。

二十三撃目 彼こそが眞の英雄

水色に美しく輝く翼が羽ばたき、少女の体を天へと誘う。

無数の光の粒子を撒き散らしながら飛び立つた少女は、赤い刀身の剣を振りかざし、最凶の敵に向けて刃を振り下ろした。

「うおりやああああ!!」

凛々しい外見からは想像もつかない粗野な掛け声とともに、渾身の力で振るわれた剣が牙王の剣とかち合う。

激しい火花が散り、牙王の足元がクレーターのように陥没し、辺りに衝撃波が発生する。牙王はそれに舌打ちし、鬱陶しそうに力尽くで払いのけた。

「ちつ…来い！」

何もない空間に向けて、牙王が苛立たし気に吠える。

その直後、突然何もなかつた空間に禍々しい揺らぎが発生し、その中心から一本のオレンジ色の列車が顔を覗かせ、凄まじい咆哮を上げてみせた。

ワニの顔を模したような、刺々しい外観のそれはデンライナーと同じように空中を行し、牙王の真下に向かつってきた。

「逃がさねえぞクソガキい!!?」

牙王はその列車、ガオウライナーの上に飛び乗り、空中を舞うMミライを追いかけて剣を振りかざす。

猛スピードで迫つてくる、龍にも見える列車に瞠目していたMミライだが、すぐさま表情を改めて剣を構えなおした。

「でやああ!!?」

「ガアアアアア!!?」

ガオウライナーの上で、ミライと牙王の剣が互いにしのぎを削り合う。

高速で走り続ける列車の上という不安定な足場でぶつかり合う二人、その攻防はわずかにMミライが押していく、牙王は仮面の下で腹立たし気に顔を歪めていた。

「くっ…!!　ちくしょうが!!　何だつてそこまで必死になつてんだ!!　馬鹿みてえに俺の邪魔をしやがつて…!!　てめエらだつて時間をブツ壊すために来た連中だつてのによ!!」

「うるせえ!!」

八つ当たりのように振るわれた剣を、Mミライも鬱陶しそうに払う。

怒号とともに放たれた薙ぎの威力はすさまじく、牙王の身体が衝撃によつて大きく吹き飛ばされる。咄嗟に防御した牙王だったが、腕に残る痺れの為かすぐさま応戦する事

ができなかつた。

「僕らだつて、世界を守るとか人の為とか、そういう高尚なもののために戦つてるわけじやないんだよ!!」

剣が組み直され、長い槍となつて牙王に襲い掛かる。

素早く、正確に振るわれる激流のような刺突に翻弄され、牙王は徐々に押し出され、体勢を大きく崩されていく。

「一人の女が戦つとつた！　たつた一人で頑張つとつた！　そんな姿見とつたら、手え貸してやりたなつとつたんや!!」

槍は今度は斧に組み合わされ、分厚く頑丈な刃が牙王の剣を弾く。

四股を踏むように力強く、雄々しく踏みしめられた両足が生み出す体重の乗つた一撃が、牙王の両腕を勝ちあげて体勢を崩す。

がら空きになつた胴を、ミライの紫に輝く目が射抜いた。

「お仕事じやなくて、かつこつけでもなくつて！　自分がやりたいことを一生懸命にやつてたから！　ぼくたちも一緒にここまで來た!!」

組まれた銃が火を噴き、牙王の両腕に炸裂して小さな爆発を起こす。装甲の表面を削る威力のそれは、牙王の手から剣をもぎ取り、牙王の手の届かない遠くへと弾き飛ばしてしまつた。

表情を変える牙王に向かつて、鎌とハンドアツクスを構えたミライが肉薄していくた。

「その気高き心が貴様にわかるか…？　何度倒れようと転ぼうとも、前に向かつて真つすぐに歩き続ける美しき魂が!!」

優雅に、洗練された無駄のない動きで振るわれる刃が、牙王の鎧に夥しい数の傷を刻み、火花を散らせる。

全身に食らいつく刃と、それによる痛みで牙王は見る見るうちに勢いを失くし、憎悪に満ちた苦悶の声とともによろよろと後ずさっていく。

「その理由が……ヒーローになりてえつてガキみたいな理由だぜ」

血を吐く牙王に向けて、再び組み合わせた剣で斬りかかるMミライが、にやりと笑みを見せながら呟く。

かつて少女から聞いた思いを馬鹿にするわけではない、呆れるわけでもない。それを誰よりも誇らしく思い、その目は牙王に向けて自慢げに語っていた。

「最高にかっこいいじゃねエか!!」

牙王は、剣を肩に担ぎにやりと不敵に笑うMミライを前に言葉を失くす。

この少女の姿を借りた怪人が語る、誇らしげな言葉の全てが理解できず、ただ圧倒され慄くほかになかった。

「イカレてやがる…!! そんな本当にガキみてえな願いのために、お前らは一緒になつて戦つってきたつてのか!!」

「そう言つてんじやねえかよ!!」

小馬鹿にするようにフツと鼻で笑い、Mミライが目を伏せる。

そして、再び顔を上げ、キツと射殺さんばかりに鋭い視線を向け、牙王を睨みつける。その目に浮かぶ明らかな怒りの炎に、牙王はまたしても気圧された。

「俺達の戦いの歴史を…てめえみたいなクソ野郎が語るんじやねえ!!」

Mミライの振りかぶった剣が、牙王に向かつて全力で振るわれる。

武器を失くした牙王は咄嗟に両腕を盾にしようとすると、渾身の力で振り下ろされた斬撃はたやすくそれを弾き、牙王をガオウライナーの上からたたき落とした。

「うおりやああああああ!!」

「ぐあああああ!!」

上空から落下するMミライと牙王はもつれあいながら、ビルの屋上に墜落して土煙を立たせる。

ゴロゴロと転がり、うめき声を漏らす牙王を見降ろし、翼を羽ばたかせて降り立つたMミライはまたにやりと笑みを見せた。

「さて、そろそろ終わらせようぜ。ミライ」

(うん…！　こいつを倒そう、みんなで!!)

不敵な笑みのまま、Mミライはバスを取り出し、ベルトの中心にかざす。するとベルトは、ミライに宿る五体の怪人を象徴する、様々な色に輝き始めた。

[Fu11 charge]

バチバチとMミライの剣が帶電し、刀身が七色の光を放ち始める。

同時に背中に広がる翼も光を放ち、曇天の空の下で眩しい輝きを示したかと思うと、突然無数の羽根に分裂し、どこかへと飛び立つていった。

解き放たれたいくつもの羽根は、自ら意思を持つ様に天を舞い、それぞれ別の場所を目指していく。その先には、今もなお戦い続けるヒーローたちの姿があった。

そして無数の羽根は、懸命に戦うヒーローたちの体に宿り、それぞれで異なる色に染まつていった。

焼却砲!!

ジエノスの放つた業火の砲撃により、橙の爆発が発生する。

その場に集まる無数の怪人達を根こそぎ呑み込み、跡形もなく焼き尽くしてしまった。

流水岩碎拳

バングの流れる水の動きが、薄い青の輝きと共に黒い鬼のような怪人を容赦なく叩きのめし、肉体を破壊していく。

地獄嵐!!?

フブキの全力のサイコキネシス、深緑の念力の竜巻が何十体ものモグラの怪人達をまとめて覆い、その身を片つ端からこま切れにしていく。

アトミック斬!!?

アトミック侍の目にもとまらぬ斬撃が、紅の光を伴つて放たれ、巨大な蝙蝠の姿をした怪人を一瞬で両断し肉塊に変えていく。

「戦術変形『銀』」

片腕に輝く銀の刃を備えた駆動騎士が、G電王に超速の斬撃を食らわせ、抵抗も一切許さないまま切り裂く。

超合金キヤノン!!

鍛え上げた脚力により跳び上がり、両拳を固めたクロビカリの焦茶が、天空から超巨大怪人の脳天に叩き落とされる。

閃光斬

長い金髪を靡かせたフラツシュの黄の剣技が、鬼の兄弟の間を瞬時に通り過ぎ、彼らをバラバラに切り刻む。

気合い怒羅巖シバキ!!

血まみれで歯を食いしばった金属バットが、朱の光を纏つたバットで巨大なサイの怪

人をタコ殴りにし、その装甲を叩き割つていく。

タンクトップタツクル!!

タンクトップマスターの全力の突撃が、紺の光とともに龍の怪人のどてっぱらに激突し、その体を爆発四散させる。

ダーク☆エンジェル☆ラツシユ!!

ぶりぶりプリズナーの放つた、黒い光を纏つた拳の連撃が、深海王の全身に深々とめり込み、その顔を驚愕に歪めさせながら叩きのめす。

ジャステイスクラッシュ!!

がむしやらに振るわれた無免ライダーの自転車が、栗色の光を纏つて怪人達に炸裂し、その体を一撃で両断させる。

[Full charge]

ユウトの構えたボウガンが、緑の閃光を放つて放たれ、やせ細りモヤシの顔面に突き刺さる。そしてその醜悪な顔を、恐怖で染め上げながら粉々に破裂させる。

「うおおおおおおおおおおおおおお!!」

キングが操るゼロライナーのドリルが、黄金の光とともに天を裂き、巨大戦艦の全体に無数の穴をぶち開けていく。

あらゆる場所で敵に挑むヒーローたちのもとに羽根は宿り、彼らの戦いを後押しして

いく。

「必殺マジシリーズ」

そして、大きく口を開けて迫りくるガオウライナーに向けて、真剣な表情になつたサイタマが赤い拳を構える。

その身に宿る最強の力、その全力を一転に集中させ、最強の男はその一撃を放つた。マジ殴り

直後、街中のありとあらゆる場所で、ヒーローたちの全力によつて凄まじい爆発が発生し、衝撃と轟音が撒き散らされる。

ビリビリと震動が走り、街中を蔓延つていた怪人達が全て討ち取られ、跡形もなく消滅させていく。その中から、ヒーローたちに宿つたいくつもの羽根が再び飛び立つていった。

「俺の……俺たちの必殺技……!?」

羽根はもう一度ミライの元へ戻り、ミライの持つ剣の刀身に宿つていく。

外見も年齢も、信念さえも異なるヒーロー。彼らがそれぞれ持つ色に染まり、力を蓄

えた剣は、まるで虹のような眩しい光を放ち、世界を照らし始めた。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

「うおりやああああああああ!!」

雄叫びとともに、七色に輝く剣を振り上げたミライが駆け出し、牙王に突撃していく。応戦しようと手を伸ばした牙王の胸に、肩に、腹に、全身にミライの放った斬撃が食らいつき、夥しい数の傷を刻んでいく。目にもとまらぬその連撃が、驕り高ぶつた破壊者を叩きのめした。

「オールスター・バージョン」

最後に真下から刀を振り上げ、牙王を天に向かって吹き飛ばす。牙王の体を真つ二つに斬り裂くその一撃は、天に集う暗雲をも切り裂き、真つ青な空を切り開いてみせた。

「喰われるのは……俺の方か……!!」

呆然とした様子で呟いた牙王は、次の瞬間眩しい光に包まれ、爆炎を噴き上げて四散する。

途端に、辺りに充満していた邪悪な気配が霧散し、異変が起ころる前と同じ平穏が霧囲気が取り戻されていった。

「空が……」

「怪人達も……消えた」

町の外に避難していた住人達は、カツと頭上から照り付けてくる陽の光に、広がる青空を凝視し、あつけにとられた様子で立ち尽くす。

それが意味する事実に、人間達の表情に安堵と喜びが蘇つていつた。

「勝つた…勝つたんだ…!!」

「ヒーローが勝つた！」

一つ、二つとこぼれていく歓喜の声は、やがて大勢集まり、大気を震わせる大喝采に変化する。

街中に響き渡る勝ち鬨の声に、挑むべき敵が消えたことを確認したヒーローたちは、ようやく一息ついた様子を見せた。

「磁場の乱れも落ち着いてきた……もうこういうややこしい相手はこりどりだよ」

童帝はほつと安堵のため息をつき、少し痛む目元を指で押さえる。

得物を担いだアトミック侍と金属バットも、晴れ渡る空を見上げて氣だるげに肩をすくめた。

「嬢ちゃんの方で決着がついたか…」

「おおくすげえなあいつ」

弱々しく、頼りなかつた少女が見せた根性に、現役ヒーローたちは感嘆の声を上げる。ビルの上から舞い降りてくる少女の姿はやはり小さくも、その背中は少し、大きく見えた。

「こりやまた派手に暴れたのお。後処理の方が大変そうじや」

「やはりやるわね、あの子。本気でほしくなってきたわ」

バングも感心した声を上げ、フブキは意味深な笑みを浮かべて腕を組む。

そんな彼らをよそに、火炎放射器を収納したジエノスは、いつも通りの気の抜けた顔になつたサイタマを見つけ、急いで駆け寄つていった。

「先生…!! お疲れ様です」

「おう。今回はやたら手ごわかつたな…」

長く待ち望んでいた、自分が苦戦する相手。自分がヒーローであると実感できる相手と戦えた彼は、終わつてしまつたことに若干の寂しさを覚えながら顔を上げる。

その先にいる、黒幕を討ち取つた若きヒーローを見つめ、サイタマはふつと軽く笑つて背を向けた。

「んじや、帰るか」

「はい……つて、え？」

振り向くことなく歩いていくサイタマに、思つていた反応と異なつたジエノスが啞然とした顔を向ける。

しかしそれでもサイタマは立ち止まらず、自宅に向かつて黙々と歩き去つていった。

『やつたな、ミライ!』

「うん…！ ありがとう：みんな！！ …あれ？」

アスファルトの上に降り立つたミライは、共に強敵と戦つてくれた仲間に心からの感謝を示し、満面の笑みを見せる。

だがすぐに、少女の目は一人の男の姿を探し、不安げに揺らぎ始めた。

「あの人は…？」

「いたぞ！！ あの子だ！！」

姿の見えない、今もつともお礼を言いたい人物を探すミライは、次の瞬間無数の人々に囲まれていた。

民間人に、報道関連の者達、またはスーツを着た男たちと、大勢の人間が一斉にミライに向かって押し寄せてきたのだ。

「すぐかつたぜ嬢ちゃん！！」「ファンになりました！！ 握手してください！！」「どうやつて勝つたんですか？」「その強さは一体どこで…？」「ヒーロー協会には所属していないんですねか？」「ぜひ…ぜひ君こそヒーローになつてほしい！！ 特例で試験はパスしてもいい！！」「おい、どけよ！ 顔が見れないだろうが！！」「テレビ局の者です！！ 取材を！！」

皆口々に、勝手なことばかりを口にするため、誰が何を言つているのかもわからない。あまりの騒音に、ミライの声も届きそうにない。

早くその場を離れたかつたミライだが、一步たりとも動けなくなってしまった。

『へつへつへ・人気者は辛いな、ミライ?』

「ちょ・ちょつと、どいて下さ…」

茶化すモモタロスに応える余裕もなく、ミライはある男を探して包囲網をかき分けようとする。

その日が不意に、背を向けて歩き去っていく白いマントの背中を捉え、大きく目が見開かれた。

「待つて…! 行かないで! まだ…まだ話が…!!」

小さく見えなくなつていく男を、ミライは必死に呼び止めようと叫び続ける。

それでも彼は、ミライに一瞥を繰れることもなかつた。

「――!!?」

懸命に口から逃る声は、人々の喧騒に阻まれ、虚しく空へと消えていつてしまつた。

二十四撃目 次の駅は過去か未来か

穏やかな風が吹き抜ける、無人の街乙市。

あちこちに怪人の残骸や尖塔の跡が残る、いつもと変わらない風景。

過去を改変しすべての破壊を目論んだ敵による、世界存亡の危機を乗り越えてもなお、変わらない光景がそこにあつた。

「先生、また手紙が山になつて届きましたよ」

どさつと、箱いっぱいに敷き詰められたはがきや封筒の山を運び、ジエノスがサイタマの前に置く。

うんざりするような量を前に、サイタマは実際にうんざりした表情を見せた。

「…いいよもう、どうせ全部お前あてだろ?」

「いえ、一応ヒーロー協会からの通達もあるようなので、まとめて持つてきました」

「通達う?」

ジエノスが差し出した封筒には、たしかに協会から出されたものであることを示す印刷がしてある。

訝し気に眉を顰めるサイタマに代わり、ジエノスが封筒を開けて同封されていた通知

を読み上げた。

「今回の事件では、ほぼ全てのヒーローが出動していたため、ヒーローランキングの変動はないようですね。上位のヒーローの活躍も同程度のようで、S級のランクにも変化はないです」

「ふーん」

「それとは別に…」

要点だけを拾っていたジエノスの表情が、僅かに顰められる。

それに気づいたサイタマが視線を向けると、ジエノスはやや声に棘を交えながら告げた。

「非公認ヒーロー、電王ことミライに関する情報を求められています」

それを聞いたサイタマの表情が、若干不機嫌そうに顰められる。

以前、ヒーロー協会の存在を知らず、誰からもヒーローと認知されてなかつた自分がいるのに、あの少女の事はヒーローと認知しているのか。

若干納得いかない感覚を覚えながら、サイタマは大人げなく喚くことなく、ジエノスの話の続きを待つた。

「今回の事件のきっかけでもあり、解決に導いた張本人ですからね…あれだけの戦力を有したヒーローは、協会としても見過せないのでしょう」

「……そつか」

面倒くさそうに頬杖をつき、サイタマは調子のいいことを頼んでくる協会の連中に呆れる。

言いたいことはわかる。協会の連中の目が節穴なのはさておき、かなりの実力を持つた逸材を確保し、同時に監視しておきたいのだろう。

「じゃ、知らねえつて返しといてくれ」

「それはもちろんですが…」

だがサイタマは、それを軽く一蹴する。

協会の事を知らなかつた自分とは違い、少女は協会には属さず、別の守護者としての役目を担つてゐるのだ。二足の草鞋を履く余裕はないだろう。

それを理解しているジェノスには一つだけ、納得できない事があつた。

「会わなくてよかつたのですか？」ずっと先生を呼んでいたようですが…

「別にいいよ。あの中に入つたら完全に空氣読めない奴みたいになるだろ」

「ですが：先生の尽力があつてこそその事態の収束ですし…」

「んなわけねーだろ」

いつも過剰にサイタマを持ち上げてゐるジェノスだが、今回サイタマはそれをはつきり否定する。ジェノスに向けてゐる目も、大きく呆れた様子のものだった。

「今回頑張ったのは、最初から最後まであいつだ。俺はちょっと引つ搔き回してただけで、あの戦いで一番ヒーローやつてたのはあいつらだ」

「どこか羨ましそうに、サイタマは語る。

他人の成果を横取りなんてしたくないし、本気で自分が何か貢献したとも思っていない。自分がやつたのは、キングたちと同じその他大勢とともに協力したということだけだ。」

若干物足りなくもあつたが、それはそれでやり甲斐はあつたと、ひどく久しぶりにサイタマは思っていた。

「…あんだけあつた後だと、流石に怪人も大人しくなんのかな。全然怪人関連のニュース出てこねえ」

「ヒーロー協会の総力をあげた戦闘でしたからね。戦力を顧みて、一度様子見をしているのかもしません」

「じゃあ、やっぱ暇になるな」

ジエノスの報告が終わつてしまふと、今度こそ何もやることがなくなつてしまふ。

この虚しさをどうしたものかと思つていたときだつた。

「……これは」

「ん？　どうした？」

ゴロンと寝転がったサイタマの目に入つたのは、手紙の山に紛れていた一枚のハガキ。

どこから紛れ込んだのか、かなり古いものに見える偶然目に入つたそれを取り出したサイタマは、訝し気にそれを見下ろした。

「誰からでしようか……宛先も名前もありませんし」

黄ばんだ紙は、一体何十年前から送られてきたものなのだろうか。表面には何も書かれていないそれをひっくり返したサイタマは、裏に書かれていた一文に、ぼけつとしていた目を小さく見張った。

『ありがとう！ 僕のヒーロー！』

決してきれいとは言えない、しかし書いた時の想いがうかがえる力強い字。

たつたそれだけ書かれた、差出人不明の手紙を見つめていたサイタマは、口元に笑みを浮かべるとおもむろに立ち上がった。

「……応、パトロールにでも行つてくるか」

「今からですか？ 今日くらいはお休みになつても……」

「いや、いいつて。……後輩が頑張つてゐるのに、俺がサボつてる場合じやねーだろ」

不思議そうに見上げてくるジェノスに告げ、ヒーロースーツに着替えたサイタマはいつもよりやる気を見せながら歩きだす。

その背中はまるで、自分もまけていられないと語つてゐるようだつた。

「頑張れよ、ヒーロー」

そう虚空に向けて告げ、サイタマは扉に手をかけ、光の中へと歩き出していく。未来のファンであるあの少女に負けない、最高のヒーローであるために……。

だがその勇姿は長く続かず、ヒーローは次の瞬間壁に叩きつけられていた。

「ぐへっ」

サイタマが扉を開けようとした直前、見知らぬ少女が飛びこんできて、サイタマと衝突し吹っ飛ばす。

思わぬ事故にサイタマは、せつかく燃えていたやる気が一気に鎮火してしまったのを感じていた。

「なつ：何だ？？？ 何者だ？？？」

「あ、あれ？？？ ハゲマントはどこだ？？？ せつかくば一ちゃんに教えてもらつて来た
のにいなかよやつべー！」

突然の事態に固まつていたジエノスが我に返り、警戒をあらわにするが、少女は辺り
をきよろきよろ見渡すばかりで話にもならない。

すると少女の背後から、青い鬼のようなどこかで見たような姿の怪人、イマジンが顔
を覗かせた。

「ユキ、その人ならここで倒れている」

「ん？ おお！ 何だよそんなところで寝てたのかよ！ 何やつてんだか」

「そりやこつちのセリフだろうが…！」

呆れた視線を向けられたサイタマは、ちよつと待てと額に青筋を立たせながら起き上
がる。

退いてしまつたやる気の代わりに、理不尽と無礼に対する沸々と怒りがわき出してい
た。

「お前なに人ん家に無断で突撃して騒いでんだクソガキ！ しかも俺を跳ね飛ばしてよ

！」

「あ、そうなのか？ 悪い悪い、急いでたもんですよ」

ぴくぴくと頬を痙攣させるサイタマに、少女はたいして悪びれる様子もなく頭をかき笑う。

また怒鳴りそうになつたサイタマだったが、それより先に少女が向き直り、サイタマの手を掴んで引っ張り始めた。

「まあ何でもいいや。とにかく早くついてきてくれよ！　ばーちゃんがあんたの助けを待つてんだ！」

「は？　ばーちゃん？　いや誰のだよ!?」

「オレのだよ！」

わけもわからず、ぐいぐいと手を引かれるサイタマが問うと、少女は誇らしげに薄い胸を張る。

その顔立ちに、サイタマはほんの少しだけ既視感を覚え、固まつた。

「オレは野上ユキ！　野上ミライの孫だ！」

告げられた少女、ユキの言葉に、サイタマとジエノスは呆然と目を見開いて硬直する。するとその視線の先、扉の向こう側に広がつていた砂漠に、聞き覚えのある音楽とともに一本の列車が停止し、扉が開いた。

「ユキにハゲ！　何してんださつさと来い！」

「早くしないと大変なことになるよ！」

「二人とも気張りやあ！」

「おひさしぶりぶりー！」

「さつさとしろ、私を待たせるな」

デンライナーの狭い扉から顔を見せてくる、数日前に共に戦ったイマジンたちが、
口々にサイタマを呼ぶ。

口を開けて立ち尽くすサイタマを、ユキは遠慮なく引っ張り出した。

「行くぜ ハゲマント！ あんたの力見せてくれよ!!」

「いや先に説明しやがれ：つてうおおおおお!!?」

「先生!!?」

サイタマの返事も聞かないまま、ユキはデンライナーに向かつて走り出す。

強引に乗せられていくサイタマを追い、ジエノスも急いでその後を追い乗りこむと、
静かにデンライナーの扉が閉じられる。

二人のヒーローを乗せたデンライナーは、甲高い汽笛を鳴らしながら、前方に続く線
路の上を走りだしていく。

彼の助けを必要としている時代に向けて。

——時の列車、デンライナー。

F
I
N

次の駅は、過去か、未来か。

最強のヒーローが向かう未来は、誰にもわからない——。